
とある転生者の過負荷（マイナス）

クズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある転生者の過負荷
マイナス

【Nコード】

N1468Y

【作者名】

クズ

【あらすじ】

一瞬にして死人になった僕。気が付けばそこは死後の世界。そこで僕は、下っ端の死後の世界の管理人みたいなのに会った。ポイントが皆無な僕は天国にも地獄にも行けず、人生をやり直す必要がある。所謂転生だ。下っ端に気に入られた僕は大量チート能力が貰うことが出来るらしい。

・・・くだらねえ

大量チートなんか要らない

そんなの、過負荷一つで十分だよ

悪いことも良いことも、僕がぜーんぶ『無かったこと』にするから

ブログ（前書き）

悔いはありません

初投稿にして始めてしまいました

駄目文ですが、どうぞ

プロローグ

人生とは唐突にことが起きるんですね。

突然ですが、僕は死にました。え、いきなりすぎる？ それなら僕を木っ端微塵に爆死させた工事用ダイナマイトに文句を言うてください。

アレは普通の日でした。僕はいつも通り日課の朝の散歩に出掛けました。

外も良い天気で、小鳥などが鳴いており、とても平和な日でした。

僕も

機嫌が上々、まさに最高の朝でした。

僕の家付近には新しくビルが建設されることになって、どのような建物になるのかワクワクしていました。

それなのに・・・

アレは一瞬の出来事でした。

いつも通りビルの前を通ります。それは別になにもおかしくありません。

いつも通りちよつとだけビルを眺めます。それも別になにもおかしくありません。

いつも通りその高い頂上まで視線を泳がせました。それも別に何もおかしくありません。

すると、いつも通りじゃない物が上空に見えました。普通より一回り大きい小石のようで、徐々に迫ってくるのが見えました。危ないなあ、と思い、普通に右へ避けました。

次の瞬間、僕の意識は無くなりました。

最後に感じたのは、とてつもない浮遊感です。

で、気が付けば真っ白な世界に居るわけですよ。上も真っ白、地面も真っ白、壁の存在さえ疑わしいくらい真っ白でした。汚れも一つとついておらず、まさに純白の景色でした。普通の人なら見惚れているところですが、生憎と僕はその様な感情はないのですよ。

ちなみにここが話の没頭部分です。

今は状況を整理しようと、さっきまでの記憶を考え直していただけです。

ホント、どこなんでしょうね。

「ギャハハハハハハ！……！」

すると、突然下品で狂気に満ちた笑い声が聞こえました。

こんな笑い方、今だにする人が居るんですか？

その笑い声は徐々に大きくなっていき、やがては一人の人物がこちらに近づいてきました。

「ギャハハハハハ！！！！ お前、最高だよ！」

その人物は、ジーンズにＴシャツという今時の若い人が着てそうな服装で、

髪は真っ赤で血の色のようにでした。靴は履いておらず、裸足のままです。

「いきなり登場して第一声が”ギャハハハハ”はどうかと思いますよ？」

的確な突っ込み。なのに赤髪あかがみ(仮)さんは大笑いしたままです。

「ハハハハ！！ いやだって、あんな死に様だと誰でも笑うだろ！ギャハハハハハ！」

死に様？ ああ、あれのことですか。

「ギャハハハ！ ああ、悪い。つい面白くてな・・・ククク。はあ、これ毎回説明すんのも面倒だけど、お前は死人だ」

そんなの明白ですよ。貴方は二次小説などを読んだことがあるんですか？

大抵の場合は死んで真っ白な世界に行く 神様に会うというパターンです。

「そんなの分かってますよ」

「へえ、状況把握が早いな。さては相当な妄想癖があるな？」

「馬鹿なこと言っていないで、早く僕を天国でも地獄にでも送ってくださいよ」

僕はもう楽になりたいんですよ。さつさと天国でも地獄でも何でもいいから送って欲しいです。

「まあ待て待て。こっちにも”ステップ”ってのがあるんだよ。まずは・・・ククク、死因からだな」

さつきからなんで死因で大爆笑してるんですか？ なんとというか、死に様で笑われると気分が悪くなります。

「お前の死因は・・・ギャハハハハ！！ 工事用爆発物投下による爆死だつてよ！

ギャハハハハハ！！ それって避ける意味がねえじゃねえか！！」

いい加減にしないと怒りますよ？ 僕だつて気は長くありません。

「お前の人生経験を調べさせてもらったけどさ、お前、親父が工事現場で爆発物を取り扱う仕事してんだろ？ それなのに爆弾で死ぬって・・・気の毒すぎるだろギャハハハハ！！！！」

そこまで笑われるって・・・

「まあ、話は終わりだ。とつとと天国にでも行きな」

あれ？　それで終わり？　こういう展開って”神のミスでした、転生させます”って展開なんじゃないんですか？

「こういう場合って”神のミスでした。お詫びとして転生させます”って展開なんじゃないんですか？」

「はあ？　なに言ってるのてめえ？　神がミスするわけねえってことぐらい

下っ端のオレでも分かるわ！　なんでもかんでも神のせいにするんじゃないねえ、

この無神論者が！」

この人は下っ端なんですか・・・想像していたのとかかなり違いますね。

ま、仕方ないですね。さっさと天国で安らかに暮らしましょう。

「ん、ちよつと待て」

すると、赤髪さんはポケットからなにやらノートのような物を取り出しました。

かなり使い込まれてますけど、なにが書いてあるんでしょうか・・・

「プ、ギャハハハハ！！！」

ノートを見ると再び大笑いを始めました。さつきから笑ってばかりですね。

「お前最高だよ！ うん、実に面白い！」

なにが気に入られたんでしょうか．．．僕はまだ貴方とは初対面ですよ？

「いいか、あの世つつーか死んだ後の世界にはポイントってのがあるんだ」

ポイント？

「ポイント．．．ですか」

「ああ。生まれた時から死ぬ時まで人間は皆ポイントを持って生活してるんだ。

悪いことをすればポイントは無くなるし、逆に良いことをすればポイントが増える。

そして、死んだ後に行く場所がそのポイントによって決まるんだ」

なんというか、ゲームみたいですね。僕はどれくらいあるんでしょうか。

「それがお前と来たら．．．ギャハハハハハ！！」

いい加減笑い声が鬱陶しくなってきました。何回も聞いていると耳障りです。

「僕のポイントになにかおかしい点でも？」

「いや、まったく無いんだよ。でも、逆にそれが面白いんだよ！
ギャハハハ！」

普通のなにがいけないんでしょうか？ 自惚れているわけではないですけど

僕は人生でなにも悪いことはしてませんよ？

「普通のなにがいけないんですか？」

「いや、だって、お前のポイントは生まれた時から一切変わってないんだよ！

つまり、生まれてから一度も良いことも悪いこともしてねえんだよ

！ それって

ある意味不可能じゃね？ ギャハハハハハ！」

言われてみれば、僕の人生ではあまり良いことも悪いことも起きてませんね。

普通に生まれて、普通に生活して、普通に生きていましたからね。

親戚や親が亡くなったりした時でも泣いた覚えはないですし、ただ寿命が僕より早く訪れたとは思いませんでした。それはある意味

大罪だと思いますけど。

「そしたら僕はどうなるんですか？」

「それが分からねえんだよ・・・これって今まで始めてのことだし、

オレも対応の仕方が分かんねんだよ。ちょっと待ってろ、今調べとくから」

すると、赤髪さんはポケットから小さいながらも分厚い本を取り出し、

ペラペラとページを捲り始めました。

「えーと．．．あつたあつた、”死人の扱い書”」

僕はゲーム機ですか。

「．．．おいおい、マジかよ．．．」

赤髪さんはなにやら驚いた表情になりました。

どうかしたんでしょうか？

「えーと．．．いいか、さっきも言ったと思うがお前のポイントは生まれた時

からまったく変わってない。つまり0のままなんだ。大抵の奴はポイントが0より

多かった時は天国で、0より低かったら地獄に行くんだ。でもお前はポイントが0

のまま。どちら向きでもないからどちら側にも送れない」

うんうん、つまり？

「つまり．．．お前はこれから人生をやり直す必要がある」

．．．はい？

人生を一からやり直す？　なに刑事ドラマの主人公が犯人に言うセリフ

みたいなことを言ってるんですか？

「どういう意味ですか？」

「お前はそのままもう一度生を受けることになる。その年齢のまま、

その状態のまま再び生き返る。所謂転生だ」

へえ、もう一度僕は生きれるんですか。周りにまったく干渉だったのが

この後に及んで役立ちましたね。

「ただ、この場合は幾つか条件がある」

条件？

「取り扱い説明書での条件は三つ。

生き返る世界はランダムに指定される。元々の世界かもしれないし、過去の世界かもしれないし、まったくの別世界かもしれない。

生き返った後はなんとしてでも寿命で死ななければならない。

もし事故や殺人で死んだ場合、お前はそのままずっと生死の狭間を永久に

さ迷うことになる。

死んだ後のポイントで今後が決まる。

さっきも話したがお前のポイントは0のままだ。つまり、良く生きれば天国で過ごせるし、悪く生きれば地獄で過ごすことになる。

再び0のままだと？と同じく生死の狭間に突き落とされる。

以上だ。分かったか？」

うーん、中々と厳しい内容ですね。気をつけないと天国か地獄に簡単に傾くような点数ですしね。

「分かりました」

「そしてだ、これは久しぶりに爆笑させてくれたお前への礼だ。よくある大量チートってのをやるよ。何個でもいいから好きに選べ」

ああ、あのテンプレートの展開ね

うん、でも僕の考えはもう纏まっているよ

「そんなのいないよ」

「は？」

「僕に大量チートなんてそんな面倒なものは要らない。いや、”必要ない”と言った方が正しいかな」

「必要ないだア？ てめえ、おれ本気で言ってるのか？ お前も健康な高校生男子なら大量チートぐれェ欲しいだろ？」

ううん、全然

僕が欲しいのは”アノ”能力一つだけだよ

「僕が欲しいのはとある一つの能力だ」

「ほオ、それはなんだ、言ってみろ」

間を入れて、僕は笑顔で能力名を言う

「オールフイクション
大嘘憑き。それがその過負荷マイナスの名前だ」

「おーるふいくしょん？」

なんだ、知らないのか？

週間少年ジャンプの愛読者なら多分有名なチート能力なのに

「オールフイクション
大嘘憑きの能力は、『現実を虚構にする』すべてなかったこと。人類史上最低の過負荷マイナスです」

「現実を虚構にする？ おいおい、どんなチート能力だよそれ？
大量チートは要らねえって言った癖によオ。それに、さつきから言
つてる

過負荷マイナスってなんだよ？ 聞いたこともねえぞ」

「過負荷っていうのは、人間が稀に生まれながらに持っている才能のつらみ
の呼び名です。自分にとって利益プラスになるのが異常、自分にとって不
利益マイナス

になるのが過負荷マイナスって呼ばれています」

僕が過負荷について説明すると、赤髪さんは「なるほど」と手を叩いて頷く

「そして、過負荷を持った人間は生まれながらの敗者で、不幸にしか耐えないような人類の屑です。僕にピッタリでしょう？」

過負荷は一見便利そうに見えて実はそうでもない

一度でも過負荷になれば一生幸せになれない、無才能で負けることしか出来ないような人間になってしまっんだ

ま、僕にはそんな関係ないけどね

「・・・ギャハハハハ！！ 最高だよ！ お前、本当に面白い！

まさか自分の貰う能力が自分を不利にする能力なんて、傑作だ！ うん、気に入ったぜお前！ 分かった、お前にその大嘘憑きとやらをやるよ」

赤髪さんは僕の胸の辺りに手を置いて、目を閉じなにかを唱え始めた

すると、体の中に突然なにかが送り込まれるような感触に陥る

その感触が終わると、僕は自分に騒然とした

自己憎悪、劣等感、世界のくだらなさ

自分は最低だ、無才能だ、負完全だ

これが大嘘憑^{マイナス}きの力、なのか．．．

「終わりだ。ついでに一つだけ能力を追加させてもらったぜ。なあに、くだらねえチート能力じゃねえよ。その能力の元々の所持者が使っていた能力だ」

大嘘憑きの元々の所持者が使っていた能力？

それってもしかして．．．

「『ブックメーカー
却本作り』」

「お？ 知ってるのか？」

知ってるもなにも、それこそ

大嘘憑き以上に最低の過負荷じゃないか

「『ありがとう赤髪さん』『これで僕は負^{かんぜん}完全になれた』」

「喋り方が違わくないか？」

過負荷というか却本作りの所為だよ

あの過負荷の効果を受けている人は皆こんな喋り方と思うよ？

「そついえばお前、名前はどつするんだ？」

名前、か．．．

話に夢中になり過ぎて考えてなかったな

「『前世と同じじゃ駄目なんですか？』」

「悪いがそりゃ駄目だ。他を選びな」

でも、過負荷として生きるのなら、
それに相応しい名前が必要だ

しかも、『大嘘憑き』と『却本作り』を持っているんだ

となると名乗る名前は一つしかないだろう

「『球磨川』」

「ん？」

「『球磨川^{くまがわ}』『そう名乗るよ』」

「オツケー。じゃあ名前は？」

流石に同姓同名は嫌だな

だって、それだと『僕』という過負荷^{こしん}じゃなくなるだろう？

”球磨川禊”に取り込まれて”僕”という存在が無くってしまう

「『うーん．．．』『じゃあ雪^{ゆき}で』『流石に同姓同名は嫌だから、
限りなく近い名前を選ばせて貰ったよ』」

「球磨川雪ねえ。くまがわ そとぎ うん、良いんじゃないの？」

決定、だね

「『ところで何時転生するんだい？』」

「今だ」

すると、赤髪さんは間を入れることなく僕を蹴りました。

いきなり不意を突かれたので必然的に僕の体は倒れる。

でも、地面に落ちるはずの背中が突然浮遊感を感じました。

下を見ると、そこには大きな穴。中は暗闇しか広がっていません。

「『せめて合図ぐらいくださいよ．．．』」

ちよつとした愚痴を零し、穴の中へと落ちていく。

「頑張れよー！ー！！」

最後に赤髪さんの声援が聞こえました。

さて、僕は一体どこの世界に送られるんでしょうか．．．出来れば元の世界がいいんですけど、そう都合良く事は運びませんしね。

ああ、ノンビリとした世界に行きたい．．．

まあ、どんな世界でも良いけどね

どんなことが起きても、僕がゼーんぶ『無かったこと』にするから

プロローグ（後書き）

とても長いプロローグでした

過負荷が好きで始めた小説です

どうぞよろしくお願いします

一話 『んじゃ』『また明日とか!』（前書き）

駄・目・文

自分の駄目文さに本当に呆れます

ああ、誰か文才を分けてください

初めて感想をくださった方、評価してくださった方々、
ありがとうございます

「話 『んじゃ』『また明日とか!』」

気が付けば僕は、遙か上空へ聳える建物の裏に倒れていた

体中に鈍い痛みが走っていて、頭痛も少々ある

僕は…生まれ変わったのか…

あまり実感が湧かないな

でも、事実僕は死んで、再び生き返った

こんな週間少年ジャンプに出てきそうな展開、
実際にあるんだね

「『痛たたた…ここは何処だろう?』」

死から開放感から思わず独り言を呟いてしまう

さて、僕の新しく来た世界はどうなんだろう

立ち上がり、辺りを見回してみる

幾つも聳える高層ビルと、隅で道を掃除するロボットのようなもの

そして、僕の世界では見当たらなかった電車などが幾つか見える

この世界はどうやら僕の元の世界と似ているらしい

少々技術だけ進んでいるみたいだけど

「おーい、その君！」

路地裏から観察していると、建物の影から突然声を掛けられた

そちらの方向を向いていると、一人の学生らしき少年が居た

学生服を着ていて、腕には緑色の腕章をしている

誰だろう？

「『ん？ 僕？』」

「ッ…！」

僕もそう少年に言うと、あの子は一瞬怯えたように見えた。

その表情は恐怖から軽蔑と憎しみの目に瞬く間に変わった

僕が他人と会話するだけで恐れられ、嫌われる…か

これが過負荷の欠点^{みりよく}なのか…

「この辺りで大きなエネルギー反応があつたと
通報があつただけど…君はなにか知っているのか？」

丁寧な口調でも表情はかなり警戒している

大きなエネルギー反応ねえ…

完全に僕じゃないか

「『うーん…』 『知らない』 『少なくとも僕は無関係だね』」

「とりあえず一緒に来てもらっていいか？ 見かけない顔だし、少し話を聞かせてくれないかな…！」

そう言っ作り笑いで僕に手を差し伸べてくれる

でも、その笑顔の裏には威圧的な瞳が宿っている

僕を完全に警戒し、軽蔑し、見下すような目だ

これからは過負荷として、いつもこんな目に耐えないといけないのか…

「『…うん、いいよ』 『でもさあ、僕、少し探し物をしているんだ』」

『よかったら君も一緒に探してください』」

そう言っ路地裏の奥に手招きする

友好的な笑顔を作って、できる限りフレンドリーに言っ

「…分かった。見付かったら直ぐ着いてきてもらいますよ？」

それに応じると、少年は僕が居る路地裏の奥に来てくれる

そして、少年が目の前まで迫った時…

「がアツ!!??」

少年の腹に数本の巨大な螺子が刺さり、
更に両腕にも小さな螺子が幾つも突き刺され、
壁に縫い付けられていた

「『あは!』『迂闊だねえ学生くん、過負荷^{マイナス}相手に
無計画に近づくなんて』『でも安心して、僕は殺したりはしないか
ら』」

「てめえ...!」

何本も螺子が突き刺さっているのにも関わらず、少年は僕を睨み倒している

「『良いのかなあ』そんな態度をとって?』『君の命はもう僕の手
の平の中っていうのに』」

すると、今度はさっきより数倍大きい螺子を取り出して、少年の頭に近付ける

その行動に睨んでいた少年は涙目になる

「お願いだ! 命だけは助けてくれ!」

「『そんなテンプレ的な誤り方をされてもなあ...』『もう少しオリジナリティのある
謝り方をしてくれないと、僕も助ける気が失せるなあ...』」

「頼む! なんでもするから!」

慈悲を悲願してくる少年

そんな少年を、僕はただただ笑いながら見ている

なんだろう、この感じ？

他人の悲痛の表情を見ると、不思議と満足した気分になる…

人を不幸にすることで、僕は満足できる

そうだ… そうなんだよ

過負荷はいつも迫害される、ならどうすれば

他人に平等に接してもらえる？

他人を自分と同じ位置に堕…とせばいいんだ

「『ホント？』 『なんでもしてくれるの？』」

そう訊くと、少年はブンブンと頷いた

「『うーん、どうしよう？』 『他人に命令できる機会なんて滅多に無いからなあ…』」

『あ、そうだ！』 『うん、なにを頼むか分かったよ！』

『死んでくれない？』」

そう言っ、僕はその螺子を少年の眉間に
ぶっ刺した

絶望の表情に染まった少年はそのまま、
氣力を無くしたかのように
喚くのをやめ、目を閉じた

「『…なーんちゃって！』よく漫画でこ
ういう台詞があったか
ら、僕も

一辺言ってみたかったんだあ！」

そう言っ、僕は一つずつ少年の螺子を抜き取る

全部抜き終わると、僕は意識の無い少年に向
かってこっ言っ

「『だいじょーぶ、君のその傷は』全
て無かったことになっ
たから」

返り血塗れになっ顔で僕は、満面の笑顔で
こっ言っ

~~~~~

風紀委員第177支部は、大騒ぎしていた

先ほど見回りに向かった同僚の一人が、  
路地裏で気を失っていたのだから当然とも言えるが

一部の者は同僚を襲った犯人の行方を追い、  
その他一部の者は精神錯乱状態に陥っていた  
同僚を、静めようと沸騰している

まるで臨死体験から抜け出した恐怖のような  
錯乱状態に陥っており、その惨状は凄まじかった

「一体誰がこんなことを…」

錯乱する同僚を見てそう呟くのは、  
第117支部所属の初春飾利

圧倒的なコンピューター技術を持っており、  
そのハッキング技術は風紀委員でも重宝されている

あまりにも様子のおかしい同僚を他所に、  
初春は気分を変えようと路地裏から出た

そこで目に飛び込んできたのは、路地裏の出口の直ぐ後ろ、  
つまり自分の真横に居る少年

その少年の顔を見て初春は戦慄していた

少年の顔は、まさに返り血塗れだった

「『ん？』 あ、やべ！』」

初春を見るや否や、その少年は逃げるように走り出した

「あ！ 待つてください！」

慌てて初春はその後を追いかける

普段は身体能力が低く、逃げる犯人

を捕まえることなど到底できない初春だが、  
なぜかこの少年にはどんどん追いついていった

そして、ようやくその少年の肩を掴んで

捕まえた

「『ハアツ…ハアツ…ハアツ…』 やっぱ人類<sup>マイナス</sup>最低の僕が  
他人から走って逃げ切るなんて無理があつたかあ…』」

声を発した途端、初春はかつてにない気持ちに襲われた

ただ声を発しただけ

それだけで、この少年に対して説明しようのない憎しみを抱いた

「この人は気持ち悪い」と心の中で思いながらも、その  
少年に声を掛けた

「あの、貴方は誰ですか？ どうして逃げるんですか？」

「『だって、僕って証明書とか学生書とかまったく無いんだよ』  
『見たところ君達って警察みたいな連中だろ?』 『それなら捕まりたくないから逃げるのが普通だろ?』」

予想外のことを発した

証明書などが無い場合

つまりそれは不法にこの学園都市に侵入したという意味

学園都市の周りには巨大な壁が張り巡らされていて、  
進入する方法などは殆どなかった

「『あ、やべ』 『僕としたことが、返り血を拭いていないじゃないか』  
『あはは、いけないいけない』 『服は洗ったつもりなだけだなあ』」

自分の顔の惨状に気付き、乾いた笑い声を出しながら、  
少年は自分の顔を袖で拭いていた

あまりに堂々と証拠を隠滅しようとする少年に、初春はただ呆れるばかりだった

「あの、一緒に着いてきてもらえませんか?」

「『嫌だ』 『だって今日、ジャンプの発売日じゃん?』  
『僕はこの日のために一週間を生き抜くんだよ』」

「そ、そんなのは後にしてくださいよ！」

馬鹿馬鹿しい理由に怒鳴るが、  
それでも少年は笑みを崩さない

「貴方の名前は？」

「『球磨川雪』 最近ここに来た高校生さ」

「では球磨川さん、一緒に着いてきてください。  
証明書や不法侵入の件では、そちらで訊きますので」

言われるがままに連行される球磨川

元々過負荷の所為なのか、身体能力が  
女子中学生のはずの初春より低いため、  
抵抗せず素直に着いていった

いやいや、ミスったぜ

興味本位での学生くんを放置した場所に行ったけど、  
まさか警官で溢れ返っていたなんて



しかも、あの学生くんもまさか警官の一人だったとは…  
ついてないぜ

今回は他の警官も多いから、僕は素直に連行された

本当は螺子伏せた後で逃走したいんだけどなあ

「『君も警官なのか？』」

「いえ、私は風紀委員という組織に所属しています。まあ、  
所謂学生で構成されている警察です」

「『へえ。ちなみにあの倒れていた学生くんも…』」

「風紀委員のメンバーです」

あはは、やっぱそうか

結局こうなってしまうのか…

「ではさっそく、貴方について話してもらえますか？」

風紀委員第177支部つて所の一室に連れて行かれた僕は、  
そのまま事情聴取という名の尋問を受けた

「『さっきも言ったけど僕は球磨川雪』『ついさっきここに来た

ばかりの

高校生さ』『よろしく!』」

「私は初春飾利といいます。さつそくですが球磨川さん、貴方はどうやってここに来たんですか?」

初めて自己紹介してくれた初春ちゃん

うーん、見るからに年下の女の子に尋問されるのは少し嫌だけど、しょうがないねこは

「『知らない』 気が付いたらあの路地裏に倒れていたんだ』」

「どうやってここに来たか知らないんですか? (記憶喪失?)」

まあ、神様に送り込まれたなんて言えないし

「『うん』 だから僕はここが何処なのか、ここでの文化や常識はなんなのか、さっぱり分からないんだよ』  
『説明してくれば僕は助かるんだけど…』」

「そうですか…此処は”学園都市”と呼ばれている科学の街です。ここでは科学的に解明された超能力を研究していて、ここに住んでいる殆どの人間は学生です」

おいおい、まるで少年漫画のような世界じゃないか

それに、学園都市か…どこかで聞いたことがありそうなんだよねえ…

僕はジャンプ愛読者だから他ではあまり覚えが無いけど

「『へえ、それはまた僕の少年心を撥るような場所だね』」

「でも、本来ここは正式な手続きをしないと入れないんですけど…」

まあ、僕はあの赤髪さんに落とされてきたからね

正式な手続きなんて一切働いていない

「『そういうのは何処でやるのかな？』『悪いけど、そうと分かれば僕は』

一刻も早く手続きを済ませてさっさと平和に戻りたいんだけどなあ』

その方が面倒なことにはならなさそうだしね

新しい世界に來た初日で不法侵入者で指名手配されたらそれこそ  
過負荷<sup>マイナス</sup>以上に最低<sup>マイナス</sup>だよ

「あ、でも…（この人って一応不法侵入者だね？）」

「『まあまあ、そういう堅いこと言わないでよ』『そういう人は友達が減るぜ？』」

「よ、余計なお世話ですよ！」

僕なりの忠告のつもりだったんだけどなあ

「手続きはここで済ませてください。（記憶喪失なら良い、かな？）」

そう言って、なにか住所を紙に書くと、僕に渡してくれた

「『ん』『ありがとう』」

うん、じゃあさっそく

「『じゃあ、さようなら』」

この部屋から出ようとする

「あ、待ってください！ まだ話は終わっていませんよ！」

でも直ぐに扉の前までダッシュされ、出口を塞がれる

あはは、幾ら過負荷とはいえ、女子中学生に  
出口を塞がれて出れないなんて、滑稽な話だぜ

本来ならここで彼女を螺子伏せてでも突破するけど、  
今日の僕は気分が良いんだ。ここは見逃してあげよう

「『ええ…』『僕は早く週間少年ジャンプを買いに行きたいんだけ  
ど』」

「手続きを済ませるって言いませんでしたっけ!？」

あ、それもういじでやっておくよ

「はあ…もういいです。貴方は悪気があった  
わけでも無いと思いますし、もう帰っても良いです」

あは、とうとうそつちが折れたね

面倒臭かったけど、まあこれで不法侵入者で  
無くなるのなら、それで良いけどね

「『うん、ありがとう』『じゃあね』」

そう言つて僕は扉に手を掛ける

あ、そういえば彼女に言つておかないといけないね

「『君、忘れてると思うから言つておくね?』」

「え、なんですか?」

「『君の同僚を螺子伏せたのつて、僕だぜ?』」

そう言つた途端に、彼女は動きを止めた

啞然と戦慄した表情のまま僕を見つめている

その惨状に、僕は笑みを浮かべながら背を向ける

「『んじゃ』」  
『また明日とか!』」

一話 『んじゃ』『また明日とか!』（後書き）

駄・目・文

大事なことなので前書きと後書きで合わせて二回書きます

主人公を原作に組み込ませるのがここまで難しいとは思いませんでした

それに、初っ端から思いつきり暴れちゃっていますし

それでも基礎の身体能力は殆ど球磨川本人と変わりません。  
却本作りも加わった所為で、その身体能力は女子中学生をも  
下回っています（笑）

はあ、もっと文才が欲しい…

二話 『僕は被害者だ』（前書き）

今回は少し短いです



## 二話 『僕は被害者だ』

風紀委員の支部から離れて数時間が経っていた

今は適当に学園都市を散歩しているんだけど、  
その暇な時間で僕は考えたんだよ

この世界は少なからずとも元の世界とはかなり違う

超能力なんて技術があるんだ、幾ら”科学の街”って  
言われていてもこれはかなり非科学的だ

でも、そこで僕はあることを思いついたんだ

僕はもしかしたら、一人じゃないと思う

この世界は少なくとも僕の世界とは違う。

超常的なことは起こりえるし、非科学的なこともある

それなら、つまり、僕以外の他の過負荷も存在するかもしれないんだ

幾ら世界は違ってもこの世界のくだらなさは変わらない

理不尽さも何も変わらない

そんな腐った世界なら、僕以外にも過負荷として  
生まれてきている人が居るのかもしれない

だから僕はもう、この世界でやることは決まった

僕は、この学園都市に住む過負荷を全員纏め上げてみせる

そして、超能力者のエリート共に思い知らせてやろうぜ

マイナス  
人類最低の素晴らしさというものを

数分後

どうしよっかなあ

幾つものビルが並び、大勢の人で賑わっており、  
ショッピングモールや飲食店なども多数並んでいる  
場所を、僕は一人で歩いている

数多くの建物から発せられている電気などの光の  
所為で、夜とは思えないほど明るく、活発だった

そんな賑やかな道を僕は歩いているんだけど…

金、無いよ

元々僕は这个世界に来た時はなにもなかった

携帯は勿論、お金やパスポート、証明書なんて皆無だ

服装は神様がこの学生の街でも違和感が無いよう、  
学ランになっていた。赤髪さんなりの優しさかな？

はあ、これじゃあ週間少年ジャンプすら買えないじゃないか

何気に周りを見てみると、僕は面白いものを見つけた

大勢の不良っぽい高校生が、恐らくは中学生の  
一人の女の子を囲んでいる

どこから見てもカツアゲか、ナンパだね

今時そんなことする連中が居るなんて、  
ちよつと時代遅れとは思わないのかな？

…あ

あはは、いいことを思いついたよ

ここが漫画の世界だったら、多分”ニヤ”って効果音が出たと思うよ

「『やつほー！』『皆さん、こんばんは！』」

お気楽的に、友好的に不良たちに挨拶した

突然声を掛けられたのに驚いているけど、  
あの女の子を含めて全員の視線が僕に移る

「ああ？ 誰だてめえ？」

「『ただの通りすがりの高校生さ』 『それより、僕』  
『君達に訊きたいことがあるんだけど、言っていいかな？』」

一人の不良が僕を脅すかの様に睨んでくる

それにも特に同様することなく、

僕は話を続ける

「『女子中学生をナンパするってことは  
つまりさあ、君達全員ロリコンって意味？（笑）』」

僕の発言に周りの空気が凍ったかのように静かになった

不良たちは微動だにせず、僕を見つめている

やがて、硬直が段々と解けていき、その表情は怒りに染まっていく

「てめえ！ ふざけるんじゃないよ！」

全員が僕に殴りかってくる

あまりのそれなりに大人数だけど、特に問題は無いね

「あ、危ない！」

さっきまでずっと突っ立っていた女の子が  
心配したような声を上げる

あはは、まあ見るからに貧弱そうな草食系の僕が  
ガラの悪そうな不良に大勢で襲われたらそう思うよね

次の瞬間、不良たちの全員が一人残らず、  
幾つもの巨大な螺子で地面に螺子伏せられていた

「なッ！？ グ、ぎゃああー！！」

体中が螺子で貫かれている惨状を見て、  
不良の男の子たちは全員痛みで声を上げる

「『あは！』『馬鹿だねえ』『人の危険度を測らず攻撃してくる  
のは

とても浅はかなことだぜ？』『それに、君達から攻撃してきたんだ  
から

正当防衛ってことになれるしね』『」

ついでに僕は全員のポケットから財布を抜き取った

「『じゃあ、あばよ』」

そして、用済みになった地面に平伏している男の子たち  
全員の後頭部に、巨大な螺子が突き刺さった

「『ぎゃああああ！！！』」

一声を上げた後、辺りはシーンと静かになった

完全に計画通りじゃないか

過負荷だから自分の思い通りには行かないとは思ったけど、まさかこんなにスムーズに進むなんてね

服は返り血塗れになっちゃったけど、まあ

これは大嘘憑きで直せるけど

お金も手に入っだし、一件落着（？）

「『つて、ワオ』」

某風紀委員長みたいな声を上げると、

僕の顔面の前をギリギリ雷撃が通り過ぎた

雷撃が向かってきた箇所を見ると、僕に

向かって手を突き刺しているさっきの女の子が立っていた

「アンタ……！」

敵意丸出しで僕を睨んでくる

それより雷撃ってなんだよ？

まるつきり漫画みたいな能力じゃないか

これが超能力なんだね

これは凄い、僕の少年心をここまで攪るなんて

「『おいおい、なにをそんなに睨んでいるんだい？』」

「幾ら私が脅されてたとしても、これはやり過ぎよ！」

地面で血塗れになりながら体中を螺子で串刺しにされている不良たちを指差す

なんでこうなるんだよ…

「『あの人たちが攻撃してきた』『故に正当防衛さ』」

「自分から挑発しといて、何処が正当防衛よ！ お金だつてあいつらから盗んでるし！」

はあ、せっかく気分が良いからついでに助けてあげたのに、この仕打ちはなんだよ？

やっぱり過負荷に対しては理不尽だなあ

「『でも、事実あの子たちは僕に向かって攻撃してきただろ？』」

『貴方は僕に黙って殴られてボコボコにされなくても言っているのか?』」

「別に、私はそんなつもりで…」

「『僕は大勢の高校生たちに袋叩きにされる所だったんだぜ?』  
『それなのに僕を凶悪犯扱いするなんて、横暴だよ君は』」

『僕は被害者だ』」

「ッ〜!」

声にもならない怒りの声を上げる中学生ちゃん

それは僕が行った行為に対しての怒りなのか、  
僕に論破されたからの怒りなのかは定かでは無いけど

「ふ、ざけるなア!」

再び電撃をぶつ放してくる中学生ちゃん

いきなりスイッチの入った全力の攻撃で、  
しかも僕を殺す気満々だ

過負荷の貧弱体質である僕にこんな攻撃は避けれるはずも無く…



「『う、うわアア！！！！』」

僕は思いっきりその電撃を喰らい、  
真っ黒焦げにされた上に血塗れになってしまった

あはは、やばい、マジで死んじゃうよ

「えッ！？」

避けると思っていたのか、驚いている中学生ちゃん

「『あはは、過負荷相手に手加減無しって、えげつ無いぜ……』」

痛みと傷、そして出血多量で倒れてしまう僕

「あ、ちょっと！」

でも…

「なッ！？」

中学生ちゃんの頭上から大量の螺子が  
降り注ぎ、当たるか当たらないかのぐらいの  
距離で周りに突き刺さる

「『ふう〜、危うく痛みで気を失っちゃう所だったよ』  
『流石に無意識での使用は出来ないし』」

無傷で僕が立ち上がるのを見て、中学生ちゃんは目を見開いた

「そんな！？（幾ら手加減していても、レベル5の電撃を直撃して無傷なんて…それにこいつからあふれ出てる負のオーラ…）」

「『はあ、これじゃあ僕が益々被害者じゃないか』『ま、その方が警察にも言い訳できるし、良いか』」

「アンタ、何者？ どうして私の電撃を受けて無傷なのよ？」

「『そんなの簡単さ』『君が頑張って僕に放った電撃を』『君が自分の労力を使って僕を丸焦げにしたっていう事実を』『無かったことになっただけさ』」

「は？（無かったこと？ わけ分からないわよ！）」

僕の無能力マイナスの意味が理解できていないようだね

まあ、君みたいな能力者プラスが僕みたいな無能力者マイナスを理解するなんて絶対にありえないけど

すると、後ろからパトカーのサイレンが鳴り響いている

どうやら僕が不良たちを螺子伏せているのを見て誰かが通報したみたいだ

「『あは！』『僕もう行かなくちゃいけないよ』『じゃあまたね、中学生ちゃん』」

お別れの挨拶をした後、啞然としている中学生ちゃんを他所に僕は歩き出した

「アンタは、絶対私が捕まえる！ 捕まえて、半殺しにしてあげるから、覚悟しろ！」

歩き出す僕に向かってそう怒声を放つ

あはは、実に強者<sup>プラス</sup>のような台詞だね

でも、なんで僕ばかり恨まれるんだろう？

あはは！ 憎まれっ子<sup>マイナス</sup>だから仕方無いよね！

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』（前書き）

一人目のオリキャラ兼オリ過負荷です

もし良かったら過負荷のアイデアなどあれば感想欄に書いていただけると嬉しいです

一種の募集ですね

僕の想像力ではあまり良い案が浮かばないので、良かったらどうぞ書いてください

出来る限り採用することにします

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』

「『これください』」

「は、はい！ 625円になります！」

千円札をコンビニの店員に渡し、僕は会計を済ませる

そして、小さな袋を受け取り、そのままコンビニを出る

なにをしてるかって？ あはは、愚問だね

お金がやつと手に入ったんだからジャンプは  
直ぐにでも買わないといけないだろ？

ついでに食べ物も少し買ったし

あの中学生ちゃんとの小さな言い争いから  
一時間ぐらい経ってるけど、まったくすることが無いぜ

まず住居すら無いんだ

ま、それは正式に登録したら学校と共に  
与えられると思うけど、今は行く場所すら無い

それに他の過負荷に関しての情報もまったく無い

こんな学生みたいなお子様で溢れている都市なら  
過負荷みたいな噂も多いと思ったけど、意外と少ないらしい

訊き込みをしても僕が話しかけると皆逃げちゃうし

はあ、確かに大嘘憑きのお陰で死ねない体になったし、  
赤髪さんから与えられた課題は問題無いけど、過負荷が  
ここまで不憫だとはね

あの漫画を読んだ人は殆ど、”過負荷とか異常性が欲しいなあ”  
とか思うかもしれないけど、過負荷や異常性なんてとんでもなく不  
憫だよ

その他の人と比べるとかなりの異常性な分、避けられ  
迫害され、化け物を見るみたいな目で見られる

そんなの、常人じゃ耐えられないよ

だから過負荷や異常性を持っている人は少なからず  
性格や考え、理想が破損しているんだ

とまあ話を戻すけど、とにかく僕は訊き込みでも相手にされないんだ  
途方に暮れながら僕は深夜の道を歩く

すると、近くを歩いている二人組の興味深い会話が耳に入ってくる

《ねえねえあの噂聞いた？》

《あの噂ってなに？》

《こここの直ぐ近くにある廃墟に人が住んでるって

噂があるんだけど、その人に近づいた人は皆不運な死に遭ったんだって!」

《うわぁ! こわ〜!》

現代の女子ではもう定番の都市伝説のような噂話

でも、これはひょっとして…

「『ねえねえその二人』『ちょっと話を聞かせて貰ってもいいかな?』」

僕が話し掛けると、二人共ビクッと一瞬震えた

僕ってそんなに気持ち悪いのかな?

それともこの過負荷か、この括弧つけた話し方の所為かな?

「ひッ! えっと、なにか用かな…?」

少し震えた声で答えてくれる片割れちゃん

「『さつき話してた都市伝説の話なんだけどさ』『その廃墟って何処かな?』」

あの噂を聞けば、その廃墟に住んでる人って  
限りなく過負荷かソレに近い無能力のつうよくを持っている人だ

少なくとも過負荷側いすひがわの人間だ

それなら勧誘するのも悪くないだろ？

「あ、あっちです！」

近くにある廃棄された工場を指差して言ってくれた

見るからに”近寄るな”って異様な雰囲気を出している

あの場所は、普通の人なら確実に心霊スポットって呼んでいると思う

あはは、まあヒッキーには丁度良い隠れ家だね

「『ありがとう』『急に話し掛けて悪かったね』」

それだけ言い残して、僕はあの廃墟に歩き出す

この世界に来て一人目の僕と同類の奴

どんな最低か<sup>マイナス</sup>楽しみだよ

ちなみに後ろでヒソヒソと「あの人気持ち悪かったよね？」って話し声が聞えたのは無視しておくよ

さて、廃墟に入ってみたのは良いけど、真っ暗でなにも見えないなあ



せめて月でもいいからなにか明かりがあればなあ

「『おい！』『ここに居るのは分かってるからさあ、出てきなよ！』」

『安心して！』『僕は君の味方だからさあ！』」

試しに大声を出して所在を確認してみる

でも、それは空っぽの工場に響くだけでなにも応答は無い

留守かなあ？

すると突然、僕の後頭部に鋭い衝撃が走った

「『えっ？』」

地面に血が飛び散っていることから、僕は後頭部からかなり出血しているみたいだ

殴られるだけで血が飛び散るって、釘バットかなにかか？

「てめえ、なにもんだ？」

後ろからどこか野蛮な男の子の声が聞える

まあ殴られてるから当たり前だけど、どうやら留守じゃないらしい

「『痛ててて…急に殴るなんて酷いじゃないか』」

「勝手に人ん家に上がり込むてめえの方がひでえと思うが？」

まったく…元気な子だなあ

この子が”近づくとう不幸な死を遂げてしまう”と噂されてる男の子が少し乱暴な箇所以外は至って普通なんじゃないのかな？

「あ、それと、そこに居ると危ねえぞ？」

「『？』『どついう意味か』」

次の瞬間、僕の目の前が鉄棒で埋め尽くされていた

頭は勿論、体中になりに重い鉄棒や工場の器具が落ちてきて、多分全身の骨が骨折してると思う

後頭部どころか頭全体が流血状態だけど…

「ああ、運悪くその器具を留めてる縄が切れちまったみてえだな。ソイツは不運だな」

「『僕が丁度落ちてくる箇所に立っていたのも不運だったって言うのかい？』」

瓦礫の中から這いずり出ながら僕はその男の子に訊く

「おッ、物分りが良いじゃねえか」

這いずり出て、どうにか立ち上がった瞬間、今度は

顔をさつき感じた鋭い衝撃が直撃する

ボロボロだった僕の体は更に吹き飛ばされ、壁に激突する

激突した衝撃で壁に取り付けられていた

古い棚が壊れてしまい、上に置いてあった器具も  
全て落ちてくる

その真下に居るのは僕

つまり

「『…まったく…痛く過ぎて笑うことすら出来ないじゃないか』」

ドライバーやカッターナイフが体中に突き刺さっている

痛い

これまでに感じたことに無い痛みだ

激痛で意識が無くなりそうなくらいだぜ

でも、この過負荷を手に入れてから

不思議と痛みに耐性ができているんだよ

打たれ強いって意味かな？

「まだ死んでねえのかよ。いい加減にしてくれよ…」

呆れたように頭を掻きながら僕にスタスタと歩いてくる男の子

僕の目の前まで来ると、胸ぐらを掴みあげて  
目線の位置まで無理矢理持つてくる

「『殺すのかい？』」

「あたりめえだろ。それこそ俺の生き甲斐なんだから」  
ポケットから彼はなにかを取り出した

暗闇の中で輝くそれは、鋭く尖っている  
”凶器”。真夜中の工場に僅かに漏れている月光  
によって露になる男の子の”狂気”

「じゃあな」

そのナイフを、僕の胸に、突き刺した

心臓を貫かれた僕は、力を無くし地面に倒れる

「はあ、まったく手間かけさせやがって」

意識の途切れる少し前に、彼がナイフを  
僕の胸から引き抜き、この場を去っていくのが見えた

「ちッ、また死体の処理かよ。面倒臭えな…  
つかアイツなにもんだったんだよ？ あの喋り方と  
独特な雰囲気、まるで俺と同じみたいな…」

「『同じさ』」

「なッ!？」

男の子の周りに無数の螺子が突き刺さる

勿論、一本も当ててないけど

「『君は僕と同じだ』『同じ最低で、最悪で、負完全で、屑で、負け犬で、社会の塵で、不幸せ者さ』」

「てめえ…なんで…!」

無傷で彼の前に立っている僕に驚愕の声を上げる男の子

まあ、さっき殺した相手が目の前に立っていたら誰でも驚くよね？

「『おいおい、なにをそんなに驚いているんだい?』」

『君も同類なら分かるだろ、僕がなにをしたかぐらい』」

「意味が分からねえよ! てめえはなにをした! 何で生きてやがるんだ! てめえは俺が確実に殺したはずだ!」

曖昧に話を済ませている僕にイライラしたのか、怒りの声を上げる男の子

「『簡単さ』」

『君が僕を切り刻んだり』

『殴ったり』

『ボコボコにしたり』

『刺しまくったり』

『潰したり』

『殺したりしたことを』

『無かったことにしただけさ』

「なんだと…？」

代表的な驚き方をしてるね

何回も言うけど僕はテンプレが大嫌いなんだ

オリジナリティのもの以外は興味が殆ど無い

「『君の能力と同じ種類のものさ』 『僕が見る限り君は他人の運を最低にする能力みたいだね』 『うん、それは十分に最低で最悪な能力だよ』 『気に入った』」

「てめえ、なんで俺の能力を…」

どうやら当たりのようだね

器具が落ちてきたり、柵が壊れたり、

工具が僕に刺さったのも、ナイフが都合よく急所に当たったのも、全てこの子の過負荷が僕の運を低下させていたからなんだ

”運が悪かった”、まさにその通りだね

他人の運を最低まで低下させていたんだから

「『でも、僕の無能力は君以上に最低だ』」  
マイナス

そのまま一本の螺子を男の子の腹に突き刺した

「がアアツツ!!」

反撃されるなんて想定外なのか、避けれず痛みの声を上げる男の子

「てめエエエ!! ぶっ殺してやらアア!!」

そう雄叫びを上げているけど、痛くて

動けないのか地面に寝たままだ

「『あはは』 別にそんなに怒らなくてもいいよ』」

『そんな傷は、僕がぜーんぶ無かったことにしてあげるから』」

僕は彼から螺子を抜き取った

すると、さっきまでの傷が嘘だったかのように綺麗さっぱり無くなっていた

痛みも無くなっている点も含め、男の子はただ啞然とするばかりだった

「そんな…馬鹿な…」

「『あはは、驚いた？』 君の能力が運を最低にするのなら 』

『 すべて なかったこと 「現実を虚構にする」、それが僕の大嘘憑きだ』 オールフィクション 」

あまりにも驚愕な僕の能力の全貌に、彼はただ啞然とするばかりだった

ちなみに却本作りブックメーカーは使ってないよ？

この過負荷は禁じ手だ、あまり迂闊に使うような代物じゃない

「『まあでも、僕は別に君と戦うためにここに来たわけじゃないんだけど』」

「あア？ 俺になにか用か？」

「『単刀直入に訊くけど、僕の仲間にならないか？』」

「はア？」

僕の質問に疑問符を浮かべる男の子

今までの戦闘で僕は確信した、この子は過負荷だって

過負荷なら、仲間になろうなんて言われるのは初めてだと思うけど



「なに言つてんだてめえ？　なんで俺がお前の仲間になんなくちゃいけねえんだよ？」

「『君は恨んでいないのか、君をこんな場所に住まさせるこの世界に？』」

「ッ…！」

僕の言葉に彼は息を詰まらせた

「『君はなにも悪いことはしていないんだろ？』　『それなのに君はこんな廃墟みたいな場所に住まさせられていて、都市伝説扱いされている』」

『そんな世界を、君は恨まないのか？』」

「……………」

とうとう無言になってしまった

自分を今までずっと恐れ、迫害し、恨んできたこの世界

それについて真剣に考えているんだろう

「『僕はね、君みたいな子を集めて、とあることを企んでいるんだ』」

「とあること…？」

そして、僕は満面の笑顔で目的を話す

「『君は見下されるのが嫌なんだろう？』」

『なら超能力者を全員抹殺すればいいんだよ』  
『そうすればこの学園都市は平等で平和だ』

『君もそう思わないか？』」

「……おいおい、てめえ、頭イカれてるんじゃないのか？  
超能力者が何人居ると思ってるんだよ？ そいつらを全員殺す  
なんて、できるわけねえだろ」

「『勿論一人で出来るとは思っていないよ』 『僕は世界で一番弱  
いんだぜ？』  
『そんなラスボスみたいなこと出来ないよ』 『だから仲間を集める  
んだ』」

しばらく考え込む男の子

うーん、と唸ったりして相当考えているらしい

僕としてはYesと答えて欲しい

彼のような人材は是非とも過負荷側に欲しいものだよ

「俺になんのメリットがある？」

「『メリットって？』」

「お前のその超能力者抹殺計画、それは全部お前の望みなんだろう？  
なら俺への見返りはなんだ？」

「『…僕は過負荷なんだ』 『無論メリットなんか一切無い』  
『ただ僕が出来るのは、一つの保障ぐらいだ』」

『僕と居れば、君は世界一不幸かわいそうになれる』」

「…ときめくじゃねえか」

僕の条件にニヤリと笑みを浮かべる

一見デメリットしかないようなこの条件

でも、彼も過負荷ならこの条件の意味を理解しているはずだよ

「分かったぜ。俺はてめえの

仲間になってやる。名前はなんだ？」

「『高校三年生の球磨川雪だ』」  
くまがわ そそぎ

「高二の木更津敦だ。一年下だから、アンタの後輩ってことになるな。」  
きみなつ あつし

よろしく頼むぜ、球磨川先輩」

「『うん、こちらこそね、木更津ちゃん』」

この世界に来て始めての仲間

『ミスフォーチュン  
負運性』の木更津敦くん

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』（後書き）

まさかの途中まで主人公フルボッコ

まあ、人類最弱なので仕方ないと思いますけど

（オリ、または原作過負荷の説明コーナー）

この作品で新しく登場した過負荷はオリ・原作問わずここで説明します

まずは主人公の過負荷

『オールマイクシオン  
大嘘憑き』

『すべて なかったこと  
”現実を虚構にする”能力』

それが現実なら、それが起こったという事実を  
嘘として処理し、無かったことにする能力

所持者が死ぬと自動で発動し、所持者は実質  
死ねない体

『ブックメーカー  
却本作り』

作中に能力が使用されるまでお預けです

『ミスフォーチュン  
負運性』

周囲に居る他人の運を最低レベルまで下げる  
過負荷。その範囲は定かとなっては居ないが、  
近くに居るほど効果が強力になる

漢字の由来は不運の”不”を負に変えて、  
運勢を性って変えただけです

想像力の無い自分ではこれが限界です…

#### 四話 『無才能だ』

「それで、これからはどうするつもりなんだ球磨川先輩？」

廃工場から出てくる木更津ちゃんはそう僕に訊いてきた

彼とは行動を共にすることにしたんだ、  
まあ初めての仲間だしね

木更津ちゃんはこれから増えていく過負荷の  
副リーダー的な存在になって欲しいからね

僕の思考とかを理解してもらいたい

「『うーん、どうしよつかなあ』『僕、ここにはつい最近  
来たから部屋とか学校とかは無いんだよね』」

「どうするんだよじゃあ！？ 今日野宿でもしろっていつのか！」

僕の現在の状況を知ると、木更津ちゃんは  
驚きの声を上げ、僕に怒鳴ってきた

「『部屋を見つけれなかったらそうなるね』『まあ、君も  
似たようなものだろ？』『工場に住み着いてたし』」

「けどなあ、あそこはやっぱり寒くて寝辛いんだよ。  
ま、野宿するんなら俺はかまわねえけど」

工場で寝るのも殆ど野宿じゃないのか？

屋根があるだけマシだけど

「『明日にでも登録するからその時に部屋を貰おうよ』『ついでに学校も』」

「おいおい、俺はガツコなんか行かねえぞ。そもそも俺たち過負荷にガツコなんて必要なのか？」

ちなみに木更津くんには過負荷については大体説明した

最初はこんなおとぎ話みたいな話は信じなかったけど、本人は自分の能力や思想を考えたら納得したそうだ

これで一人目だね

せめて後三人ぐらい欲しいよ

過負荷勢力は僕を含める主戦力の五人とその他のメンバー多数が良いな

ま、そんな都合良く集まるとは思わないし、精々僕を含めて五人で限界かな？

「『ここは学園都市なんだよ？』『学校に行かないと怪しまれるかもしれないじゃないか』『僕はこれでもかなり警戒されているんだよ』」



「警戒？」

「『風紀委員の子を一人螺子伏せちゃった』」

「なにやってんだよアンタは！」

冷たいなあ木更津くんは

「『まあ証拠不十分で多分捕まらないと思うよ？』」

『その子も今は精神科の病院に入院してるから証言なんて得られないし』『なにより僕に関しての記憶も無かったことにしたから』

— 先ずは安心さ『』

傷を無かったことにしたついでに僕への恐怖以外は無かったことにしたから、僕がやったという証拠なんて何一つ無い。状況証拠だけで決められそうで怖いけど

「改めて考えると、球磨川先輩はとんでもねえ能力を持ってるんだな」

「『この能力だつて弱点ぐらいあるよ？』『一度無かったことにしたのを無かったことには出来ないし、気をつけないとこの世界そのものを無かったことにしちゃうかもしれないんだ』『ま、つまり僕は自分の中に核爆弾を抱えているんだよ』」

気を抜いて制御が雑になると本気でこの世界が無かったことになるから怖いんだよね

だって、うっかりと世界を消しちゃったら

エリート抹殺もクソもないだろ？

「ただけ出鱈目な能力なんだよ、その大嘘憑オールフイクションきつてのは…」

「『あはは、よく言われるよ』」

~~~~~

「『…ん？』」

朝の日差しが目に照らされ、僕は起きる

夜は明け、辺りはすっかり早朝だ

小鳥の鳴き声が鳴り響き、学校に登校している
学生達も見える

全員が公園で座ってる僕のことを変な人を見るような目で見てるけど、なんでかな？

涼しい朝の風が僕の服を通る

まったく、なんとも快適な朝だ

「『おい、木更津ちゃん』『もう朝だぜ？』」

「あア？」

僕の声と共に木更津ちゃんも起きる

彼は機嫌が悪そうだ、顔色も優れないし

朝は苦手なのかな？

低血圧はいけないぜ？

「『明日はさっさと起きて登録しようって
言っただのは木更津ちゃんだぜ？』」

「でも流石に七時起きは久しぶりだ……」

これからは学生なんだから、それぐらいガマンしてくれよ？

ちなみに僕は滑り台で、木更津ちゃんは砂場で寝ていた

僕は寝癖で髪の毛が所々はねてるけど、
木更津くんは砂塗れだ

なんであそこで寝たんだ？

「『木更津ちゃんは馬鹿なんだね』」

「んだとてめえ！」

いけないいけない、つい考えが言葉として出てしまった

僕たちは公園から出て、初春ちゃんがくれた
紙に書かれた住所へ向かった

「その紙、誰からもらったんだ？」

「『風紀委員の子に事情を話して教えてもらったんだ』
『ご親切に住所まで書いてくれたしね』」

「風紀委員につて、アンタにしたんだよ……」

殺人未遂ですけどなにか？

「『着いたよ』」

「早えな！　どんだけ近くにあったんだよ！？」

「『公園の直ぐ近くで助かったね』」

公園の直ぐ近くにあった事務所に僕たちはたどり着いた

二階建ての建物で、小さな会社のような場所だった

こんな所で登録をするんだね

「『木更津ちゃんはどこで待ってて』　『直ぐ戻ってくるから』」

そう言つて、僕は建物の中へ入っていった

「『木更津ちゃんただいま』」

十分ぐらいしてから僕は戻った

僕はただ名前と年齢を教えただけで、
他の書類とかは全部やってくれるらしい

イメージと全然違うけど、こんなのでいいのかな？

「どうだった？」

「『第七学区で部屋を貰ったよ』 学校は身体検査システムスキャンを受けた後だったさ」

まあ、結果は分かっているけどね

無才能マイナスの僕が超能力プラスのような才能を持っているわけないだろ？

「身体検査って、俺たち過負荷に検査なんか必要なのか？ 結果なんて確かめなくても分かっているしな」

木更津ちゃんも過負荷というのを段々理解し始めているね

「『ま、学校へ行くためには必要だからさ』 面倒だけど受けるよ」

『検査は一応通う予定の学校ってことになってるし』
転入生ってこともあってあまり良い学校には行けない

第七学区にある学力が比較的低い高校だったと思うよ

僕は一応高校三年生だからそれ相応のクラスになるけど

「『木更津ちゃんはどうするの?』」

「俺は適当に学園都市を彷徨ってるよ。学校にはもう行けねえし、他の過負荷も探しとくよ」

木更津ちゃんは元々学園都市に居た存在

つまり一度は学校に行ってるって意味だ

でも、彼は恐らく高校を中退してるところから、もう学校へ行くのは無理だね?

一度やめると再び学校に入るのはかなり難しいって話だし

「『じゃ、一先ず別れようか』 『じゃあ木更津ちゃん、また後で』」

「ああ、球磨川先輩も精々ボコられねえようにな」

お互い手を振って、僕は学校へ、木更津くんはどこか適当なところへ向かって歩き出した

「やあ、君が球磨川雪くんか?」

「『はい、そうですよ』」

僕が学校にたどり着くと、校門で教師の一人が待っていてくれた

多分あの登録会社から連絡があつたんだね

なにからなにまでお世話になるなあ

「はっはっは、面白い喋り方だな」

「『括弧つけた喋り方ですよ』『他の人はこの喋り方は気持ち悪いって言ってますけど』」

この先生はどうやら僕の括弧つけた喋り方を気に入ったみたいだ

大抵の人は僕が話すだけで怖がるんだけど、この先生はかなり器が広いみたいだ

「俺は独創的だと思うぞ！ ガハハ！」

なんともテンションの高い人だね

「ま、そんなことより、さっさと済ませるか。着いて来い」

先生は僕を学園の中へと案内してくれた

中は至って普通の校舎だった

普通の教室、普通の生徒、普通の先生

全てが普通ノーマル

マイナス過負荷の僕が普通ノーマルの学校に行くなんて、なんとも滑稽で気の毒な話だ

「ここで身体検査を受けてもらう。なーに、この機械に寝てもらうだけだよ」

僕が案内された部屋に置いてあったのは、大きな機械だった

真ん中あたりに人一人が通れるぐらいの穴があつて、台に僕を寝かせた後そこを通らせるらしい

それで超能力の有無、そしてレベルが分かるんだって

超能力者のレベルは強さ

上から5、4、3、2、1、0とあつて、レベル5が最も強力なんだ

レベル5はこの学園都市では七人しか存在してなくて、その一人一人が軍隊の歩兵中隊を相手に勝てるらしい

それに比べてレベル0は無能力者

なんの超能力も無く、基本的に

ノーマル
普通な人間のことだ

ま、僕はそれに当て嵌まるんだけどね

「この台に寝転がってくれ」

言われるがままに僕が台に寝転がると、
台が動きだし、僕をあめ機械の穴へと通した

ゆつくりと通過していく僕の体を、
なにか光のようなものが通る

これだけなんだね

まあ、超能力は脳を調べるだけで分かるらしいからね

「終わったぞ。今結果を検討しているから、少し待っていてくれ」

検査が終わり、僕は再び学ランに着替える

「結果お前は…レベル0、無能力者だ。残念だったな」

ほらね、過負荷に超能力なんか無いんだよ

そんなのを持っている過負荷は、既に過負荷じゃない

プラス
超能力者だよ

「『別に超能力なんか欲しくありませんし、
がっかりというわけでも無いですよ』」

「ま、本人がそう言うなら俺はなにと言わん。

それより入学おめでとう。もしお前のレベルが高かったら他の学校に移らせるつもりだったんだが、レベル0ならここに通つても大丈夫だろ。じゃ、明日からガンバレよ」

「『へーい』」

今日はもう用済みになった部屋を後にし、僕は教室の廊下で立ち尽くす

現在時刻は朝の九時

まだ起きてから一時間しか経っていない

はあ、どうしよう？

携帯とか無いから木更津ちゃんには連絡が取れないし

新しい自分の部屋にも戻るのは面倒臭いし

「『うーん……』」

しばらく顎に手を当てながら考える

あ、なら良いこと思いついたよ

他の教室を見学しようよ

そうすれば他の過負荷を見つけられるかもしれないし

そうと決まればレッツゴー

無駄に高いテンションで僕は学校を歩き出した

「『ん？』」

しばらく教室を転々としてっていると、僕の目に一つの教室が止まった

ここだけが異様の雰囲気を出していた

窓から中を覗いてみるけど、やっぱり中は普通の教室

ツンツン頭の生徒とか、サングラスをかけた生徒とか、関西弁を話す生徒とかも居たけど、それでもまだ普通だね

でも、端から端を除いていると、一人の生徒が僕の目を捉えた

教室の隅に縮こもっている一人の女の子

無表情でなにも考えておらず、他とは別の世界に居るような雰囲気、そして他人を拒絶するような目

でも、そんなことよりも彼女の周りが

僕の興味を引いた

彼女の周りにはなにも無いけど

そう、何も無いんだ

「『彼女、絶対に同類ほくたちじゃないか』」

決めた

僕は彼女の最低を

底辺を

負完全を

負け犬らしさを

「『受け入れてあげようじゃないか』」

五話 『受け入れるんだ』

「『お邪魔します』」

僕はさっそくその女の子の居る教室の中へ入った

今は休み時間なのか生徒たちは席を立って
友達などと話していた

ま、授業中じゃないだけマシかな？

急にこの学校とは別の制服を着た

生徒が入ってきて他の子たちは驚いていたけど、
それに得に気にすることなく僕は女の子の席へ向かった

目の前に立つと、今まで地面に俯いていた
女の子はそっとこちらを見上げた

さっきまで気付かなかったけど、
何気に可愛いじゃないか

ま、その瞳は最低^{マイナス}だけど

「『こんにちは』」

「…こんにちは」

挨拶すると、その子は小さく、弱々しい声で答えてくれた

「『そんなテンション低くして、どうしたの?』『ほら、そんなに悲しく^{マイナス}になつたら可愛い顔が台無しだぜ?』」

「……」

これはセクハラ発言だと思うけど、そういうのは気にしないでくれ
僕に罪悪感なんて欠片も無いけど

だって、僕は悪くないんだもん

「『ま、冗談は置いて……』『放課后会えるかな?』
『少し君とお話がしたいんだ』」

彼女の過負荷の能力の確認と、彼女の勧誘だけだね

「……いいですよ」

彼女は興味が無さそうだけど、一応は了承してくれた

うん、これでよし

後はこちらに引き入れるだけ

「おいちよつとアンタ!」

満足気に僕は帰ろうとするけど、一人の
生徒に呼び止められる

声からすれば男子生徒だと思う

まあ、声質はどこまでも幸せ者^{プラス}だけど

「『ん』『なに?』」

振り向いてその呼び止めた子を確認する

僕に声を掛けたのは、さっき窓の外から覗いていた時に何気に見たツンツン頭くんだった

「他所の学校の奴が、勝手に人の教室に入ってなにしてるんだよ！ 彼女だって困ってるだろ？ ほら、もう大人しく帰ってくれよ」

どうやら彼は僕が突然入って来たのを気に入らなかつたらしい

それか、このクラスに居る全員の生徒が思っていることを代弁したんだろう

まあどっちにしろ、彼は偶に居る正義感が強い子だよ

他人から頼まれたことは断れず、

困っている人が居たら放っておけないタイプだ

あはは、僕だって同じだろ？

見^{マイナス}下される人が居るから僕は超^{エリート}能力者を

全員殺してこの街を平等にして彼等を幸せにするんだぜ？

対象が違っただけで人を助ける点では同じだ

正義と偽善、どちらが正しいんだろうね

「『うるさいなあ』『もう帰るって言っただから、いいだろ?』」

マイナス性をむき出しにして彼に笑顔を向ける

笑顔は人間にとっては最大のポーカrfフェイスだ

こういう時に笑顔を作れば、誰だって退くんだよ

「ッ……!」

案の定、彼は僕を離してくれた

「『あはは、君は面白い子だね』『名前は?』」

「『…上条当麻だ』」

「『僕は球磨川雪』『もしもう一度

会うことがあったら、その時は仲良く友達になろうね?』」

さっきまで気付かなかったけど、彼はかなり興味深い

彼に掴まれた時、彼の右腕からとてつもない”何か”を感じた

超能力とも、才能とも違う”何か”を彼は持っている

これは興味深い人だね

僕は手を振って、彼に別れを告げた

「『案外時間は早く進むんだね』『まあこれは作者にも都合が良いみたいだし』」

あれから放課後まで僕は適当に
この学校を彷徨っていた

頭の中で誰かが「キングクリムゾン！」と言った
気がするけど、気のせいかな？

まあそれよりは、あの子とやっと話せる

「『あ、居た居た』『おーい！』『こっちだよおー！』」

校舎から出てきた彼女を、僕は大声で手招きする

それに気付いた彼女はそのまま僕に向かって歩いてきた

「…会う約束を覚えていたんですね」

「『君みたいな可愛い女の子と会える

約束を忘れるわけ無いだろ？」

そのまま僕と彼女は人目の付かない所を探しに歩き出した

まあ、僕は彼女に着いていつてるだけで、
場所は全部彼女に任せてるけど

「…ここなら誰にも聞かれませんね」

僕たちは校舎裏で向かい合うように立っていた

よくジャンプの青春漫画で不良が
生徒をボコボコにする場所みたいなものだよ

まあ、過負荷の僕はそういうのには耐性があるけど

「『もしかして人目を気にしてくれたのか？』 『あはは、
気が利くんだね』 『ありがとう』」

まだ世間に過負荷^{マイナス}という存在には気付いて貰いたくないからね

「『ところで君、少し訊きたいんだけど』」

「…なんですか？」

「『君、おかしい能力とか無いか？』」

「ッ…！」

僕がそう訊いたら、一瞬彼女の表情が歪んだ

恐らく心当たりがあるみたいだね

「…一体なんのことですか？」

「『僕には分かるんだよ』『いや、過負荷には分かるんだよ』

『ほら、戯言シリーズでも』零崎は他の零崎を感じられる”って言うのだろ？」

『それと同じさ』『過負荷は他の過負荷の存在を感知できる』」

彼女は僕の問いの意味が分からないと言うが、僕は自分の特技というか過負荷の性質を教える

過負荷には過負荷が分かる

つまり、彼女も感じてるはずだ、僕が彼女と同類だっていうことを

「『ほら、こうして近付けば君だって分かるはず』」

「来ないでください！」

すると突然、僕は後ろに向かって吹き飛ばされた

まるで全身を衝撃波が襲ったようで、そのまま校舎の壁に叩きつけられる

「あ…」

「『いてててて…』 『これが君の過負荷の力なんだ？』」

「くッ…！」

フラフラと立ち上がりながら僕は
そう言う

後ろの壁が少し窪んでたけど、修理大丈夫なのかな？

まあ、僕は悪くないけどね

「違います！ そんなものなんてありません！
とにかく私に近付かないでください！」

そう言い切るが、そう言ってる時にも衝撃波は
襲ってきて、再び吹き飛ばされる

今度は壁にこそ叩き付けられなかったけど、
かなり遠くへ飛ばされたよ

でも、これで確信が出来た

「『君の能力の正体が分かったよ』 『あらゆる物を
拒絶することで、それを周囲から遠ざける能力だ』」

ようするに、嫌いなものは根こそぎ吹き飛ばしてるんだよ

まったく、我が儘な子だな

「ッ…！ それが、どうしたって言うんですか！」

「『いや、別になにも悪くないよ』『見るからに君は制御できていない』

と思うし、君のせいでは無いよ』『僕はただ君の能力の確認をしただけだから』」

ま、この能力も十分最低で自分勝手な能力だよ

「『でも僕は、そんな能力を持っている君が必要なんだ』」

「私が…必要？」

「『そう』『君みたな能力を持っている子を過負荷って呼ぶんだ』『過負荷っていうのは、自分が不利になるような能力の呼び名だね』『この過負荷を持った子はみーんな最低で底辺な人間なんだ』『もちろん

僕もその一人だけだね』」

僕がこの子に過負荷について説明すると、彼女は信じられないのか首を横に振る

「違う…！ 私はそんな変な能力は持っていない…！」

「『現実是否定するものじゃないぜ？』『事実君は僕を吹き飛ばして、

骨を数個折ったんだぜ？』『まあそれは直ぐに僕が無かったことにしたけど』」

骨が数本折れたことに彼女は驚いていたが、
”無かったことにした”という言葉に疑問符だった

「無かったことに…?」

「『そう』」

『すべて なかったこと現実を虚構にするのが僕の過負荷、マイナス オールフィクションのうりよく大嘘憑きの欠点さ』」

あまりに衝撃的な能力の内容なのか、今まで無表情だった彼女は始めて”驚愕”という感情を見せた

「…私に他の人とは違う”何か”があるのは認めます。でも、なんで私が貴方の仲間にならないといけないんですか?」

彼女が必要という僕の言葉に本人はとても怪しんでいる

まあ、彼女が本当に過負荷なら、必要とされたことなんて一度も無いと思うけど

「『それは、君が過負荷だからさ』 『それ以上に理由は無いよ』」

「え…?」

「『僕は君みたいな子を集めて、この学園都市に存在する超能力者^{エリート}を皆殺しにしたいんだ』 『そのために君達みたいな子が必要だ』」

目的をいとも簡単に話す

別に秘密にしなくてもいいしね

だって、もし彼女が仲間にならず、それを敵に報告しようとしても、彼女の僕に関しての記憶を『無かったこと』にすれば済むしね

「でも、私が過負荷という科学的根拠は…」

はあ、まだ言ってるのかよ

しょうがないね、ここは一つ本当の過負荷を見てもらわないと

「『いつまで否定するつもりだよ…?』」

「ひッ…!」

マイナス性全開にしたせいか、彼女は少し怯えてる

本当は僕もこれをしたくは無いんだけどね

僕は悪くないけど

「『いつまで現実を否定するつもりだよ?』」君は間違いなく過負荷だ』『過負荷の僕には分かる』『君はただ受け入れていないだけだ』」

「受け入れて…いない?」

「『そう』『君の身の回りに起こる不幸を全て"受け入れる"んだよ』『自分は屑だ、塵だ、負け犬だ、最低だ、幸せになんかなれないって』『認めるんだよ』」

徐々に、でも確実に彼女を過負荷へと墮としていく

「『受け入れるんだよ』

『不条理を』

『理不尽を』

『嘔泣きを』

『言い訳を』

『いかがわしさを』

『インチキを』

『墮落を』

『混雑を』

『偽善を』

『偽悪を』

『不幸せを』

『不都合を』

『冤罪を』

『流れ弾を』

『見苦しさを』

『みつともなさを』

『風評』

『密告を』

『嫉妬を』

『格差を』

『裏切りを』

『虐待を』

『巻き添えを』

『二次被害を』

『愛しい恋人のように受け入れるんだ』

『そうすれば、僕みたいになれるかもしれないよ』」

言葉の連打を彼女に与え続ける

これが過負荷、これが最低

負の側面を全て受け入れてこそ、
人間は本当の意味で過負荷になれるんだ

「あああああ…！」

「『だから、君は受け入れるだけでいいんだ』
『過負荷のことなんて心配しなくていい』」

「あああああああ…！！！！」

「『僕が君の最低^{マイナス}を受け入れてあげるから』」

この言葉と共に、彼女は僕に泣きついていた

初めて受け入れられた

自分を、最低^{マイナス}の自分を

過負荷として受け入れてくれた人

僕の二人目の仲間

ことぶき みさき
琴吹海咲

彼女の能力名は

ノイントールド
『絶対禁止』

五話 『受け入れるんだ』（後書き）

〈過負荷の説明〉

ノイントールド
『絶対禁止』

自分が拒絶したものを遠ざける能力

物、人、動物、植物、液体、気体、

物体、嫌なものは問答無用で遠ざかせる

今はまだ制御が出来ておらず、

少しでも嫌と認識してしまうと遠ざけてしまう

そのため、琴吹は”机”などの自分の

周りにあったものを無意識に遠ざかせてしまった

六話 『これが日常だぜ?』 (前書き)

今回は日常パートです

ちなみに今回をもって過負荷の募集を終了させていただきます

沢山のアイデア、本当にありがとうございました

六話 『これが日常だぜ?』

あれから一週間

至って普通の日々が続いていた

僕も大人しく学校に通えているし、

海咲ちゃんもあれから学校には登校してる

まあ敦ちゃんは未だに学園都市を彷徨っているけど

彼曰く、「誰がそんな面倒なところに行くかよ」だそうだ

それにあれから一人も過負荷が見付かっていないんだ

まあ初日で二人も仲間に出て来し、大丈夫かな?

負運性の敦ちゃんと絶対禁止の海咲ちゃん

この過負荷勢力にはこの二人にリーダーになってもらおう

僕はリーダーというよりも下っ端ってイメージだし

「おい球磨川先輩」

「『ん?』『どうしたの敦ちゃん?』『」

「どうしたって、こんなことやっててもいいのかよ!」

こんなこと、って失礼な

僕は今、部屋の布団に座りながら悠長にジャンプを読んでいる

今週のは楽しみだったんだから、別にいいじゃないか

「『別にいいんじゃないの』『毎日他の同類^{マイナス}を探し続けるとノイローゼになるぜ?』

流石に僕も疲れを『無かったこと』にはしたくないし

それ以前に嫌なことを全部『無かったこと』にしたら過負荷の無駄使いさ

そんなのに頼ってちやいざという時に体が鈍っているかもしれないし

「でも、だからってこんなダラダラしてていいのかよ！
超能力者^{エリート}を皆殺しにするつつても具体的にはどうやってこの何万という超能力者^{エリート}を全員殺すんだよ！」

あはは、大抵の人はこう思うだろうね

頭の良い人はウイルスとかをばら撒けば
どうにでもなるって思うけど、それだと
無能力者まで殺すことになってしまう

僕たちは弱い者の味方だ

弱者を助け、強者へ敵対する

それが過負荷だ
ぼくたち

ぼくたち

「『まあ具体的に言うと、レベル5の連中を殺すんだよ』」

「は？ レベル5の連中だけなのか？」

「『うん』だって、アイツ等は学園都市最強の超能力者だぜ?」『そいつらが無能力者に殺されれば、世間は大騒ぎさ』『超能力は』必要なのか?」って思わせれば、これから先は二度と超能力者が生まれることは無い』『その後から、ゆっくりじっくりと皆殺しにしていこうぜ』

『今度はレベル4だろうと1だろうと、少しでも能力を持っている連中全員を』」

これがこの計画の全貌さ

数万と存在する学園都市の超能力者たちの頂点に君臨する集団

学園都市レベル5

一筋縄ではいかないと思うけど、

こちらとて正々堂々戦うつもりなんて微塵も無いさ

だって、マイナス僕らは過負荷だぜ？

マイナス

マイナス プラス
最低が最強に勝つには、これしか方法が無い

「ほオ、そういうことかよ。でも、本当に俺達でレベル5共に勝てるのか？」

負けることしか出来ない俺達に？」
マイナス

「『まあ、事実僕たちは負けることしか出来ない』
でも、一つ忘れていないか？」

『これは殺し合いであって、勝負では無いんだ』

『なにも、勝者が生きて敗者が死ぬわけじゃない』

『時には敗者が生き、勝者が死ぬ場合もある』

『だから僕らは、その場合を起こせばいいんだよ』」

世の中にはこんな勘違いが生まれているんだ

勝者こそ生き、敗者こそ死ぬ

なら勝利のために命を捨てた連中はどう説明する？

命を捨ててまで相手を改心させた連中はどう説明する？

出来ないだろうね

僕たちは過負荷なんだ

醜い勝利と、美しい敗北こそ過負荷だほくたち

「そうですよ。過負荷には勝つ必要なんてありません。
ただ相手を殺せさえすれば、それで十分私たちの勝利ですよ」

僕たちの部屋に入ってくるのは、海咲ちゃん

合鍵を渡してるから彼女は自由に行き来できるからね

まあ、男だけの部屋なんて入りたくないだろうけど

「まったく、ノックぐらいしろつつてるだろうが、このクソガキ」

「貴方こそ、いつまで球磨川さんにタメ口で話すつもりなんですか？」

気安く球磨川さんと話すなんて、行儀がなっていませんね」

「ンだとてめえ！ 戦んのかあア？」

ちなみに敦ちゃんと海咲ちゃんは仲がかなり悪い

いつも言い争いなどをしてる

まったく…二人共かわいい後輩だけど、
こればかりはどうしようも無い

「『二人共やめてよね』 敦ちゃんには
こうやって話してもらいたいんだよ』 彼に敬語なんて
似合わないと思うし』 それに、僕はそんな高位な人間

じゃないよ』『ただの貧弱な人類最低さ』」
マイナス

「ほら見る！俺に口出しするんじゃない」

「『敦ちゃんも』『彼女にはこの部屋の合鍵をあげたんだから、実質この部屋は海咲ちゃんの部屋でもあるんだから』」

僕がこう言つと、さすがの敦くんも押し黙ってしまった

まったく…この子たちはなんで仲良く出来ないんだろう？

まあ過負荷だからそんな簡単に行くとは思っていないけど

「『そういえば海咲ちゃん』」

「なんですか？」

「『君ってまだ一年生だね？』」

「え？ はい、そうですけど？」

海咲ちゃんはこの中で最年少の高校一年生だ

これから頼むことは、そんな海咲ちゃんにしか出来ないことだ

「『君のクラスの中に、ツンツン頭の子が居るだろ？』」

「ツンツン頭？ …上条くんのことですか？」

「『そうその子』 』実は君に、彼を調査して欲しいんだ』」

僕の言葉に彼女は意味が分からないのか
首を傾げていた

「調査…ですか」

「『うん』 』同じクラスの君になら、簡単だろ？』」

僕は二年も年上だから迂闊に一年のクラスには入れない

毎日一年のクラスに行つて海咲ちゃんと会つてたら、
僕はロリコンかなにかと勘違いされちゃうしね

人類最弱つて呼ばれるのはいいけど、変態だけはカンベンして

「出来ますけど、彼になにかあるんですか？」

「『実は初めて君に会つた時、僕は彼に
肩をつかまれたんだよ』 』その時に僕は変な
気分になったんだよ』 』まるで、彼に掴まれている
時だけ過負荷マイナスが消えていたような感じだった』」

「『過負荷が消えた！？』」

海咲ちゃんと敦ちゃんは驚きの声を上げる

通常、過負荷っていうのは
生まれ持ったスキルだ

某一京以上ものスキルを持つインフレ野郎
と交換でもしないと、普通は手放せない

そんな中、彼に掴まれているときだけ無くなっていた

明らかに異様だ

彼の能力を突き止めたい

いわば僕の好奇心みたいなものだよ

「過負荷をも打ち消せる能力なんて…」

「球磨川先輩の大嘘憑き並の出鱈目さじゃねえか」
オールフイクション

「『そう』『超能力なのか、過負荷なのかは分からないけど』

『少なくともどちら側でもない能力を持っている』『海咲ちゃんには
その実態を突き止めてもらいたい』『出来るかな?』『』」

「も、勿論です! 球磨川さん自らの
頼みなんですから必ず突き止めてみせます!」

あはは、頼もしいね

海咲ちゃんは敦ちゃん以上に僕を慕ってるっぽいし

なんでだろう?

ま、協力的なのは救いさ

「『あ、でも襲ったりとかはしなくてもいいからね?』」

『彼、結構正義感が強そうだったから自分で勝手に巻き込まれてくれる』

と思うし』『その時に観察でもすればいいんじゃないの?』」

彼は困っている人を放っておけない正義^{プラス}だからね

「分かりました」

「おいおい、俺に頼み事はねえのかよ?」

さっきまで置いてけぼりになってた敦ちゃんが
クレームを付けてくる

まあ、彼はあまり他人との関係が無いから
頼める幅が細いんだけど

「『敦ちゃんには引き続き他の過負荷を
探しててくれ』 見つけたら勝手に勧誘してもいいよ』」

「またその仕事かよ… ったく、俺だって暴れたいんだよ」

「『その時はどっかの不良にでも
喧嘩を売ればいいじゃないか』 風紀委員に
文句を言われると思うけど』」

僕みたいに風紀委員に目をつけられると、
迂闊に行動できなくなるよ?

僕だってこれまで何度他人を螺子伏せたいと思ったことか…

「血の気の多い人ですね、貴方は。球磨川さんに迷惑ばかり掛けないで、偶には役立つことの一つはやってみてくださいよ」

「ふざけるな琴吹！ なんだったら厄介者のお前を始末してやるよ！ そうすりゃ俺に役立つしなア！」

「フ、貴方なんて私に指一本も触れられませんよ」

「だったら試してみるか、あア？」

同時に二人が殺気立ちながらにらみ合う

はあ、まったくカンベンして欲しいぜ

「『二人共、喧嘩なら外でやってくれ』」

だが、そんな言葉には耳を貸さず、この狭い部屋で殴り合いが勃発した

まあ殴り合いと言っても、

敦ちゃんが一方的に殴られてるだけだけど

「てめえ！ 卑怯だぞその能力！」

「卑怯で結構です。私は過負荷なんですから」

すると、後ろに後退していた

敦ちゃんの背中が壁に当たる

その衝撃で棚の上に置いてあった

古いダンボールや本などが全て海咲ちゃん

に向かって落ち、ガンガンと後頭部を直撃した

「はッ！ 運悪くさっきの衝撃で落ちてきたらしいなア！

そいつア不運だったじゃねえか、えエ？ 琴吹？」

「くッ！ 私が拒絶しないとイケないのを知ってて…！」

「拒絶しねえと弾くことは出来ねえよなア？」

二人共、喧嘩はいいけどせめて外でやって…

すると突然、一本のはさみが僕のジャンプに向かって落ちてきた

それは運悪く先から落ちてきて、僕の本に大穴を開ける

しかも、丁度運悪く本を固定している

箇所を切り、本がバラバラになる

「『……』」

無言でバラバラになった途中まで読んでいた
ジャンプを目視する

それを他所に、二人はまだ喧嘩中だ

「殺し…や…！」

「やれるもの…てみて…！」

なにか言い合っているが、僕の耳には入ってこない

「「なッ！？」「」

驚愕の声と共に、二人は

何本もの螺子で服を壁に螺子付けられている

「『ねえ二人共』』『別に喧嘩はいいけどさあ』」

朗らかな声で、僕は二人に話しかける

「『僕の読書の邪魔はしないでくれるかなあ』！』」

何本も細長い螺子を指に挟みながら、
少しずつ彼等に歩み寄る

「ちよつと…待ってくれよ球磨川先輩！」

「そ、そつですよ！ 私たちが悪かったです！」

そう、君達が悪かったんだ

つまり

「『僕は悪くない……』」

「うゝ、うわああ……!」

「きゃあああ……!」

六話 『これが日常だぜ?』 (後書き)

色々やんちゃしてしまった主人公(笑)

ちなみに当麻の調査は描写はあまりしないつもりです

いや、番外編で書くかも?

七話 『はあ…憂鬱』 (前書き)

明日の更新は無理っぽいです

ちなみに今話は急展開

七話 『はあ…憂鬱』

放課後、いつも通り三人で集まってる

昨日の事件から二人が僕に冷たい気がするんだ。
さつきから全然こっちを向いてくれないし、僕とも
目を合わせてくれない

なんでだろう？

僕、嫌われちゃったかな？

「『おい！』 今日では三人で出掛けようか』」

たまには友達っぽいこともやってみたいしね

だって、僕たちは仲間であると同時に
友達同士だろ？

こついうのは大事だと思うんだ

「出掛けるって、何処へですか？」

「『ま、適当に行こうよ』 歩いてれば面白そうな場所も見付かる
と思うし』」

ゲームセンターやボーリングぐらい

ここにはあるんじゃないのか？

それどころか最新のが楽しめるし

流石は科学の街

「はッ、引きこもりのためえには理解できねえだろうな。
ただブラブラと学園都市を彷徨ってるだけでそれなりに楽しいんだ
ぜ？」

「引き籠もりなどではありません。シャイと言ってください」

「同じようなもんだろ！」

ああ、うるさいなあ

この二人は会話をする度に喧嘩になるね

僕の苛立ちが通じたのか、言い合いを
やめる敦ちゃんと海咲ちゃん

最近もの分かりが良いね

急にどうしたのかな？

「『わあ、流石は学園都市』『色々あるね』」

外に出て適当に彷徨っているんだけど、
これがまたカラフルで電気がピカピカ光ってる

ゲームセンター、ファミレス、ショッピングモール、
デパート、その他色々

放課後の学生達で辺りは溢れていた

夕方な分、部活の無い帰宅部の
子にとっては遊ぶ時間なのかな？

これはまた賑やかだ

「球磨川さんは学園都市に来たばかりなんですか？」

「『先週ここに来たばかりなんだよ』『だからこの
文化や常識とかが一切分からなかったんだ』『そういうところは
よろしく頼むよ？』」

この学園都市の名物とかに行きたいなあ

まだ観光なんてまったくしていないし

旅行気分だよ

「それならゲームセンターとかどうだ？ 学生と
言ったらゲーセンだろ？」

へえ、それはいいね

でも敦ちゃんは学生じゃないよね？

まあ敦ちゃんは始めて会ったときから制服を着ていたし違和感は無いけど

着替えないのかな？

僕もいつも同じ学ランを着ているけど

ちなみに学校に通ってからも

この世界に来てから着ている学ランを使用しているんだ

捨てるのはもったいないし

「『いいねえ』『うん、とても学生っぽくて
幸せ染みているよ』『じゃあ早速行こうか』」
クラス

目的地を決めた僕らはそのまま歩き出す

バスとかには乗らないで、この学園都市を見回りながらノンビリと行こうか

その方が僕も地理を学べるしね

「『ちなみに二人のお勧めは？』」

「俺はガンシューティングゲームがお勧めだぜ！」

良い笑顔で僕に言ってくれる

相変わらず攻撃的な趣味だね

戦闘狂って実際に居ると気持ち悪い

「私は音楽系のゲームがお勧めです」

逆に温厚(?)な海咲ちゃんは至って

平和的な音楽ゲームがお勧めらしい

太の達とかかな?

女の子っぽいところもあるじゃないか

「おいおい、なんでそんなもんを球磨川先輩に勧めんだよ!」

さっきは大人しかった敦ちゃんが海咲ちゃんの
提案が気に入らなかったのか、喧嘩腰で怒鳴る

「なにをお勧めしようが、私の勝手です」

「でも球磨川先輩がそんなもんに興味持つわけねえだろ!
少しは頭を使えよ馬鹿野郎!」

おいおい、僕はどんなイメージを持たれてるんだよ?

僕はこれでもかなり得意だという自身はあるぜ?

まあ自分でも負完全って名乗ってるから

そんなイメージは持たれないと思うけど

「一応は教鞭を受けているつもりです。少なくとも貴方みたいな単細胞よりは学力や知力は上と自重していますけど?」

ワオ、海咲ちゃんって何気に毒舌だよね?

「ンだとめえ! ぶっ殺すぞ、あア?」

「殺せるものなら殺してみてくださいよ。
ま、貴方には無理だと思いますけど」

「上等だ! てめえのそのちっこい頭を俺が握り潰してやるよ!」

道のと真ん中で睨みあう二人

まったく…憂鬱だ

仲良くしてくれないかなあ…

「『喧嘩するんなら連れて行かないよ?』『二人も偶には仲良く遊ぼうよ』『同じ過負荷なんだから』」

しばらく睨みあった後、お互いソッポを向く

敦ちゃんは舌打ちをし、海咲ちゃんは僕の方に少しだけ寄る

世話のかかる子達だ

「『お、着いたよ』『さ、二人共』『機嫌直して思いつきり遊ばうぜー!』」

無理矢理テンションを上げて一人中に入っていく僕

それに少し遅れて二人が店に入ってくる

「『わあ、いっぱいあるんだね』『流石は世界最先端の技術だ』」

元の世界からは考えられないようなぐらい
高性能のゲームが沢山並んでいた

僕にとっては最高の遊び場さ

お金だつて初日にあの男の子たちに
親切に分けてもらったし

「ここはこの学園都市では特に人気の
場所で、毎日多くの学生達で賑わっています」

海咲ちゃんがご丁寧に説明してくれる

ゲームも安く、食事もここで

済ませることからかなり人気らしい

正直並ばず入れたのはラッキーだ

「『あ、これやろつよ』」

僕が指差したのはコインを入れると

写真が取れる、いわばプリクラ的なものだった

ま、最初は記念写真でしょ？

「『記念に写真撮影でもしようぜ？』」

「いきなりプリクラって、球磨川先輩らしいっちゃらしいが…」

「女の子みたいですネ…」

そこ、気分を台無しにしない

「『ほら入って入って！』」

無理矢理二人を中に入れて、コインを入れる

すると、何回か音を鳴らした後、シャッター
の準備の合図がした

ポジションは僕が真ん中、敦ちゃんが
右で海咲ちゃんが左

僕は二人の肩に手を回して笑顔

敦ちゃん是不器用で照れ臭そうな笑顔

海咲ちゃんは女の子らしくかわいらしく笑顔

過負荷のはずなのに三人とも笑顔って、

他の過負荷から見れば滑稽な光景だね

写真を撮り終わり、現像したものを皆で見る

「へえ、上手く撮れてるじゃねえか」

「さすがは学園都市屈指のゲームセンターですね」

二人も満足みたいだ

「『あはは、写真の中じゃ二人共仲良さそうじゃないか』
『出来れば普段もこんな感じで居て欲しいんだけど...』」

「寝言は寝て言え」

「寝言は寝て言うてください」

声を揃えて二人共拒否している

こういう時だけ何気に合わせないでくれよ

「『ああ楽しかったなあ』」

ゲームセンターから出ながら僕は満足気にそう言う

空はもう夕焼けに染まっていて、
入ってから結構長い時間が経過している

夕方になつたにも関わらず、
部活を終えた学生が加わったのか
さつきより全然人数が多かった

色々といっぱい遊んで、生まれて始めて友達と仲良くできた
本当に楽しかったよ

「次はもうどうします？ 時刻は遅くなっていますが」

「『じゃあ適当なファミレスに行こうよ』 『そこで
ご飯でも済ませて返ろうか』 『海咲ちゃんは僕たちが寮まで
送るから安心していいよ？』」

女の子一人で家に帰らせるわけにはいかないし

海咲ちゃんは結構可愛いんだし、たとえ
過負荷だろうと心配なんだよ

「そんな…私一人で帰れますって！」

「『これは僕の自己満足と思ってくれよ』
『その方が僕も安心して帰れ』 『！』」

突然後ろに気配を感じ、僕は

一旦会話を止める

ただの気配ならいつも感じ慣れている

僕らに対しての軽蔑と恐怖の眼差し

それならまだ分かる

でも、この視線には、殺気が含まれている

それも明らかに僕らを殺すつもりだ

いや、僕を殺すつもりだ

「『ゴメン敦ちゃん』『先に海咲ちゃんを連れてファミレスで待っていてくれないかな?』」

「はい? いきなりどうした、ツ!」

どうやら敦ちゃんも気付いたらしい

「一人で大丈夫か球磨川先輩?」

「『安心して』『これでも曲者の過負荷の一応リーダーだぜ?』『簡単に勝つ気は無いよ』」

いかに胸糞悪く負けるかが過負荷だ

「『敦ちゃんは死んでも海咲ちゃんを護ってくれ』『現在じゃ君以外に戦闘タイプは居ない』」

「了解したぜ。じゃあ、頑張ってくれよ球磨川先輩」

「『がんばる』」

そう言った途端、僕は近くの路地裏へと駆け出した

それとは反対の方向に敦ちゃんと海咲ちゃんは走る

案の定、あの視線は僕の方へと向かってきた

しかも一つじゃない、四つぐらいの視線だ

路地裏に入りしばらく走ると、行き止まりに差し掛かる

あはは、どうやら僕はここまでみたいだね

ゆっくりと後ろを振り向く

「『やあこんにちは』『僕になにか用かな?』」

目の前には、一人の小学生ぐらいの女の子

殺気の正体って、これか？

「貴方は超気付いてるんじゃないんですか？ これでも殺すっていう雰囲気は超出してるんですけど」

超って、そんなオーバーな表現…

「『君みたいな子に殺されるほど僕は最弱じゃない…よね?』」

「超疑問符になってますよ?」

どうだろう…

人類最弱の過負荷でも、流石に小学生よりは強いよね?

どちらかと言うとあまり自身が無いけど、こんな貧弱体質

「でも、こちらも貴方を殺せって命令なんで…

超殺しますよ?」

突然、彼女の顔が目の前まで迫っていた

さっきまで数メートルは先に居たはずだ

なのに、直ぐ目の前まで迫っている

「『えッ?』」

そのまま吸い込まれるように彼女の拳は僕の顔面に食い込まれた

こんな小さい子からは考えられないような
パワーにより、僕はまるで人形の如く吹き飛ばされた

「『ちょ…』『そんな小さいのにこんな
パワーって反則だろ…』」

「そんなこと言っても超余裕そうですね」

まあそりゃ余裕はあるよ

「『だいじょーぶ』『だって君の努力なんて、
僕がぜーんぶ無かったこと』にするから」

オイルフィクション
大嘘憑きにより、傷がみるみる内に『無かったこと』になっていく

「ッ！？（治癒能力？）」

さっきまで顔面が思いつきりヤバイことになっていたのに、
直ぐにまた無傷になったことにより女の子は驚いていた

さあ、今度はこっちからも反撃だぜ

僕は両手に螺子を構える

「『君を社会的に殺してやるよ』『もちろん、過^{てっいてき}負荷的にね』」

満面の笑みでそう言う

七話 『はあ…憂鬱』（後書き）

主人公を襲った人が誰なのかはバレバレ（笑）

八話 『不愉快かなあ〜!』 (前書き)

二日も空けてしまつてすみません

プライベートが忙しかったです

八話 『不愉快かなあ〜！』

血塗れになりながら、僕は路地の壁に
寄り掛かるように座っている

それも、今回は返り血ではなく自分の血

両手に持っている螺子に力を加える
ことが殆ど出来ないまでに、僕は弱っていた

立ち上がるも足が疲労と痛みで震えている

破けている服からは血が滲み出していた

そんなボロボロの状態にも関わらず、
目の前の女の子は涼しそうな表情で無傷だ

「貴方、超弱いですね」

「『へッ…伊達に人類最弱を名乗っていないぜ』」

大嘘憑きは使っていない

いや、使っても無駄って感じかな

幾ら大嘘憑きで傷を無かったことにしても、
直ぐまたボロボロにされる

何回も使って、ボコボコにされていくうちに
気付いてしまった

つまり、僕は詰まれたのかな？

却本作りを使えば話は別だけど

「『君、女の子なのにとても力が強いね』『さっきから
吹き飛ばされてばかりだよ』」

「そっちが超弱いからじゃないんですか？」

中々心に響くような言葉を言ってくるじゃないか…

って僕に心なんて呼べるものは無いか

「『僕の弱さを甘く見るなよ』『その気になれば
蟻一匹に殺されることも出来る』」

「なにそんなことを超威張ってるんですか…」

僕の発言に呆れると、再び彼女は
目の前まで迫ってくる

蹴りを僕の腹に打ち込み、そのまま
僕は壁に激突する

「『う…ゲホッ…』」

咳に混じって血を吐き出す

さっきのだけで肋骨が数箇所折れたかな？

これは流石に無かったことにしないと不味い

「『だから無駄だつて』 君の努力なんて、僕にとつちや労力を無駄にするだけでしかないんだ」

「…またその治癒能力ですか。超厄介な能力ですね」

「『治癒能力？』 あは、それは勘違いだぜ小学生
『僕みたな屑にそんな前向きな能力が備わるはずが無いだろ？』」

「…治癒能力じゃないんですか？」

「『おいおい、さっき言っただろ？』 『治癒能力なんてお門違いだぜ』 『まあ、超能力者の君には最低の僕なんて理解できないと思うけど』」

僕の発言に困惑し始める小学生ちゃん

プラスがマイナスを理解するなんて、それこそ荒唐無稽だぜ

僕らは”マトモ”じゃないんだ

論理的な考えじゃ到底理解できない

「例えどんな能力でも、戦闘で役立たなきゃ

超役立たずですよ」

再び僕の顔をぶん殴る小学生

骨が碎けるんじゃないかって思わせる
ぐらい拳が顔面に食い込むと、僕を遠くへ
吹き飛ばしていった

さつきからずっと吹き飛ばされるのは疲れるぜ

まあ、最弱だからこれは逆らえないけど

「しかし…アンタ超弱いですね。なんでこんな
奴なんかに暗殺の依頼が…？」

僕を暗殺って、なんで僕が狙われなきゃいけないんだよ

僕はまだ何もするつもりは無いんだけど

「これなら放っておいてもなんも害になんて
超なんないと思うんですよ。ただの超雑魚ですし」

へえ

「え!？」

その瞬間、彼女の周りに無数の螺子が突き刺さっていた

さつきとは考えられない攻撃に、
小学生ちゃんは一ひどく驚愕していた

「『別に貶されるのは気にしない』『いつものことだし』『でも…』『僕はともかく他の仲間の目的を馬鹿にされるのは』」

『流石にちよつと不愉快かなあゝ！』」

自分でも分かるぐらい僕は怒りの表情を露にしていると思う
僕が貶されるのはまだいい。耐えられる

でも、友達の目標を貶されるのは、
ガマン強い僕でもすこゝし限界力ナ？

「くっ…！（なんなんですかこの人！？ 超怖いんですけど！？）」

僕の急な表情の変化のせいなのか、少し怖がりながら
後退りしている小学生

「『どうしたんだい馬鹿力？』」

『急に反撃されて怖くなったのかい？』

『人類最弱の僕に怖がるなんて情けなゝい』」

さらに周りにも螺子を突き刺し、逃げ道を塞いだ

幾つもの巨大な螺子が列を成し、

行く手を阻む壁のように通せんぼしている

「『あはは』『逃がさねえよ』『僕はこう見えても結構優しいんだぜ?』『謝れば今ならまだ間に合ったりするかもよ?』」

「超謝りませんよ。球磨川みたいな人に謝ることなんて、私の人生で超恥になるんですよ」

間を居れず即答してきた

気が強そうに言ってるけど、僕には分かるぜ?

君は僕にかなり怯えてる

僕のが気持ち悪くて、気味悪くて、怖くて、憎くて、みつともないと思ってる目だ

そんな目こそ、僕は一番慣れていて、一番大嫌いな目だ

「『そうか』『じゃあ教えてやるよ小学生』」

『過負荷相手にルール無用で戦う愚かさを…!』」

徐々に彼女に歩み寄る

僕の手にあるのは一本の - 螺子 マイナス

僕がそれを構えると、その螺子は

急に刀身代まで伸び始めた

手に収まったのは、一本の長い螺子

これこそ僕の第二の過負荷、否

僕が禁じた過負荷

『ブックメーカー
却本作り』だ

目の前までたどり着くと、僕は歩くのをやめる

彼女は恐怖で動けないのか、抵抗すらしていない

たとえ暗殺者でも、まだ子供か

「『君みたいな女の子を過負荷こふしのは
心が痛むけど』『許してね?』」

「球磨川に心なんかあるんですか?」

おいおい、最後の最後で痛いところを突いてくれるじゃないか

そういえばなんで僕の名前を知ってるんだろう?

まあ僕って彼女の暗殺対象だから
名前ぐらい調べてると思うけど

「『あばよ』『過負荷として元気で
』」

突然、通せんぼしていたはずの螺子が全て弾け飛んだ

まるでダンボールのように無造作に吹き飛ばされる螺子に、僕は思わず却本作りを貫かせるのを忘れてしまった

その隙に彼女は僕を殴り飛ばし、距離をとる

おいおい、一体次から次へなんだよ？

僕、幾らなんでもこんなに恨まれることはしてないと思うんだけど…

煙が晴れると、さらに三人の
女の子らしき影

僕ってこんな人気者なのか？

あ、”人気者”と書いて”あんさつあたいしょう人気者”って読むか

「麦野…」

中央のリーダーっぽい子に向かってそう言う

どうやら彼女がリーダーらしい

高校生ぐらいかな？

僕と同じか少し下だね

「まったく…一人で任せたのに、なに追い詰められてるのよ」

「だってこの人超卑怯なんでもん。傷とかダメージを全部一瞬で回復されるんですよ」

麦野さん（仮）が小学生ちゃんに呆れていると、すかさず小学生ちゃんは反論している

仲間がまだ三人も居たのかよ

これじゃあ彼女を過負荷マイナスにしてもまだ三回も戦わなくちゃいけないのかよ

疲労を『無かったこと』にすればまだ分からないけど多対一はまだ慣れていないし

「『おいおい、こんな展開は週間少年ジャンプだけにして欲しいなあ』『理不尽なんだけど』『」

「アンタみたな漫画脳に人権なんて無いでしょ？」

全世界の漫画愛読者に謝ってくれ

「でも、アンタのその能力、見させてもらったけど、見るからに回復タイプの能力よね？」

なんで皆は僕の大嘘憑オールフィクションきを見ると回復能力だと思うのかな？

まあ、一番多く使用しているのは傷を『無かったこと』にすることだし、当たり前かな？

「『何回も言わせないでくれよ…』 僕の能力はそんな前向きな能力じゃない」

「まあアンの能力がなにであろつと…」

一瞬

まさにそれぐらいの速さで白い閃光が僕に向かって打ち出された

それは瞬く間に僕を飲み込み、僕を吹き飛ばした

「『え？』」

「回復させる暇さえ与えなきゃ、そんなの大したこと無いわよ」

血塗れな僕に向かってそう言う

回復暇さえ与えなきゃ、ねえ

これは一回死んだかな？

あの能力から見て今回は死体の破片も

残らないと思うから、生き返るのに時間は掛かるけど

「死ぬ最後に名乗っておくわ。学園都市レベル5、メルトダウン原子崩しの
麦野。レベル5に殺されるんだから、死んだ後は言い訳にでもなる
んじゃないの？」

心に傷付くことをどうも

やっぱり僕はレベル5には勝てないのかな？

まあ、少なくとも今はだけど

それに、レベル5の素性を一人突き止められたんだ

それで得さ

「『んじゃ』『さよなら』『』」

「それアンタの台詞じゃないでしょ」

再びあの閃光が僕に向かって放たれる

それは血塗れの僕を消し飛ばす

そこで僕の意識は途絶えた

~~~~~

「死亡を確認するまでもないわね」

麦野は死体となった球磨川を見てそう呟く

ただの路地だった辺りは血飛沫に

包まれ、地獄絵図と化していた

球磨川の死体は無残にも体中が  
バラバラに吹き飛ばされていた

腕や足といった肉体の部分などは判別できないほど  
ぐちゃぐちゃにされ、唯一残ったのは殆ど吹き飛ばされている胴体  
だけ

そんな惨状にも、”アイテム”の四人は得に動揺もしていない

「暗殺完了。目標、球磨川雪の死亡を確認、つと。  
はい、これでお終い。行くわよ」

殺人現場に長く居座るほどアイテムの四人は  
馬鹿ではなく、すぐさまこの場を後にする

「なんだよ…これ…？」

それから直ぐ、現場へ駆けつけた木更津敦は  
その惨状を見て啞然としていた

琴吹海咲をファミレスへ送った後、援護へと  
駆けつけた木更津だが、時は既に遅し

無残に死体となった球磨川を見下ろす

「おい…マジかよ…なあ…？」

ヨロヨロと球磨川だった死体に歩み寄る

「そんな、ふざけるなよ！　おい！球磨川先輩！  
オールフイクション

アンタ、死なないはずじゃなかったのかよ！　大嘘憑きは死をも『無かったこと』に出来るんじゃないのかよ！」

一向に生き返る素振りを見せない球磨川に向かってそう叫ぶ

「球磨川先輩…」

応答を見せない球磨川に、木更津は膝をついた

「球磨川先輩イ！！！」

~~~~~

「『ここは…何処かな？』」

一方、死んだ球磨川はというと

「『またここか』」

周りは真っ白な世界

天井や壁の存在すら疑問視される
ほど純白に包まれているような世界

球磨川が転生する前に居た部屋だった

「またここで悪かったかよ、えエ？」

「『久しぶりだね、赤髪さん』」

目の前には長い赤髪を持ち、
少々苛立ち気味の荒い口調の持ち主

「久しぶり、じゃねえよ！ お前なにやってくれてんだよ！」

球磨川に向かってそう叫ぶ赤髪

怒りを露にし、球磨川の胸ぐらを掴んでいた

「『おいおい、なにをそんなに怒ってるんだい？』」

「てめえ、送る前に言ったこと忘れたのかよ！ あっちの
世界で起こす行動一つでてめえの天国行きと地獄行きを決めるんだ
よ！」

地獄行きと天国行き

それぞれにポイントがあり、0以上であると天国、
0以下であると地獄と決まっていた

「『それがどうしたの？』」

「どうした、じゃねえよ！ てめえ、ここままだ地獄行きだぞ！」

「『？』『なんで？』」

「なんでって、窃盗に暴行に殺人未遂！ どれもてめえの点数をジェットコースター並みに降下させてんだよ！」

自身の点数が危うい状況になっていると聞かされても尚、球磨川はあっけらかんな様子をやめなかった

余裕というよりも惚けの色が強い球磨川の間抜けな表情に、赤髪は益々怒りを増幅させた

「『別に点数が減ろうと、僕は自分のやり方を変えるつもりはありません』」

「ふざけやがって！ まったく、とんだ見込み違いだぜ！」

「『いや、僕は悪くないよ』『だって、たとえ他人が悪と認識しようと』」

『過負荷のあの子たちにとっては正しいことなんだぜ？』」

「ッ…！？」

球磨川の発言に言葉が詰まる赤髪

正義と悪

一見明白な違いを持っているその二つの概念は、
実際はかなり曖昧な関係を持っていた

他人から見れば正義な行為は、
別の人にとっては悪に感じられる

逆もまた然り

故に自分が正しいと信じ、人間は戦争を行う

「『誰が正義と決めて、誰が悪と決めるんだ？』
『僕にその基準は分らない』『でも、少なくとも
僕にとっては自分の行いは正しくは無いけど、悪とは
思っていないよ』」

「てめえ、本気らしいな」

「『本気じゃなかったらここまでしないさ』
『おっと、そろそろ生き返る時間だ』『それじゃあ
赤髪さん、また会おうね』」

白い空間から蒸発するように消えていく球磨川

そんな彼を、赤髪はただ見つめているだけだった

「…とんでもねえ奴だ」

最後にそう彼女は呟いていた

~~~~~

「なッ!？」

死体現場で啞然としていた木更津は驚愕の声を上げた

さっきまで血塗れだったこの路地裏は、

肉塊で溢れていたこの路地が、まるで何事も

『無かったかのように』元の路地に戻っていた

「『あれ?』『どうしたの敦ちゃん?』」

そして、木更津の目の前に立っているのは、

さっきまで無残な死体となっていた球磨川だった

「く、球磨川先輩!？」

「『なにをそんなに驚いているんだい?』『この前も  
言っただろ?』『大嘘憑きは死をも「無かったこと」に出来るって』」

」

あまりにも理不尽で現実離れした球磨川的能力に、

木更津はただ啞然としていた

「『まあでも今回は死体すら残ってなかったから』  
『生き返るのに時間が掛かっちゃったけど』」

「…カンベンしてくれよ…心臓に悪すぎるぜ…」

無事戻ってきた球磨川を見て、木更津は

拍子抜けしたように地べたに座り込んだ

「『じゃあちよつとゴメンね敦ちゃん』 『僕、少し用事があるから』」

そんな木更津を他所に球磨川は路地を抜け出し、どこかへ歩き出す

「用事？ 用事ってなんだよ？」

「『そんなの決まってるだろ』」

そんな質問をする木更津に、球磨川はクルリと振り返り、笑顔でこう言った

「『僕をこんな目に遭わせたアイツ等に、報復しに行くんだよ』」



九話 『それが過負荷だ』（前書き）

駄目文注意（いつものことorz）

## 九話 『それが過負荷だ』

仕事を終えた”アイテム”の四人は、いつも行っているファミレスへと向かっていた

先ほど殺人を犯したにも関わらず、全員が涼しい表情だまるで殺した球磨川など既に忘れたかのように

「今回は珍しく超簡単な仕事でしたね」

「まあ、相手が相手だったから。なんで球磨川なんかに暗殺依頼が入ったのかしら？」

あまりに呆気無く死んだターゲット

実際に戦闘を行った絹旗にさえ一撃も決定打を与えていなかった

予想外の弱さ

誰一人と球磨川の危険性を理解している者は居なかった

「実は、あの球磨川にこんな噂があるんですよ」

「噂？」

「はい。あの超電磁砲に攻撃されたにも関わらず、無傷で立ち上がったそうです」

「無傷で？」

学園都市レベル5第三位、レールガン超電磁砲

第四位の麦野より高位の存在であり、その実力は学園都市で上から三番目

それほどの能力者の攻撃を無傷で受けた

考えられないような内容に、麦野は呆れていた

「まったく…噂にも程がある。あの雑魚球磨川がそんな真似できるわけないでしょ？ あの回復能力は確かに異常だったけど」

鼻で笑いながらそう言った瞬間、後方から突如巨大な螺子が麦野に向かって放たれた

頭部ギリギリを通り過ぎた螺子は、そのまま壁に突き刺さる

突然のことに驚きながらも、戦闘には慣れてるアイテムの四人は即座に警戒態勢に入った

「『回復能力じゃないって何回言えば分かってくれるかな？』」

後ろから歩いてくるのは、学ランを来た少々童顔の高校生

両手に持っているのは巨大な螺子

「く、球磨川!？」

人類最低、球磨川雪

先ほど惨殺されたとは思えないほど  
無傷且つ綺麗な笑顔で四人を出迎えた

「『久しぶり四人さん』『僕だよ』」

「（こいつは私が自ら殺したはず！　なのになんで…!?!?）  
アンタの回復能力、死からも回復できるってわけ？」

「『もう説明するのも面倒だよ』『しょうがないなあ』」

『特別に教えてあげるよ』『僕のコレは、回復能力なんかじゃない』

「

「ならなんだって言うのよ!」

もったいぶる球磨川に、麦野も段々とイラついた様子を見せる

嫌味に、子供の悪戯のように曖昧に答える球磨川

は、「『はあ』」と溜め息を吐いた

「『君が僕を殺したって事実を、『無かったこと』にしただけさ』」

「は？　ふざけんじゃねえよ!」

堪忍袋が切れたかのように激怒しながら

麦野は自身の能力を球磨川に向かって放った

「そんな戯言を訊いてるんじゃないよ！  
こっちが聞きてえのはてめえの能力についてだ！」

煙が晴れると、そこには無傷の球磨川が立っていた

攻撃が通用していないと分かると、麦野はさらに怒りを増幅させる

「クソがあ！」

先ほどの攻撃を軽く超えるような規模の閃光を球磨川に向かって放つ

くらえば一瞬にして死を与えられるような

攻撃が迫って来ているのにも関わらず、球磨川は笑顔で立っていた

「なッ！？」

だが、球磨川に当たる直前で、その閃光は掻き消されたかのように消えていた

「（演算ミスか？ いや、私がミスするはずが無い。となると…）  
てめえ、なにしやがった！」

「『なにをつて』『僕はこの学園都市に来てから勉強をしたんだ』『超能力はなにか』『どうやって超能力者は超能力を発動してるか』『原理や成り立ち、使用の条件を調べて分かったこと』『それは、超能力が”演算”というもので成り立っているっていうこと』」

「それがどうしたっていうんだよ！」

未だに言っている意味が分かっていない麦野に、  
球磨川は呆れたのか溜め息をもう一度吐く

そして、邪悪の笑みを浮かべながら驚愕の事実を告げた

「『君の演算を「無かったこと」にした』」

あまりにさらりと放たれたこの言葉

一瞬聞き流してしまいそうなほどの戯言に  
感じられるこの言葉は、超能力の常識を破るような発言だった

”演算を無かったことにする”

これはつまり、学園都市全ての超能力者を無力化できるという意味  
だった

「私の演算を…無かったことに…だと？」

「『そう』」

『「現実<sup>すべて</sup>を虚構<sup>なかったこと</sup>にする」、それが僕の「大嘘憑<sup>オールフイクション</sup>き」だ』」

現実を虚構にする

最低で、理不尽で、最悪の過負<sup>マイナス</sup>荷、大嘘憑<sup>オールフイクション</sup>きの能力

そんな球磨川の能力に、アイテムの四人は呆然としていた

全てを無かったことに出来るとはつまり、たとえ何回攻撃しようと、球磨川を殺そうと、それを無かったことにされるという意味

「『この能力って気をつけないといけないんだよね』  
『だって』『気をつけないと世界そのものを「無かったこと」にしちゃうから』」

あまりにも規模の大きすぎる能力だった

自身は起動スイッチを押して、離せば核爆発を起こせる  
と言ってるようなものだった

世界そのものを『無かったこと』に出来る

つまり、その気になれば世界を滅ぼせるような能力を球磨川は持っていた

「『さて、反撃といこうか』」

両手の螺子を構えながら、球磨川はそう告げた

「ふ、ふざけるなア！」

麦野の原子崩しが球磨川に向かって放たれ、  
オフエンスアーマー  
窒素装甲を纏った絹旗が拳を振るう

フレンドは爆弾に火を点け、それを球磨川に向かって投げる

「アンタみてえな雑魚に私たちが負けるわけ」

だが、文章を終わらせることも無く  
彼女ら三人は地面に貼り付けられていた

細い螺子により全員の服が地面に縫い付けられ、  
動ける状態ではなかった

「『うん』『確かに僕は雑魚だ』『だから、弱さという弱さを  
知り尽くしている』『何処をどう攻撃すれば人間は死ぬとか』  
『そういうマイナスな面だけだけどね』」

フレンドが着火した爆弾は”着火という事実”  
を無かったことにされ、炎は消されていた

「『さて』『残りは君一人だね』」

ただ一人攻撃してこなかったアイテムの構成員を見つめる

ピンクのジャージを着た見るからに  
気ダルそうな人物

それに球磨川は少し呆れながらも、螺子を構えた

「くまがわのその能力は超能力じゃないの？」

「『超能力？』『あはは』『全然違うぜ？』『よく分かったね』」

「くまがわからAIM拡散力場を感じない。だから超能力じゃない  
と思う」



「『僕はレベル0』『なんの能力も備わってない』『だってこの能力は』」

だが、文章を終わらせようとした同時に、  
滝壺の周りに幾つもの螺子が突き刺さる

「『あは!』『なに期待しちゃってるの?』『これは  
週間少年ジャンプのバトル漫画じゃないんだ』『僕  
の能力の本質を教えるわけないだろ?』」

「でも大嘘憑きの能力は教えてくるんだね」  
オールマイクシヨン

からかう様にケラケラと笑う球磨川に、滝壺は冷静な突っ込みを入れる

「『おいおい、中々痛いところを突いてくれるじゃないか』」

「それに、さっきからくまがわは実際に私たちに攻撃してない。  
まるで戦う気が無いみたいに」

「『君、そんなに痛いところ突くのが好きなのかい?』『でも、  
ソレは事実さ』『今日の僕はとても機嫌が良いんだ』『そんな日に  
人殺しなんて嫌だよ』『僕はただ殺された報復が出来ればそれで良  
いし』」

そう言つと、球磨川は滝壺を後にし、地面に螺子伏せられている  
三人の場所へ行つた

球磨川がたどり着いた瞬間、あの閃光が球磨川を襲う

それと同時に、地面に突き刺していた螺子が吹き飛んだ

「『さすがはレベル5』『これぐらい簡単に抜け出せるよね?』」

「てめえ、絶対に許さねえ！ 殺してやる!!」

だが、球磨川は既に彼女に一度殺されていた

その事実をあえて突っ込まなかった球磨川だった

原子崩しを球磨川に放つが、再び当たる寸前で消える

「『だあかあゝ!』『演算を無かったことにしてるから何回攻撃しても無駄だつて』『まあ、永続的に能力が発動する超能力じゃこの戦法は無意味だけど』『その証拠に小学生ちゃんには使ってなかっただろ?』」

「私って中学生なんですけど？ 超間違えないでください」

「『そんなの大差ないだろ』」

球磨川は螺子を構え、麦野は再び演算を開始する

怒りで球磨川の言葉は耳に入らないのか、演算を無かったことにされるのにも関わらず、高度な演算を開始していた

そして、両者が攻撃を放とうとした瞬間、パトカーのサイレンが辺りに鳴り響いた

今までの戦闘を目撃した一般人が通報したそうだ

「『おいおい、警察に御用つてのだけはカンベンしてくれよ』  
『じゃあねレベル5さん』 報復は出来なかったけど、それでも  
結構楽しかったぜ」

もう一度風紀委員の支部へ向かうのは御免なのか、  
球磨川はサイレンを聞いて早々逃げ出した

「待ちやがれ！」

だが麦野は逃がさんとばかりに原子崩しを放とうとする

「むぎの。もう行かないと私たちもまずい」

たとえ暗部組織であろうと、殺人を犯している  
彼女らは同じく風紀委員とは関わってはいけなかった

目をつけられ、行動を制限されるとアイテムの四人でも不都合な  
ため  
出来るだけ目立った行動を起こさないようにしていた

「ちッ、行くぞ！」

絹旗とフレンダの拘束を解き、球磨川と同じくこの場を後にする

「球磨川を徹底的に調べるぞ。次会ったら  
本当に殺してやる。能力で蘇生できないまでにな！」

殺意を球磨川に抱きながら、アイテムの四人は闇へと消えていった

~~~~~

「『お待たせ敦ちゃん、海咲ちゃん』」

僕は二人の待つてるファミレスにやっと着いた

色々と巻き込まれて遅くなっちゃったけど、

まあレベル5の情報が一つ集まっただけでもいいよね？

「大丈夫なんですか球磨川さん？ 一度死んだって聞きましたけど」

「『うん殺されたよ』 『それなのに報復も

出来ないって、酷い話と思わないか？』」

普通は殺されると死んでるから報復できないんだけど

そこは過負荷のお陰だ

「球磨川さんが無事ならそれでいいですよ。まあ、
その単細胞が援護に間に合っていれば一度死なずに
済んだと思いますけど」

「てめえを送るのに時間が掛かったんだろっが！」

どの道死んでたと思うけど

いや、それどころかもし敦ちゃんが間に合ってたら二人とも殺されてたと思うし

僕ら二人がかりでもレベル5には勝てないだろうし

幾ら僕が死に慣れていても、敦ちゃんにとって臨死体験は少し酷い

僕も仲間が死ぬのは嫌だし

「『もう済んだことはいいさ』『それより何か食べようよ』『僕、おなか空いちゃった』」

さっきまで殺されそうになっていたのに、おなか減ったって言う僕も狂ってるんだろうけど

「なんで球磨川さんは笑ってられるんですか？ さっきまで殺されそうになっていたんですよ？」

海咲ちゃんも不思議に思ったのか、ごもつともなことを訊いてくる

「『それはね海咲ちゃん、僕が過負荷だからだよ』」

「過負荷だから、ですか？」

「『うん』」

『思い通りにならなくても』

『負けても』

『勝てなくても』

『馬鹿でも』

『踏まれても蹴られても』

『悲しくても苦しくても貧しくても』

『痛くても辛くても弱くても』

『正しくなくても卑しくても』

『それでもヘラヘラ笑うのが過^{ほくた}負^ひ荷^{かり}だ』
「

九話 『それが過負荷だ』（後書き）

Q： 主人公の容姿って原作球磨川と同じなの？

A： 違います。童顔と学ランだけです。少し似てるなあって
感じだと思えます

十話 『どっちつかず』（前書き）

ようやく応募された過負荷を登場させることが出来ました

現段階の状況で一番使用し易い能力を登場させただけなので、これから先にまだまだ多く出そうと思っています

かなり早めに投稿してくださった方、すみません

ちなみに六話で書いたつもりが上手く伝わっていなかったと思うので、もう一度書いておきます

今話をもちまして過負荷の投稿を終了させてもらいます

皆さん、ご協力本当にありがとうございます

十話 『どっちつかず』

僕たちは友達が少ない

唐突にこんなことを言っただけ、事実さ

僕と海咲ちゃんは確かにちゃんと学校も行ってる

授業はそれなりに聞いているけど、やっぱり
過負荷だから点数なんて言えたもんじゃない

成績も最低

でもなにより言いたいのは、僕たちは
友達が居ないんだ

まあそれは仕方の無いことだけど

僕はこの学校の制服ではない、別の
学校の学ランを着ているんだ

思い入れが出来てしまつて学校に無理に頼んだんだ

でも、その所為か部外者みたいになつて、
誰もあまり話しかけてこない

まあ、この括弧付けた喋り方も理由だと思っけど

そして、海咲ちゃんもまた友達が居ない

無意識に拒絶するあまり、近寄ってきた
もの全てを弾いていた所為か、誰も話しかけてくれないそうだ

今は僕が過負荷を制御できるように手伝って
コントロールラブルになってるけど、それでもまだ
近寄ってこないらしい

過負荷だと気付かれていない以前は友達は普通に
居たらしい。でも、徐々にその異常性に気付かれて、
気が付いたら一人だったんだって

酷い話だよ

それに重なり、僕と同じく海咲ちゃんもまた
ここの学校の制服を着ていない

何故かこの学園都市は男子に比べて女子の制服に
妙に拘っている

男子はシンプルにワイシャツ

なのに女子は色々と色や生地などに
気を遣っているらしい

それなのに、海咲ちゃんは男子の制服みたいに
ワイシャツとスカートというなんともシンプルな姿だった

なんでも、制服は着るのが面倒臭いそうだ

でも普段から僕や敦ちゃんと同じで制服（？）姿だから他の服も買うのが面倒なのかな？

まあ、本人の自由だしいいよね

でもこうやって他の人とは違う格好をしてると、やっぱり部外者のような扱いをされる

別に友達が少ないのは苦じゃない

過負荷だし、慣れてる

でも、一番問題はこうだ

休み時間が暇でしようがない

ボーッと窓から見える学園都市の景色を眺めるだけで一日中過ごしてるけど、そろそろそれも飽きてきた

せめて、気さくに話せる人を同年代に欲しい…

「ほら、全員席に着け！」

授業前、生徒たちが友達と話しているのを、教師が黙らせ席に着かせる

「球磨川！ お前もボーッとしないでこっちを見る！」

「『はあ…』」

溜め息を吐きながら、僕は視線を先生に向ける

ちなみに三年のクラスの担任は初日僕の
身体測定を担当してくれたあのテンションの高い
先生だった

まあ、僕を気持ち悪がらない分気楽だけど

「転校生が来るぞ！　まだ学園都市に来て
直ぐだから仲良くしろ！」

教室がザワザワし始めた

僕には関係ないけどね

でも僕がついこの間転入してきたばかりなのに、
また転校生が来ても大丈夫なのかな？

ほら、クラスの人数とか

「入ってこい」

「はぁーい！」

とても元気な声が教室の外から聞えた

本当に純粹で、綺麗で、
幸せそう^{プラス}な声だった

まるでこの世の悪党、殺人鬼、テロリスト、強盗、

社会主義者など知らないような、そこまでプラスな声

朗らかでも元気のあるその声の主は扉を開けて教室へと入って来た

「新しくこのクラスに入ることになった

きよせ まき
清瀬真希です！ 皆よろしく願いします！」

入ってきた転校生

女子であると同時に、容姿も良かったためか
男子の連中が小さくガッツポーズをしていた

そんな中、僕は窓の景色をボーッと眺めている

あのプラスのような声が聞えた瞬間、僕は思考を
シャットダウンして再び窓を眺めるのに戻っていた

だって、プラス幸せ者になんか興味無いもん

この学校に居るってことはレベル0だし、
敵対象でもない

つまり、本当に無関係者だ

多分あの子は皆から好かれるような人気者タイプだ

嫌われ者の人類最低、つまり僕とは正反対のような子だ
マイナス

同じ過負荷かもしれないって期待した僕が悪かった

窓を眺めるのも飽きてきたから、ボンヤリと先生と
転校生のやり取りを眺めている

「席は」

先生が席を決めようとするが、彼女は
聞かずにどこかの席へ向かう

何故かゆつくりと歩いて、
僕の席の隣に腰掛けた

さっきまでボーっとしてた僕も意識を覚醒させて、
無表情だけど彼女をチラッと見る

「よろしくね」

無言で頷く僕

すると、教室がざわめき始めた

《おいおい、アイツの隣かよ…》

《球磨川の隣って、危ねえだろあの転校生》

《席替えないと拙いんじゃないの？》

そんな声がクラスメイトの中から聞える

いかにも近寄りたくないような最低な雰囲気^{マイナス}を
出してる僕に、笑顔で近付いて隣の席に座ったんだから、

当たり前だよな

「全員静かにしろ！ 清瀬がそこがいいって言っんなら、お前等は口出しするな！ 授業を始める。起立！」

そんな感じで、今日の授業が始まった

「ねえねえ！」

授業を適当に聞き流して放課後、彼女は僕に声を掛けてきた

普段、筆記用具なんて机に仕舞ったままで出すことなんて無いから鞆すら持っていない

つまり手ぶらで僕はいつもこの学校に着ている

見るからにやる気が無い

そんな僕にも、彼女は省みなく、それどころか積極的に関わろうとする

僕は不思議ではない

「名前は？ 席が隣同士なのに、自己紹介もしてないのはおかしいと思うよ？」

関わりたくない人には嫌がらせ以外では喋りかけない僕なんだ

そういうところは黙認してくれよ

「『僕は球磨川雪』」

「ハハ、個性的な喋り方だね。もう知ってると思うけど、ボクは清瀬真希。少しお茶目な女子高生でえーす！」

僕、こういうタイプの人は苦手なんだ

なんというか、鬱陶しい

それより、初対面で僕のことを気持ち悪がらないし、この括弧付けた喋り方もただ”個性的”だけで済ませる彼女はある意味すごいと思う

「『じゃあまた放課後…』」

「いやいや！ 折角知り合っただから、一緒に遊びに行こうよ！」

面倒臭い人だなあ…

僕は帰ってジャンプを読みたいんだよ

今週は特に楽しみだったんだから

主に某異常生徒会長の漫画が急展開ばかりだし

「『分からないのか？』 『僕は人類最低だぜ？』 『そんな僕が、正反対の幸せ者である君と遊ぶのは』 『猿とナマケモノと一緒に居るのと同じぐらい違和感があると思うぜ僕は』」

「まったく、堅い人だなあ君は。」「ぷらす」とか「まいなす」とかは何かは知らないけど、ボクと君が遊んじゃいけない理由にはならないと思うよ?」

「『君は別の意味で頭が堅いんじゃないのかな?』」

「それって何気にボクを馬鹿だつて言ってるの?」

「『そう聞えるなら訂正しよう』『君は馬鹿だ』」

「今度はハッキリと言っちゃったよ!?!」

あれ? いつの間にか僕は彼女と会話を成立させちゃってるよ

なんだろう?

なんだろうなんだろうなんだろう?

分からない分からない分からない分からない分からない
分からない分からない分からない分からない分からない

僕は過^{マイナス}負荷のはずだ

彼女は幸^{プラス}せ者のはずだ

なのに、彼女は僕を気持ち悪く思うどころか、
誰よりもまず先に交流を持つとしている

意味が分からない

頭が痛い

コノコハキモチワルイ

「あれ、どうしたの雪くん？ 顔色悪いよ？」

「『……』 なんでも無いよ 『ゴメン、僕用事があるんだ』」

その場から逃げるように僕は校舎を後にする

フラフラと自室へ戻り、布団へ倒れこむ

先に帰っていた敦ちゃんと海咲ちゃんは
僕の状態に驚いたのか声を上げてる

「だ、大丈夫かよ球磨川先輩！？」

「顔色が優れないようですが、体調が悪いのですか？」

「『……』 少し頭が痛いかな』」

あまり重い症状ではなく、安心したのか
二人はホッと息を吐いた

「一体なにがあったんですか？」

「『僕のクラスに転校生が来たんだ』『見たことのないような、プラスの見本のような子だった』」

「そいつがどうしたんだよ？」

「『あの子と会話していると、頭が痛くなる』『気持ち悪い…！』『過負荷の僕にも気持ち悪がること無く接してきた…！』」

「まただ…！」

彼女のことを考えると、僕の頭に激痛が走る…！

「とりあえず落ち着けて！先輩は過負荷のリーダーになるんだろ！そんな奴はしっかりしねえといけねえって！」

「『うん…そうだね』『ゴメン敦ちゃん』『もう大丈夫だよ』」

汗がダラダラと流れていたけど、今は少し落ち着いた

とにかく、彼女には極力関わらないようにしよう

あんな幸せ者、嫌、あんな異常になんか

すると、僕たちの部屋の扉がコンコンと鳴った

誰かがドアを叩いているんだ

「あ、はい！今行きます」

海咲ちゃんが扉を開けに行く

僕たちの部屋を訪れる人？ そんなやつ…

「球磨川さん、お客さんですよ。なんでも球磨川さんと話をしたいと…」

入って来たのは、あのプラスのような瞳の持ち主

「体調はどう雪くん？」

転校生、清瀬真希

「『君のお陰で死に際の夜神月並みに取り乱してしまったよ』
『僕のキャラをどうしてくれるんだよ』」

「過^{マイナス}負荷にもキャラっていうのがあるんだね」

「「なッ！？」」

僕たちは耳を疑った

彼女は過負荷という存在を知ってる

つまり、この前僕を殺したあの四人組みみたいな子かな？

「てめえ…！」

敦ちゃんが警戒してナイフを構える

「『やめて敦ちゃん』『こんな狭い部屋で君の過負荷を使われるとアパート自体が崩壊しかねないから』」

それを僕は制する

彼なら運悪くこのアパートを全壊させられると思う

不運にも全ての螺子が切れ、不運にも

この建物を支える柱が腐って、運悪く皆死んでしまう

まあ僕は死ねないけど

「このアパートを全壊って…他の過負荷はそんなに理不尽な能力を持つてるの？」

「『まあね』『僕の無能力もそれなりに最低だし』」
マイナス

『だからこんな狭い部屋で暴れてもらうと困るんだよねえ』」

「がはッ!？」

すると突然、先の丸まった、ものを貫くことが出来ないような螺子が清瀬さんを直撃し、部屋の外まで吹き飛ばす

「『暴れるなら、外でやろうぜ?』」

僕も部屋の外へと出る

アパートの外はそれなりに広い駐車場のような

場所があつて、戦うにはそれなりにスペースがある

それなら部屋で暴れるより多少はマシだろ？

「不意打ち、まさに過負荷らしいね」

「『正々堂々の戦いを望んでるならお門違いだぜ？』」

『僕ら最低がそんな公平な戦い方をするとでも思ってるのか？』」

「思っていないよ。君、本当に気付いてないの？」

気付いていない？ なにをだよ？

「『僕は別に気付きたいことなんて無いんだけど』」

「はあ…なら一応言つてあげるね？」

ボクも君たちと同じ過負荷だよ？」

「『え！？』」

思わず括弧を外してしまいそうになるぐらい

僕は驚愕の声を上げた

この子も…僕たちと同類…？

「『そんなわけあるか！』『過負荷は他の過負荷を感じられるん

だぞ！』

『なのに僕は君からなにも感じていない！』 『それは明らかに不自然だ！』

「だって、ボクはどっちつかずなんだもん」

聞き慣れない単語だ

なんだソレ？

「『どっちつかず？』」

「うん。過負荷を持ってるし、無才能だけど、

ボクは世界に絶望してなんかいない。ボクも自分は結構性格が明るいほうだって自重してるし、自分でも過負荷だって信じられないよ。でも、ちゃんと無才能だしエリートも憎いよ？ だから君に近付いたんだ」

過負荷を持ってるのに、世界に絶望していない…か

プラス
幸せ者であって不幸せ者でもある

そんな曖昧な彼女

だから僕は彼女に対して無意識に拒絶反応を起こしたのか

マイナス
同じ最低なのに、幸せを掴めている彼女を見るのに
絶えられなかったんだ

「ネットで君達のことを知ったんだ。学園都市には

過負荷って呼ばれる存在が居るって統括理事会の記事に載ってた。現在はその存在の確認をしようとしていて、進めば調査や実験も始めるらしい」

僕たちの存在は既に統括理事会にばれているのか

学園都市全てを支配するような連中だけあるね

情報力が圧倒的に強い

なら、僕たちのエリート抹殺計画も…

「ボクも君達と同じ過負荷なんだ。初めて会った過負荷なんだ。だから力になりたい。君達の手助けをしたいんだ」

自ら僕らの仲間になる過負荷なんて始めて聞いたよ

でも、彼女のマイナス性を確かめないとなあ…

「『なら僕を殺してよ』」

「え…？」

僕の条件に彼女は首を傾げている

「『だから』『僕を殺してみなよ』『僕たちの目的はこの学園都市に存在する超能力者^{エリート}の皆殺しだ』『なら人を殺せないと話にならないんだよ』」

「でも…雪くんを殺すのは…」

怯えながらそう言う

やっぱりまだ純粹すぎる

罪、悪、憎悪、怒りなどの負の感情にはまだ抵抗があるらしい

しょうがないなあ…

「『あはは』『もし過負荷なら僕を普通に殺してくれるのに、清瀬さんは殺してくれないんだね』『それはそれで君の魅力だと思
うけど、
僕が能力を確かめる点では欠点かな？』」

『よし、ここは一つ』『僕が悪役になって清瀬さんを挑発してみる
よ』『よ』」

「挑発？ 幾ら挑発してもボクは君を殺したりなんか…」

『お前、女の癖になに自分のことを”ボク”って呼んでんだよ？』
『正直男みたいで引くよ（笑）』」

清瀬さんが固まった

虚無の表情のまま、僕をジッと見つめている

あの時の男の子たちみたいだ

で、やはり徐々に硬直が解けてくる

「ふ、ふざけるなよオオ!!」

怒りが爆発した

まあそれでも女の子だからまだ
やっぱり覇気に欠けるけど

「この一人称だけはスルーしてくれよ！ 男子ばかりの四人
兄妹の末っ子なんだから一人称は自然とこうなるんだよ！」

へえ、こういうのって理由とかあるんだね

「別にいいじゃないか”ボク”でも！ 昔なんか
”オレ”って一人称だったんだけど流石に拙いって
思っで必死で変えたんだよ！」

うわあ、怒り方が理不尽過ぎる

こういうところだけ過負荷なんだから

「『あはは』『うん、良いマイナス性だよ』」

『でも、流石に突っ立つてる相手を殺すのは気が引けると思うからこっちから先に仕掛けてあげるよ』」

僕は螺子を取り出し、彼女に向かって駆け出す

そのまま顔面に向かって螺子を突き刺す

けど、その攻撃は何故かまったく別の場所へと行ってしまった

しっかりと彼女の顔面を意識して突き刺したのに、気が付けた隣の壁を突き刺してた

それに、説明できないような憎悪感を、僕はその壁へ感じていた

壁に憎悪感って…

自分で自分を呆れた

「『あれ？』」

もう一度彼女に向かって螺子を投げる

「うわぁ！？」

それは何故か彼女ではなく、玄関から見守っていた敦くんたちに投げた

なんだろう？

壁の次は敦くんが憎い

いや、なにかもが憎い

空も、雲も、大地も、敦ちゃんも、
海咲ちゃんも、世界も

なにかもが憎い

なのに、僕は清瀬さんだけは憎めない

「どう？ 意味不明だろ？」

これがボクの過負荷、
ノットクリアー『偽良性』の能力さ」

コレが過負荷？

「ボクに対しての憎悪などを他の物や人に移す能力さ」

なるほど、かなり他人迷惑で自分勝手なスキルだね

だから彼女は過負荷のように精神に異常が無いのか

誰も彼女を悪くしないんだもん

「『痛いなあ…』」

血塗れになりながら僕はそう言う

彼女は僕になにもやっていない

これは全部、僕が自分でつけた傷だ

彼女への憎悪を僕自身に移して、
自分を攻撃させてる

ある意味完全無敵な過負荷だ

「ハハハ！ なに自分を攻撃してるの雪くん？ アハハ！」

ケラケラと可愛い顔で、でも狂気の
声で僕を笑う

もうマイナス性全開だね

つまり、彼女は普段から仮面を被っている

幸せ者のような表、でも裏は相手が
無関係の人を傷付け喜ぶような狂気を持っている
女の子

表裏の激しい人だ

彼女の本性こそ、あの狂気だ

「『あはは』『ム力つくなあ……!』」

螺子を彼女の顔面に突き刺そうとする

「じゃあね、雪くん」

でも、その怒りは僕自身に向けられる

自己憎悪、怒り、憎しみ

自分が嫌いだ、憎い、殺したい、死にたい、
傷つけたい、苦しめたい、呪いたい、惨殺したい

僕は彼女に向かって駆け出すのをやめる

そして

僕はその螺子を

自分の頭に

突き刺した

彼女の目の前に居た所為か、返り血が
顔に飛んでいた

返り血を浴びて徐々に正気に戻ってきたのか、清瀬さんは青白い顔を始める

「あああああ！　そ、雪くん…！」

だが、そんな声も虚しく、僕の頭を貫いている
螺子から血が流れ出る

糸が切れたかのように僕は倒れ込んだ

意識を失う前に見えたのは、涙を流しながら
倒れている僕の顔を揺さぶっている清瀬さんだった

「ボクが…ボクが雪くんを…！」

「『でも死んでいないんだよなあコレが』」

「うわぁ！？」

螺子を頭で貫き、流血状態にも関わらず僕は立ち上がった

死んでいるはずの僕が起き上がったのを
見て、清瀬さんはゾンビを見るような目だった

まあ、死んでないっていつても一回死んでるんだけど

「そんな…雪くんの心臓は完全に止まっているはずだ！

それ以前に頭を螺子で貫いて生きてるなんて…ありえない！」

「『そうやって常識に囚われてるようじゃ』」

『まだまだ過負荷として甘いぜ？』『僕たち相手に常識を使おうなんて、それこそ荒唐無稽さ』」

と、格好良いことを言ってみるけど、彼女は疑わしい目で僕を見ている

あはは、ノリの悪い人だなあ

笑いながら頭から螺子を抜きとると、彼女を僕なりの真面目さで見つめる

まあ笑顔のままなんだけど

「『とまあ冗談は置いといて』『うん、実際に死んでるよ？』『ただその死を、僕は「無かったこと」にただけさ』」

「…無かったことに？」

「『そう』『すべて現実を虚構にするのが僕のマイナス無能力、オルフィクション大嘘憑きさ』」

何回もこの台詞を言ってるけど、驚く顔がいつも見れるから飽きないんだよなあ

まあ彼女は対応が良さそうだから驚いても混乱はしないと思うけど

「つまり、自分の死を君は『無かったこと』にしたの？」

「『うん』 その事象が現実なら、僕はそれを虚構として処理できる」

『僕にとつては全てが”フィクション”、つまり絵空事』 『なんでもかんでも』

嘘と信じ、現実として受け入れない』 『それこそ僕の最低で最悪で理不尽で凶悪なマイナス マイナス マイナス 過負荷の無能力さ』

大嘘憑きの能力は『現実を虚構にする』と書いて、
『現実を虚構にする』って読むからね

まさに書きの通りの能力だよ

嘔吐きの僕にはピッタリな名前だ

「…ボクの無能力もそれなりに理不尽だとは思ってたけど、君の無能力の方がよっぽど理不尽だね」

さつきから”マイナス”って言うてばかりだね

それだと飽きるんじゃないのかな？

「『でも、これでも君はオツケーだ』 『僕を殺せるなら、超能力者だって普通に殺せる』 『それに、一旦人を殺すと最初が辛くても後が楽になるしね』」

「これからよろしくね、雪くん」

「『こちらこそ、真希ちゃん』」

三人目の過負荷

『ノットクリア偽良性』の清瀬真希

十話 『どっちつかず』（後書き）

いつもいつも厨二で本当にすみません

入院中、病院から抜け出した厨二病患者です

過負荷を投稿してくださったあら様、本当にありがとうございます

移せる対象を人だけでなく物も、という設定に勝手ながら変更させてもらいました。許可無く変えてしまつてすみませんでした

（過負荷の説明コーナー）

『ノットクリアー
偽良性』

他人の自分への悪意や殺意などの負の感情を周りの人へ移す能力たとえこの過負荷を使っていると頭ではわかっていても気づけば周りの人へ攻撃をしていて本人への攻撃はできなくなる。むしろそのことを意識して「攻撃をしなければ」と悪意を強めれば強めるほど

周りの人へ負の感情が募り抑えきれなくなり強力な攻撃をしてしまう。

無関係な人へ攻撃をしてしまい、後悔するのを楽しむ性格から生まれた過負荷。その姿を笑い、さらに自分への悪意を増長させ、より強い攻撃をさせるも他人に押し付けられ（以下ループ）

完全無敵の過負荷

相手からの攻撃は通用せず、こちらは

思う存分攻撃できる

負の感情を向けてきた相手に直接返すことも
できれば自己憎悪のあまり自分を攻撃させることも出来る

原作の『不慮の事故』のような能力です

十一話 「恩返ししてえんだ」(前書き)

前回の前書きでも自分の説明が下手で伝わっていなかったようです

迷惑掛けてすみません

ですのもう一度書きます

今話を持ちまして、過負荷の募集を終了します

沢山の投稿、およびご協力、本当にありがとうございました

十一話 「恩返ししてえんだ」

「『皆、今日は出掛けるよ』」

あれから更に数日経っていた

この数日間は新しく過負荷の一人になった

真希ちゃんに僕たちについて説明することで手一杯だった

過負荷の世界観、目的、価値観

まあ、そんな複雑なことじゃないけど

ちなみに一つ豆知識だけど、僕ら過負荷は

偶然にも全員がジャンプ愛読者だ

楔さんのマイナス十三組と同じモットーにはしないけど、
それでも偶然は凄いつて思った

で、その後はノンビリしていたけど、今日は違う

「出掛ける？ 急になんだよ？ しかも
何処に行くつつーんだよ？」

敦ちゃんが僕にマシンガンのように
質問を投げかけてくる

そこまで出掛けるのに不満なのか？

「貴方は黙って説明を待つことが出来ないんですか？」

「うるせえな！ こっちは気になってることを
言っただけなんだ、イチイチ口出しすんじゃないよ！」

「まあまあ、二人共」

言い争いを始める敦ちゃんと海咲ちゃんを、
真希ちゃんが落ち着かせようとする

はあ、三年生がもう一人居るだけマシかな？

「『敦ちゃん静かにして』『出掛けると言っても、
今回は遊んだりしないよ』『真剣なことさ』」

「へえ、ソレはなになかな？」

「『敵状視察さ』」

僕たちの所属する第七学区は、ある意味
色々と混雑してる場所だった

他の多数の学区と隣接してる所為か、ここには普通の学校からエリート校まで幅広い学校がある

場所によれば綺麗なところもあるし、不良や無法者で支配されてる箇所もある

だからある意味かなりややこしい

その第七学区の中でも屈指のエリート校、常盤台中学のある箇所に、僕は来ていた

常盤台は学園都市有数の名門エリート校だ
主に超能力者の研究で有名だ

在学するにはレベルが3以上でないと
いけなく、たとえば大統領の娘だろうが姫だろうが、
超能力が無ければ入れない

学園都市に七人しか居ないレベル5が二人も
在学していて、レベル4も多数存在している

そんな学校のある箇所に何故僕らが
居るのかと言うと、さっき言ったみたいに
敵状視察だ

唯一レベル5の中で能力の情報や顔写真を公開してるのは
この常盤台に所属している

学園都市序列第三位のレベル5、
超電磁砲の御坂美琴

今回は彼女の偵察みたいなものだよ

他のレベル5は顔写真どころか本名も公開していないし、ターゲットとして一番選びやすかった

まだ交戦はしない

あっちから挑まれたら戦うけど、まだ殺さない

今は時期じゃない

レベル5を殺せば、敵に回る連中はかなり多いと思う

そうなると分かっているのなら、まず始めにもっと仲間を集めないといけない

少なくとも対抗できるような

「しかし…綺麗なところですね」

「まあこの学園都市でも有数の女子中学校のあるところだからね。お嬢様たちが住むようなところが汚いわけないだろうし。ボクはこういうところは苦手だけど」

僕たちに住んでいるところとは大違いだね

まあ学力の低い僕らの学校には当然の扱いだけど

「『よし、ここぐらいでいいかな』」

しばらく歩くと、噴水のある広場
のような場所を見つけた

集合場所にいいと思い、ここでとまる

「『二手に分かれよう』 敦ちゃんと海咲ちゃんは
この辺りを調査』 重要な地点とか、どこに人が多くて、
どこが少ないとか、そういう感じの』 僕と真希ちゃんは
見学と装って常盤台自体を偵察してみる』」

「ちよつと待て！　なんで俺と琴吹なんだよ！」

僕の提案が不満なのか、クレームをつけてくる敦くん

はあ、こういう時は協力的になろうぜ？

「『均等に人数を分けてるから、仕方ないよ』」

「それなら俺と球磨川先輩でもいいじゃねえか！」

「『はあ、分かっているなあ』 『ここは一応は常盤台女子中学
の生徒だけでなく、他の女子校の生徒が住む地域なんだぜ？』」

「それがどうしたってんだよ？」

「『だあかあらあ！』 『女子』校の生徒なの！』 分かる？』」

ここに住むのは教師以外は殆どが女子だ

理由は、この辺りの学校の殆どが女子校で、男子なんて殆ど居ない

それはつまり、僕と敦ちゃんが道を歩いてるだけでもかなり珍しいんだ

さつきから物珍しそうに僕たちをチラ見してる人がいっぱい居るしでも、僕たちが一人で歩いたらどうする？

女子が殆どのこの地域で男子二人で歩くなんて、変態だと思われるよ

そんなの僕は嫌だし

だからお互い、女子である海咲ちゃんと真希ちゃんと一緒に行動してそれを回避しようとしてるんじゃないか

「…あ、そうか。なるほどなるほど。球磨川先輩の言うことも一理ある」

「『だろ？』 君だって変態って思われたくないだろ？』」

「でも、それだったら俺と清瀬先輩でも…」

「『年齢だと君と海咲ちゃんの方が近いだろ？』
『もし高三の僕が一年生の彼女と一緒に歩いてると、僕がロリコンだって勘違いされるじゃん？』」

僕は断じてロリコンではない

楔くんとは違う

僕は出来るだけ同い年か、一番妥協できて二年年下かな？

年上はちよつと御免だけど

「『はい、そうと決まれば即行動！』『なにかあればお互いメールなり電話なりして連絡を取り合つて』」

四人ともお互い携帯は持つてるし

ちなみに僕は先日真希ちゃんに携帯を選んでもらった

学園都市は世界最先端の技術を持つてるから、携帯も最新の機種や、見たことの無い機種でいっぱいだった

まあ、お金が足りなくて普通のになっただけど

「ちッ、精々足を引つ張るなよ」

「貴方の方こそ地に這い蹲ってるゾンビより足を引つ張りそうですよ」

例え方が少し怖いんだけど？

忘れてたね、彼女、僕には音楽系のゲームを進めたくせに自分はガンシューティング系が大好きだって

こういうところだけ何気に敦ちゃんと趣味があつて

二人はギヤーギヤーと争いながら去つていった

「さて、ボクらも行こうか」

それを見届けると、真希ちゃんも僕に行こうと
腕を引っ張り、常盤台へ向かい始めた

~~~~~

ちッ、なんで俺がこいつと一緒に行かなきゃいけないんだよ  
これかなら清瀬先輩の方がよかつたぜ

しかもこいつの過負荷は厄介で  
殴ることすら出来ねえんだ

ひでえと思わねえか？

「なに嫌そうな顔をしてるんですか？ さっさと歩いてください」  
てめえはいつも俺に突っかかつてるよな？

俺に恨みでもあんのか？

「お前、なんで球磨川先輩に着いて行こうと思ったんだ？」

「はい？ いきなりなんなんですか？」

「球磨川先輩を慕う理由はなんなのかって訊いてんだ」

同じ過負荷として、少しは気になるよな

こいつはこの前、突然球磨川先輩が連れて帰ってきたんだ

最初は俺も意味が分からなかったが、球磨川先輩はこいつが新しい過負荷の仲間だって言ってくれた

俺も最初は同類が増えてよかったって思ったさ

でもこいつと来たら…

『貴方、頭悪そうですね』

俺を見て一言そう言った

信じられるか？ 人を見て第一声が

”頭が悪そうですね”だぞ？

それ以来、俺はこいつが大嫌いになった

「貴方にしては、少しは知的な質問ですね」

「んだとてめえ！」

なんでコイツはそんなに俺を嫌うんだよ！？

「でも、まあなんででしょう？ 正直、私自身も分かりません。でも、気がついたら球磨川さんを慕っていました。先輩は、初めて私を過負荷として受け入れた存在なんです。だから私は先輩の仰ることならなんだってします」

球磨川先輩には、何気にカリスマ性があつたからな

こうなんというか、自分と同じ存在を引き付けるような雰囲気将球磨川先輩は持つてるんだ

「あ、そういえば」

琴吹はポンと手を叩くとなにかを思い出したようなことを言った

「この前は家まで送っていただきありがとうございました」

「はあ！？」

ぺこって俺にお辞儀してる

ってこいつが俺に感謝してる！？

こんなもん、2012年の地球滅亡説よりありえねえことじゃねえか！

「なんの風の吹き回しだ？ お前が俺に礼を言つなんぞ、考えもしなかったぞ？」

「人の親切を切り捨てるなんて…貴方は本当に最低ですね。ほら、



私も涙目になってしまったじゃないですか」

後ろを向いてしくしくと言ってる海咲

嘘吐けてめえ

さっきまで無表情だったじゃねえか

「そんな戯言なんか言ってるんじゃないよ」

「貴方はノリが悪いですね。こういう時は動揺するのが、  
なんか漫画っぽくていいじゃないですか」

「俺はそんな恋愛漫画みてえな展開は知らねえよ」

そもそも俺は球磨川さんみたくそういう漫画は  
好かねえんだよ

気持ち悪いったら仕方無い

「でも、感謝の気持ちは事実ですよ。貴方が送った  
所為で球磨川さんが一度死ぬことになってしまいましたけど」

「俺を責めてるみてえなこと言っなよ！」

さっき俺に感謝してるって言わなかったか！？

「それよりも…」

「俺の発言は無視なのか？」

琴吹は俺のクレームを無言で切り捨てた

ひ、ひでえ…

「それなら貴方はなんで球磨川さんの仲間になったんですか？」

なんだ、俺のことかよ

はあ…なんでだろうな？

ぶっちゃけ、あんま分かんねえ

俺も気が付いたら球磨川先輩と一緒に居たんだ

思えば、あの時から球磨川先輩のカリスマ性に俺も引き込まれていたんだな

『僕と居れば、君は世界一不幸せになれる』  
かわいそう

あの一言からだ

俺は球磨川先輩の魅力に魅かれた  
マイナス

自分こそ最低だと自負していた俺よりも底辺で、屑だった球磨川先輩

アイツのあの圧倒的な負完全の前に、俺は思わず安心してしまった  
マイナス

”俺より下が居る”

そんな安心感を与えてくれた

今まで俺を化け物としてしか扱っていなかった  
連中を、全員どうにかしてくれそうと思った

まあ実際は何一つしてくれたいんだが

それでもそれぐらいしてくれそうだった

「俺は球磨川先輩の負完全さに引き込まれた。あの圧倒的な  
マイナスイ性。」自分より最低な人間が居る”ってだけでこれほど  
頼もしいやつは居なかった。

なにより嬉しかったのが、球磨川先輩が俺達のことを友達って  
呼んでくれたことだ」

俺は生まれて一度も”友達”なんて存在は出来なかった

この過負荷を持つてる所為で、俺の近くで遊んでる  
連中は転んで怪我をしたり、時には事故に遭って大怪我を  
負ったりする連中も居た

それを気持ち悪がって、大人の連中は自分の子供を俺に近づけな  
かった

本当に孤独だった

両親なんて物心持った時から居なかった

多分俺の過負荷を恐れて捨てたんだろ

そんな中、球磨川先輩は俺を”友達”だと言ってくれた

”家族みたな存在”だと言ってくれた

人生であんなに嬉しかった言葉はなかった

ただの言葉でも、とても温かくて、穏やかだった

過負荷なんか関係なく、負完全なしで本当に温かい言葉だったんだ

俺たち過負荷にとって、友情、家族、努力なんてくだらねえことだ

でも、それでも俺たち嫌われ者マイナスにとって、そういう存在は本当に嬉しい

嘘も、戯言も、仮面も抜きで

「私たちにとって球磨川さんは恩人です。これだけは貴方と賛同できます」

珍しく意見が合うな

俺は琴吹を見直した

こいつだって、俺と同じぐらい球磨川先輩に感謝してるんだ

意見こそ違うが、やりたいことは感謝の気持ちは同じだ

俺もこいつも、球磨川先輩には計り知れないほど感謝してる

「そうだ。だから、俺は恩返しがしてえんだ。俺達に目的を、居場所を、温もりをくれた球磨川先輩に」

プラス  
幸せじゃねえのは分かってる

でも、それでも俺達は嬉しい

「もし球磨川先輩になにかあったら、俺たちで過負荷の連中を支えなくちゃいけねえ。その時は、よろしく頼むぞ」

俺は琴吹に向かって手を差し出す

嫌味とかじゃなくて、嫌がらせとかじゃなくて、

悪意も無く、嫌悪も無い、純粹に手を差し出す

改めて自覚した

俺とコイツは、所謂副リーダーみてえな存在だ

つまり、球磨川さんになにかあれば俺たちが仕切ることになる

その時にこいつと仲悪かったら球磨川さんに顔向けできねえ

これはその始まりだ

「…貴方こそ、突っかってこないでくださいよ？」

あいつはその手を受け取った

お互い握手を交わす

「よろしく頼むぜ、海咲<sup>みさき</sup>」

「そちらこそですよ、敦<sup>あつし</sup>さん」

十一話 「恩返ししてえんだ」(後書き)

次回はくまーと清瀬サイド

## 十二話 『僕は悪くない』（前書き）

連続投稿がストップしてすみません

あの名言、やっと登場です

くまーといえばやはりこの言葉でしょう！

…なのに今話はバトルがありません（おい

申し訳ない！

ちなみに明日も更新できなさそうです

はあ…面目ない…



## 十二話 『僕は悪くない』

「うわぁ…これはすごく広いね」

「『まあ、お嬢様の通う学校だから』」

常盤中学校の校舎は規模が違った

数多くの施設に、巨大な校舎

生徒なんて何百人も受け入れられそうな  
ぐらいの面積を誇り、綺麗な塗装の建物が並ぶ

僕たちの高校とは大違いだね

中学生の分際でこんなに良質な…

まあ僕も大人だ、中学生相手に嫉妬するつもりは無い

そんなお嬢様学校に圧倒されながらも、  
僕と真希ちゃんは校舎を散歩する

ここでの基本的な戦力や生徒たちの実力、  
そしてレベル5の能力についての情報

これらを探し出さなきゃいけない

ここでの基本戦力は大体分かってるけど

基本はレベル3の生徒、少数のレベル4、

二人のレベル5、そして警備員アンチスキルに所属してる教師数人だ

警備員アンチスキルっていうのは、この学園都市でいうSWATやSATみたいな部隊だ

教師や大人だけで構成されている最新鋭の銃火器や防具を装備した戦闘部隊

主に暴走した超能力者の鎮圧を担当していて、機銃の扱いはかなり優れている

国際的な問題になれば学園都市外にも派遣されるような危険性もある

そんな彼等を相手にするのは少し厳しい

幾ら過負荷のスキルを持っていたても、銃や防具相手じゃなにも出来ない

射殺されて終わりさ

だから、できるだけ教師の少ない日に攻め込みたい

後はレベル5の存在だ

確か御坂美琴さんは二年生だったはずだ

なら二年のクラスを調べないかね

「ここなんじゃないの？」

「『君の勘がそうなら合ってるんじゃないの？』『君の勘はよく当たるしね』」

僕たちが来たのは一つの教室

中には中学生たちが授業を聞いている

「なんか、平日に別の学校に行くのって変な気分だね」

「『まあ僕たちは実質的には学校をサボってるんだから』  
『変な気分になるのは仕方無いよ』『それより、真希ちゃんが良い  
の？』」

今日は平日だ

つまり普通の授業がある

それなのに、僕たちは学校をサボってまで  
ここを偵察しに来たんだ

居ても居なくても同じなんだけど

元々真面目に受けてるつもりはないし、そんな  
生徒って感じでもないし、そこに居るだけの存在

そんな僕と違って、真希ちゃんは一応はプラスで通ってる

皆に明るく振舞って、授業も真面目に聞き、成績もそこそこ良い

そんな彼女が僕たちと一緒にサボるのは、ちょっと変な気分だよ

「その二人！ 待ちなさい！」

廊下の前を歩いている僕らは呼び止められた

何かと思い振り向くと、そこには一人の警備員みたいな人

「一体どちら様ですか？ 今日は平日ですよ？」

やばい

不法侵入って気付かれたら、後に警備が強化されてもう一度ここに入るのが少し厄介になる

かと言って許可なんてもらってないし、見学だって伝えても多分信じてもらえない

そもそも過負荷の僕の戯言を信じる人なんて居ないけど

「『ああ…』 『その…』」

「この人不法侵入です。ボクが捕まえました」

なにか言い訳を言おうとすると、突然真希ちゃんが僕の腕を掴んでそう言った

まるでさっき僕を捕まえたって伝えてるかのよう  
え？ なにこれ？

「なに！？ それはご苦労でした。その坊主は  
我々で処分しますので、貴方は気を付けて」

「はい！」

そのまま真希ちゃんは僕を警備員に差し出した

耳元で、「ゴメンね雪くん？」って言った

あはは…僕、身代わりにされたのかな？

「ほら、さっさと歩け！」

どこかへ連行される僕

後ろを向くと、片手でピースサインをして  
悪戯っぽい笑みを浮かべてる真希ちゃん

「『はあ…』 君は色んな意味で最低だよ」  
マイナス

~~~~~

連行されていく雪くんを見つめた後、僕は再び教室の中を覗く

ゴメンね雪くん？

でも、ボクは捕まりたくないの

だって、それだと将来ボクが大変になるじゃないか

君なんてロクな未来が無いと思うし、
自分でもそう宣言してるんだから許してね？

雪くん風に言うなら、『ボクは悪くない』かな

「あの…なにをしていらつしゃるのですか？」

すると突然教室が開けられ、さっきまで
授業をしていた先生が顔を出した

さっきのやり取りでボクたちに気付いたらしい

後ろでは生徒達の視線がボクに集中している

「見学ですよ。妹がここに通う予定なんです」

「へえ、それなら教室に入っても構いませんよ？

生徒達の授業の邪魔にならないのなら、幾らでも見学してください」

お言葉に甘え、ボクは教室へと足を踏み入れる

それなりに広い教室

そして、まだ顔から幼さの取れていない
中学生たちの顔が見える

この中にあの超電磁砲レールガンが居るのかな？

まあ、堂々と名前まで公開していたんだから、
簡単に見付かると思うけど

「皆さん、見学をしたいと入っただけなので、
気にせず授業を続けてください」

ボクは礼儀正しくそう言う

それに従ったのか、皆ノートを書くのに戻っていく

全員が真面目な態度で、熱心に勉強に取り組んでいる

あはは、ウチの連中とは大違いだね

「今日は見学ありがとうございました」

授業が終わり、放課後になるとボクはお礼を言う

そこまで役に立つ収穫は無かった

まあ皆の授業態度からの性格とかは得られたけど

「いえこちらこそ。妹さんによりしくお願いします」

そういえばそんな設定だったね

本当は今ただの一人っ子なんだけど

「はい」

そういえば雪くんはあれからどうなったのかな？

連行されてからは連絡が何一つ無いんだけど…

拷問とか？

あは、さすがにそれは無いよね

でもここはレベル5が二人も居る学校だし、
事情聴取という名の暴力は受けてるかもしれないね

いや、高確率で受けてる

だってボクら、過負荷だもん

理不尽なんて付き物さ

「すみません…」

雪くんの捨てられてる場所を探しにいこうとすると、

突然声を掛けられる

振り向いてみると、ボクに声を掛けたのは一人の中学生だった

茶髪の髪の毛に、どこか気が強そうな目

敬語で話すのがあまり慣れて無さそうな子だ

「ん？ どうしたの？」

「いや、少しお話を伺ってもいいですか？」

初対面だけど、敬語はかなり違和感がある

まあ、それは気にしないでおこうか

流石に初対面でそんなことを言うのは失礼だし

「いいよ。まあボクに用なんて殆ど出来ないし、寧ろ嬉しいくらいさ。喜んで行くよ！」

少し軽い気持ちで彼女に着いていく

そんな軽い話ではないと思うけど

その証拠に、この子のボクを見る目は、
長年の憎き敵を見るような瞳だった

~~~~~

とある中学生に連れられ清瀬が来たのは、  
人目のあまりつかない校舎の裏

そこで誰も居ないのを察知すると、清瀬はさっきとは違い  
ふざけた態度を改め、友好的な笑みを冷徹で、気味の悪い笑みへと  
変える

一瞬にして豹変した清瀬の表情に、その中学生は若干身震いしていた

「…単刀直入に訊く。アンタ、何者？」

頭部をビリビリと発電させながら中学生はそう訊いてきた

威嚇のつもりか、所々静電気が漏れている

敵意で固められたその瞳に睨まれながらも、  
清瀬はその笑みを崩さない

「何者って、どういう意味？　ボクはただの  
か弱い女子高生だよ？　なんの能力も持たない、  
ただのレベル0の無能力者で…」

「嘘吐くな！」

中学生から電撃が清瀬に向かって放たれるが、  
それは辛うじて意図的に右へ逸らされ、当たることは無かった

後ろではバラバラと壁が崩れる音

威力は通常の発電能力者とは比べ物にならないほど大きい

清瀬は直感した

彼女こそ、この学園に存在するレベル5の第三位、  
レベルガン超電磁砲の御坂美琴だと

「いきなり能力使うつてどんな実力主義者なの？  
もし当たってればボクなんか一撃で死んでたよ？」

「正直に質問に答えれば、当てないわよ」

まるで脅すかのように手を清瀬へ向けた

少しでも怪しい動きをすれば打ち抜かんと  
言わんばかりに突き出されたその手は、まるで  
銃口を突きつけられているようだった

「アンタ、あの螺子の奴とどういう関係？」

「螺子の奴？ 一体なんのことかな？」

”螺子の奴”と言われ、清瀬は一瞬で球磨川だと分かった

螺子なんていうものを特徴として使うのは、  
球磨川以外に清瀬は考えられなかった

だか、学園都市の敵となる存在にその存在を

知られるのは宜しくないと思い、清瀬はその関係を否定した

「とぼけないで！ アンタだって、アイツと同じなんですよ！」

”アイツと同じ”

球磨川のマイナス性と負完全を目の当たりにした

御坂は、同じオーラを纏う清瀬に声を掛けていた

悪夢のようなあの男への報復を、御坂はまだ諦めていなかった

「…わあ、君スゴイね。彼でもボクの過負荷性は見抜けなかったのに、君は分かるなんて」

御坂は無意識に常に一定の電波を回りに張り巡らせている

それのお陰で、リーダーのような作用を施し、他人を感知できるようになっている

清瀬を感知した時、球磨川を感知した時と酷似した気持ち悪さを感じ、御坂は清瀬が球磨川と同類だということを見抜いていた

「やっぱりアンタも…！」

「強いて言うならそうかな。ボクはどちらかと言うと微妙なところなんだけど」

「微妙でもなんでもいいわ。アンタ、あの螺子の奴が何処に居るか知ってる？」

簡単に予想できた問いに、清瀬は慌てることなく、笑顔を崩すことなく答えた

「君、彼になにか恨みでもあるのか？ それの報復のつもりなら、一言だけ言っておいてあげる。やめときな

君じゃ彼には敵わない」

きつぱりと”自分は負ける”と言われ、御坂は少し怒りを感じていた

だが、それを清瀬で発散させるのを抑えながらも、言い返した

「やってみなきゃ分からないでしょ？ これでも私、レベル5なんだから。アイツに負けるなんて思ってないわ」

自信気にそう言った

学園都市最強の超能力者の部類であるレベル5

それに属している自身が負けるはずが無いと御坂は言った

そんな彼女に、清瀬はただ呆れんとばかりに首を振った

「その認識自体が甘いのだ」

彼はそんな君の認識の遙か下を行く」

清瀬も誇るように球磨川のことを話す

「随分自信満々なのね。何者なの、あの螺子の奴？」

「彼の名前は球磨川くん。」

悪でもなく、邪でもく、言うなら澄んだ川のように、濁ってもいない

でも、そんな彼は人間の負の側面を集約したような人だった」

清瀬は始めて球磨川と会った時を思い出しながら、語りだした

「ふ負」

一言そう告げた

まさに球磨川の特徴を現した一文字だった

「彼は誰に対しても負けていて生まれながらの敗北者で  
だからこそ誰よりも強かった」

奇想天外な人物の説明に、御坂は半分混乱していた

言っている意味が分からなかった

敗北者でありながら強者

強者であり勝者でもある御坂とは正反対な人間だった

「呼吸するように他人を傷付け

食事をするように破壊活動に勤しみ

己を含めた全人類を一人残らず滅ぼそうとか

悪夢みたいなことを至極真面目に企んでいそうな

大胆に破綻した人生そのものが荒唐無稽の破滅型

ありえないほどの影響力を持って周囲を

否応なく巻き込む

それが、ふかんぜん負完全、くまがわ そそぎ球磨川雪だよ」

途切れることなく言い抜かれた球磨川の人物像

まさに人間の負の側面全てを物語るような人物

人類最低の過負荷、それが球磨川だった

「ッ……！」

そんな人物像に、御坂は言葉が詰まった

「まあ、彼は今頃この学校のどこかに居るんじゃないのかな？  
本当はついこの間まで一緒に居ただけで、捕まって連行されちゃ  
ってね。」

未だに警備室で取り調べを受けてるんじゃないのかな？」

それを聞いた瞬間、御坂は駆け出した

警備員が連行した

つまり、あの球磨川に自ら近付いたという意味だった

”警備員が危ない”

そう直感し、御坂は警備室へと全力疾走していた

「ちょ、引つ張らないでよ！」

未だに清瀬を連れたまま走り、警備室の前まで  
来ると止まる

そして、扉を半ば蹴り開けるような勢いで開けた

そこに広がっていたのは、地獄絵図だった

壁や床は血と思われる液体の後が大量に付着している



中の監視カメラを確認するための  
テレビなどはスクリーンが割れ、無残にも  
壊れている

机や椅子は幾つも倒れ、その惨劇を物語っている

そして、壁にはそれぞれ、手や足、胴体などを  
螺子で貫かれ固定されている警備員たち

「なによ…これ…？」

あまりにも悲惨な状態に、ただ啞然とする御坂

「『うわあ』『これは酷い』『うん、こんな

極悪非道なことが出来るなんて人間の仕業じゃないよ』」

警備室の奥から聞える声

それに続き、こつこつと足音が聞えてくる

「『幾ら超能力者である可能性があっても

自分で自分を壁に刺せるような能力は無いよ』

『同士討ちなんてありえなさそうだし』『これは

明らかに第三者の仕業に違いない』」

段々と声は近付いてきていて、足音も次第に大きくなっていく

「『あれ？』『なんで君は僕を疑わしい目で見てるのかな？』

『僕が来たときには既にこうなっていたんだよ』『それなのに

僕を犯人みたいに扱うなんて、君は横暴な人だなあ』 『まあ要するに』

御坂の目の前に現れる男

顔を返り血で汚し、両手には血塗れの螺子

「『僕は悪くない』」

## 十二話 『僕は悪くない』（後書き）

次回は美琴とくまーの対決です

駄目文確定ですが、どうかお付き合いください…

ちなみに美琴のリーダーもどきが本文で登場した  
ような使い方が出来るかはわかりません

作中では出来るって設定にしておいてください…（泣）

十三話 『世の中は決定的に不公平』（前書き）

二日も更新できなくてすみません

連続投稿が段々と無理になってきました…

ちなみにタイトルは分かる人は分かると思います

次回の更新は…明日できるかどうか分かりません

ちなみに伝わっていないようなのでもう一度書きます

過負荷の募集を終了します

皆さん、ご協力本当にありがとうございました

### 十三話 『世の中は決定的に不公平』

「『あはは…』」

僕はこの惨状に、思わず乾いた笑い声を漏らす

目の前には激怒してる中学生と、

苦笑いを浮かべてる真希ちゃん

君は笑ってないで僕を助けてくれよ…

まあ、無理だと思うけど

彼女の過負荷は他人の自分に対しての負の感情を  
別の人に押し付ける能力だから、僕には使用できない

これは彼女のある意味最低<sup>さいこう</sup>の過負荷だから  
穴だってそれなりにある

自分に憎しみとか負の感情を抱いていなかったら  
効果は無いし、海咲ちゃんみたいに無感情の人には滅法弱い

でも、今回の場合、この中学生ちゃんは僕に  
憎しみや怒りといった負の感情を抱いている

肩代わりできないのがあのスキルの欠点だね

「『わ!?!』『ちょ』『危ないって!』」

さつきからガンガン僕に電撃を放ってくる中学生ちゃん

って、電撃ってこの前会ったあの中学生ちゃんじゃないか

あのことをまだ根に持っていたのかな？

あの時は正当防衛だって言ったのに…

「『はあ…』 『人気者は辛いぜ…』」

あの四人組に恨まれたり、この中学生に恨まれていたり、僕は結構な人気者らしいね

「アンタの所為で、どれだけの人が傷付いたと思ってるのよ！」

僕に向かってそう叫びながら、再び

大きな雷をぶっ放してくる

「『でも実質的には誰も殺してないだろ？』 『全員生きているし』 『傷も残ってない』 『それなのに、なんて僕は怒られなきゃいけないのかな？』」

「たとえ傷が無かったとしても、アンタの所為でアレを受けた人はちゃんと苦痛を感じてるのよ！ そんなことも分らないの！」

はあ、物分りの悪い人だなあ

彼女の言ってることは確かに善だよ、正しいよ。とても善良な<sup>プラス</sup>ことだ

だからそんな君に教えてあげるよ

善良プラスなんて、善悪マイナスでかければ簡単に不幸マイナスになるってね

「『なら君に訊くよ』 『それならそいつらはまったく悪くないって言い切れるの？』 『君の言ってることは』 『あちらにまったく非が無いって言ってるのと同じことなんだぜ？』」

僕の発言に言葉を詰まらせる中学生ちゃん

「『それに、僕たちだって正当防衛みたいな理由ぐらいあるんだぜ？』 『人権って知ってる？』 『人間は全て平等に創られていて』 『決して犯すことの出来ない権利というものがあるって』 『ならなんで僕たちは反論の権利も認められないの？』 『過負荷ほくたちは”人間”に入らないの？』」

僕たちを殴っても、睨んでも、貶しても、暴力を振るっても、誰も文句を言わない

全ての人間が平等に創られているのなら、なんで過負荷はこんな理不尽で最低なスキルを持っているんだ？

人間が平等なんて嘘だ

生まれた時点で僕たちは過負荷マイナスという不利があるんだぜ？

これは平等じゃないよねえ

「人間が平等だっていうのは綺麗言さ」 「人間は才能に恵まれている人と」 「恵まれない人で大きく分かれる」 「君だってそうだろ？」 「才能があるからレベル1からレベル5まで上がれて」 「才能があるから超電磁砲なんてものを使える」 「

彼女の正体は真希ちゃんが連れてきた時点で分かったよ

御坂さんにとって、僕みたいな  
負完全は初体験だろうね

だからイライラや怒り、憎しみが倍増されてる

こんな気持ち悪い僕なんて、さっさと殺したいんだと思う

「枯れない花は無いけど」 「咲かない花はある」

『世の中は決定的に不公平だ』 「

とどめ

そう言わんばかりに僕は笑みを浮かべてそう告げる

彼女は呆然と立ち尽くしてる



「『その不公平をどこまでも受け入れるのが』  
『過<sup>ほく</sup>負<sup>たち</sup>荷だ』」

螺子を取り出し、両手に構える

レベル5といっても、やっぱりまだ子供だね

僕がちょっとだけマイナス性をぶつけただけで、  
まるで耐え切れていない。これじゃあ倒す時は簡単に  
倒せそうだよ

「『もう手加減は無し』『こっちからも攻撃させてもらっつね』」

僕は彼女に向かって螺子を投げつける

呆然として、避ける気配はまったく無い

まあ殺す気なんてまったく無いけど、  
少し威嚇かな？

でもここでありえないことが起きた

うん、僕の螺子は確かに彼女に一直線で向かっていた

だがその螺子は彼女に当たることなく、まるで  
意思を持ったように右へ逸れて近くにあった鉄の門にくっ付いた

ちなみに場所は攻撃を避けてく内に校庭にたどり着いていた

「『？？？』」

「…頭の悪そうなアンタに分かり易く説明してあげる」

キリつとした表情に戻って、僕を睨んでる

「鉄つていうのは電気を送り込んで＋極と－極を纏わせることができる。それである門には＋極を、アンタの螺子には－極を与えた」

「『それがどうかしたの？』」

「＋極と－極はお互い引き寄せられる働きがある。これがどういう意味が分かる？」

…－極を浴びた僕の螺子は全て門に引き寄せられるってわけ？

「『僕の螺子は君には当たらないって意味かい？』」

「そう。もうアンタの攻撃は私には当たらない！」

…伊達にレベル5を堂々と名乗っていないね

磁石の原理を利用して僕の螺子に－極を埋め込むなんて…

電気能力ならではの応用方法だ

でも、そんなことしたって僕が自分で近付けばいいだけじゃないか

あまり肉弾戦は得意じゃないけど、

中学生程度に負けない自信はある

「『でも』『肉弾戦には対応できないんじゃないのかなあ?』」

彼女に向かって走り、螺子を突き刺そうとする

「『最初は少し遊んであげるね御坂さん!』」

だがそれを御坂さんは軽く避けると、僕の  
鳩尾を思いつき殴った

幾ら女子中学生程度の力しかなくても、急所を  
殴られた僕は少々飛ばされ、地面に倒れこんだ

「『ゲホツ…ゲホツ…』」

吐き気を押さえ込みながら、僕は立ち上がる

螺子を放り投げるが、それはやはり  
門に引き寄せられ、くっ付いて取れなくなる

やっぱりまだ忘れていないね

「『くッ…!』」

迫ってくる電撃を辛うじて避け、彼女に接近する

再び螺子を顔に向かって刺そうとする

目の前からの攻撃はさすがに避けられないとは

思ったけど、彼女は不自然なまでにそれに反応し、避ける

避けられた瞬間、僕は大きな雷によって吹き飛ばされた

「言っただでしょ、アンタの攻撃はもう当たらないって」

「『…君』『喧嘩強いんだね』『どこかの不良みたいだよ』」

「人聞きの悪いことを言わないで！　そう思ってるほど強くないわよ」

でも、明らかに反射神経が良い

喧嘩慣れしてるっぽいし、僕が攻撃した後の隙に的確に反応して素早く反撃してる

力だって中学生とは思えないし

「私はただ、自分の脳を活性化させてるだけよ」

脳を活性化？

「人間の体っていうのは電気信号で行動のやり取りを行ってる。私はただ、自分の能力を使ってその電気信号のやり取りをちょろっとだけ早くしただけよ。あまりに早すぎると体が着いて行けないしね」

それでその異常なまでの反射神経か

素早く反応し、俊敏に避け、的確に反撃する

今の彼女には、身体能力の低い僕なんかテレビのスローモーションのような遅さに感じていると思う

なんてチート能力だよ…

僕が言えたもんじゃないけど

「後、人間の体は通常は”全力”の三割程度しか体は動かせないって知ってる？」

確か人体って抑制が掛かっていて、実際に使える力のほんの少ししか出せないんだろ？

それ以上は体に負担が掛かり過ぎて悪影響が出るって聞いたし

「これも電気信号の都合でやり取りされててね、その抑制も少しだけ緩くさせてもらったわ。まあ、ほんの一割程度多くしたただけだけどね」

つまり、今は実質的に人体の四割の力を出せている

それだけの違いでここまで身体能力が上昇するなんて…

はあ、やっぱり電気能力って応用が広いなあ

羨ましい

なんたってチート能力は少年のロマンだから！

「『…はあ』 君のその能力はとことん有利だね<sup>プラス</sup>」  
『<sup>マイナス</sup>不利の僕がまるで齒が立たないよ』」

溜め息を吐くと、僕は自分の惨状を確認してみる

何度が殴られ口が切れて血が少々流れてる

鳩尾も殴られてるから少し呼吸し難い

雷撃を喰らった所為で体中が痺れ

動かしにくく、さらには傷から血が流れてる

それに対して彼女は無傷

僕のマイナス性に当てられて少し精神が不安定になっていたけど、それも今はかなり回復してる

落ち着きを取り戻し、僕を翻弄してる

はあ、僕の負けかな？

「『また勝てなかった…』」

そう呟く

「は？」

彼女はそれが聞えたのか、意味が分からず首を傾げている

「『僕は素直に勝つことを諦めるよ』 『やっぱりレベル5に勝とう』」

なんて無理があつたかな?」

『僕は素直に』

『フェアに』

『公平に』

『勝利の可能性を捨てよう』」

徐々に傷口が塞がっていく

血も蒸発するかのように消えていき、  
呼吸も次第に整ってくる

「『でもだからって』 『僕は負けるつもりなんて無い』」

そして、服も新品のように綺麗になり、  
傷が全て消える

「ッ……! (どうして!? こいつの能力、回復系だと思ったけど、  
これは異常すぎる! 傷ならまだしも、服まで治るなんて!)」

「『なにもかもゼーんぶ台無しにしてあげるよ』」

そして僕は数本の螺子を取り出し、御坂さんに投げつけた

「なッ!?!」

普通ならそのまま磁力によって門に向かうはずだけど、

なぜか方向を変えず彼女に一直線に向かっていた

だが、強化された反射神経のお陰で間一髪で避けていた

「そんな、まだあの門は磁力を纏っていたはず！  
それにアンタの螺子にだって投げられた瞬間・極を  
埋め込んだのに！　なんで通用しないのよ！」

「『あはは』『滑稽な光景だぜ』『過負荷相手に戦略的に  
勝とうなんてそれこそ荒唐無稽な話だぜ』『僕たちは理論も  
論理も定理も』『ぜーんぶ台無しにするのに』」

自分の作戦が破られ、混乱する御坂さん

さっきまで門にくっ付いていた螺子は全て  
地面に落ちていて、明らかに磁力が発生していない

「『君は常に演算を行ってあの門の磁力を保っていたんだろ？』  
『そんな脳に負担が掛かりそうなこと』『態々ご苦労さんだね』  
『でも』『そうと分かれば破るのは簡単だ』」

「アンタはなにをしたっていうのよ！」

「『君の演算を「無かったこと」にした』」



そう彼女に告げる

啞然とし、呆然とし、愕然としている

僕の過負荷の場合、原理なんて関係ない

全部一瞬にして台無しにするんだから

「『<sup>すべて</sup>現実を<sup>なかったこと</sup>「虚構にする」、それが僕の大嘘憑きだ』」  
オールフイクション

もはや使い慣れた無能力<sup>マイナス</sup>の正体を明かす

「『ついでに教えてあげるよ』『僕のもう一つの過負荷の正体を』」

僕は懷からさらにもう一つの螺子を取り出す

今まで使っていた+の螺子ではなく、-の螺子を

少しずつ、彼女に近付いていく

「ひッ…！」

負完全の、マイナスの、最低の僕に怯えている

さっきまでの威勢はどこに行ったんだろう？

地面に座り込んで、後退りしてるが、僕は

それ以上に早く歩いているため、少しずつだけど近づいている

「『僕の禁断の過負荷』 この世で一番最低な過負荷」

校舎の壁にぶつかり、もう逃げ場は無くなってる

そして、僕はその螺子を振り上げる

「『ブックメーカー  
却本作り』」

「『フフーン』『フーンフーン』」

常盤中学校を出ながら、僕は鼻唄を唄う

「あれ、珍しく上機嫌だね。それほど御坂ちゃんを倒せたのが嬉しいの？」

隣を歩く真希ちゃんがそれを不自然に思い、疑問符に僕に訊いてきた

「『いや、あれは僕の負けだよ』『僕たちはどちらも死んではないし』『倒せてもいないよ』」

『だから戦いの展開でいうと』『彼女の大勝利さ』」

「そう？　ならどうしてそんなに上機嫌なの？」

「『だって』『初めて却本作りブックメーカーを使えたんだぜ？』」

『嬉しいに決まってるじゃないか』」

あの過負荷こそ、レベル5の抹殺に一番有効なスキルだ

それを試しにレベル5に使用したんだ、かなり大きな進歩だと思うぜ？

「知らなかったよ、雪くんが二つも過負荷を持っているなんて」

「『僕は特殊だからね』『却本作りブックメーカーの説明はまたいつかするよ』だからその時までこの過負荷の存在は秘密にしてくれよ？』」

あの二人をビックリさせたいし

過負荷なんて一つだけで不便なんだし、

二つも持つのはある意味かなり無謀なんだ

でも、僕は特殊な過負荷だからね

「その却本作りブックメーカーって使ってもよかったの？　まだレベル5を殺すのは時期が悪いって言っただけ？」

「『一応は手加減したからね』『本来の効果の一割も出してないよ』」

『彼女ほどメンタルが強いなら一時間ぐらいで立ち直れるさ』」

たとえ一割程度しか使わなくても、常人じゃ精神が崩壊しかねないスキルだ

それほど凶悪で、理不尽で、最低なスキルだ

効果を試したいから使ってみたけど、散々な結果だった

あのスキルをくらった御坂さんは、ほんのちよつとの時間だけとんでもないぐらい心が折れていた

もし手加減してなかったら、完全に崩壊していたね

まあ、今日の出来事の所為で彼女の僕に対しての憎しみがかなり増幅したと思うけど

「それにしても、もうこんな時間だね」

辺りは日が沈み始めていて、綺麗な夕焼けだった

周りには部活を終えた学生たちで賑わっていて、さつきまで死闘が繰り広げられていたとはとても思えない

「どうする？ 敦ちゃんと海咲ちゃんを探す？」

「『あの二人なら自分で帰れるんじゃないの？』『僕たちだけでも

「このちよつとした休日を楽しもうか」

「それってデートみたいだね。ボク、同い年の男の子と遊ぶのって始めてだよ」

真希ちゃんは何故かこういうのに敏感なんだよね

なんというか、愛情に飢えてるっていうか

まあ、そういうところは可愛らしいんだけどね

「だから、雪くんが全部おごってね」

綺麗で、プラスな笑顔でそう告げた

僕は自分の財布の危機を直感的に感じる

「『はあ...』 『やっぱり君は色んな意味で最低だよ』  
マイナス  
」

十三話 『世の中は決定的に不公平』（後書き）

人類最低vsツンデレ、呆気なく終わってしまいました

くまーは本当に扱いが難しいです。勝つてはいけないので、  
いかにどうやって胸糞悪く負けさせるかでかなり苦労します

十四話 「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」(前書き)

タイトルは分かる人は分かると思います

いや、ぶっちゃけ木更津は零崎人識の性格を

イメージして書いたので、一度は言わせてみたかったです

ちなみに今回は本当に今までで一番駄目文です

十四話 「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

「『もしもし?』」

いつも通りの放課後、僕は自室で寛いでいた

一度も片付けていない布団に座りながら、  
漫画を読んでお菓子を食べる

典型的なニートの生活さ

他の三人はそれぞれ予定があつて部屋には居ず、  
今は僕一人だけさ

そんな駄目駄目な一日を送っていると、僕の携帯が鳴り響いた

《もしもし、球磨川さんでしょうか?》

「『ああ、海咲ちゃんか』 『どうしたの?』」

《上条当麻くんが行動を起こしました》

忘れてた、彼女に上条くんの監視を頼んだの

だから今日は居なかったんだ

「『へえ』 『行動つてどんな?』」



《彼の住んでいるマンションで火災が発生しました。ただの人災ならまだしも、なんの前触れも無く突然》

なんの前触れも無く？

その言葉に僕は意味が分からず首を傾げた

普通火事っていうのは、タバコの消し忘れやコンセントの不具合によって発生する

そついうのだと小さな炎が段々と燃え移って巨大な火事へと変化するはずだ

でも、海咲ちゃんの話によるとマンションはなんの前触れもなく巨大な火事が発生した

恐らくは発火能力者だろうね

「『直ぐそつちに向かうよ』『だから海咲ちゃんは先に行って見てきてくれないかな？』『もし超能力者だったら直ぐ逃げて』『たとえ君がどれほど最低な能力を持っていても』『超能力者には勝てない』」

たとえ彼女の『絶対禁止』が完全無比の過負荷であろうと、マイナスは勝つことはできない

出来るのは胸糞悪い敗北か、曖昧な引き分けさ  
引き分けなんて僕が許さない

同士討ちなんて僕以外の人間がするもんじゃない

~~~~~

「いきなりの発火…明らかに不自然ですね」

上条くんのマンションを監視していた私は、
そんな独り言を漏らす

元々は球磨川さんの頼みごとのために監視していましたが、
監視するにつれ、彼には呆れました

困っている人がいれば助け、自分の身を危険に晒す

とても正義感の強い、プラスの塊のような人です

そんな彼を監視してからそれなりに経ちましたが、
特に変わった様子はありませんでした

それなのに、今日だけ明らかに不自然です

突然マンションから火の塊が噴出しました

それも、生き物かのような形を保ちながら

現実離れしていて、超能力とも過負荷とも呼べないその

炎は、まるでおとぎ話に出てくる怪物のようでした

さすがにこんなことは球磨川さんには伝えられず、今はまだ秘密にしていますけど…

球磨川さんは見て来いと言いましたし、
現在私はマンションの階段を上っています

階を一つ上昇するたびに、その炎の熱が徐々に強まってきました

まるで近くに溶岩があるような、
それほどの灼熱が広がっている

上条くんの階へとたどり着いた私は、愕然とした

目の前に見えるのは化け物

一言で片付ければそうなる

体は溶岩で出来ていて、腕や
口など動物のような箇所も見える

私がよく遊ぶゲームの敵キャラとして出てきそうな
ぐらい化け物らしいソレは、上条くと相対している

化け物の後ろ、つまり私の前に立っているのは
一人の赤い髪の男。見た目はこちら辺ではあまり見かけない
格好で、背も私よりは数十センチ高いと思います

その人物は気配に気付いたのかこちらを振り向きます

「誰だ、お前？」

疑問符にそう私に尋ねてくる

それはこちらが訊きたいんですけどね…

「名を訊く場合、まず自分から名乗るのが礼儀なんじゃないんですか？」

「それは失礼した。僕はステイル・マグヌス、ただの神父さ」

明らかにただの神父じゃないですよ？

どこの神父が背後に灼熱の悪魔を従わせてるんですか

「貴方は頭がおかしいんじゃないんですか？ どこの神父が背後に溶岩の化け物を従わせるんですか。それに、たとえそれが普通であろうと、過負荷^{マイナス}である私にとって普通^{ノーマル}なんてあまりにも滑稽に見え、聞こえ、感じ、思います」

「へえ、ただの小さな高校生が、随分威勢の良いことだね。逆に感心するさ、コレを見ても取り乱さないなんて。こういう光景に慣れているのか、それかかなり鈍感かい？」

「生憎とそんな化け物程度ではもう驚かないんですよ。私はこれまでそれ以上に出鱈目な過負荷^{もの}に会ってきましたからね」

球磨川さんの大嘘憑きの能力を知った後、もう大抵なことでは驚かなくなりました

だって、現実を虚構にする能力ですよ？
すべて なかったこと

出鱈目にも程があります

「なにやつてるんだよ琴吹！ 逃げろ！
そいつはただの怪しい奴じゃねえんだよ！」

「いや、そんなの見れば分かりますよ。なんで貴方達は
分かり切っていることをまた繰り返しに発言するんですか？
はつきり言つて息の無駄使いですよ？」

ただの怪しいやつならまだ変態で片付けられます

でも彼のあの化け物を見た時からこれは
超能力なんて生易しいものではないと確信しました

「随分生意気なんだね。僕は彼に従った方が得策だと思うよ？
もっとも、これを見たからには逃しはしないけどね」

ああ、一般人は見られたら抹殺なんていうお決まりな展開ですか

なんで見逃してくれないんでしょう？

わたしたち
過負荷にバレたつてもなにも不利にはならないのに

私たちの戯言を信じる人なんていると思いますか？

「素直に見逃してくれないんですね。はあ、
まったく！ プラスというのは皆こんなに面倒な方なんですか？」

マグヌスさんは上条くんから私へと標的を変える

それに従い、あの化け物も私を向きます

「待て！ ソイツは無関係だ！ 手を出すんじゃない！」

それを上条くんが止めようとしますが、彼は耳を傾けません

「貴方は自分の心配をしたらどうなんですか？
相変わらず呆れるまでの善良者ブラスですね」

「やれ、イノケンティウス魔女狩りの王」

イノケンティウスと呼ばれたその灼熱の悪魔は、私に向かってその巨大な腕を振り上げる

それを一直線に振り下ろしてきます

「『来ないでください』」

私がそう言うと、その腕はなにか透明な壁に当たったかのように弾かれ、近くの壁にぶつかる

予想外のことにマグヌスさんは驚きの声を上げる

「なッ！？ 君、なにをした…！」

「なにって、私はただ痛いのが嫌なので、

来ないでくださいって言っただけですよ?」

曖昧に返答する私に、マグヌスさんは少々苛立ちを見せ始める

「君の超能力かなにか?」

「超能力?」冗談は止してください。私みたいな
マイナス
無才能にそんな高位な技術が備わるはずが無いでしょう?」

ただのレベル0です、と付け足す

不思議そうにマグヌスさんは疑問符になり、
上条くんは驚いた表情のまま固まっています

恐らく彼は私になにかの能力者だと思ったんでしょうね

残念、私は超能力者ではなく、マイナスですよ

「マイナス?」

「はい、マイナスです。この世で一番の負け組であり、
敗北者であり、屑であり、社会の塵である嫌われ者集団です」

「…マイナスか。興味深いものだね。でも、そのマイナスとやらの
お陰でイノケンティウスが通用しないみたいだね。なら…」

なにか詠唱のようなものを唱え始めると、彼の手の
周りに炎が集まり始める

それは徐々に形を成してゆき、固まった

「炎の剣…どこのロープレゲームの武器ですか？」

手に持ったのは、炎で出来た剣

まるでファンタジーゲームに出てきそうなものです

「どこまでも僕を馬鹿にするのが好きらしいね。
直ぐに喋られないようにしてあげるさ」

剣を振り上げ、私に向かって突っ込んできます

はあ…何度やっても同じだっていうのに…

「やめろ！」

上条くんが取り乱したような勢いで私に向かって走ってきます

途中にあの化け物が居るのにも関わらず、私を
助けようとしているのか手を伸ばしている

「大丈夫ですよ上条くん。私にこの程度の
ものなんて」

だが、そこで予想外のことがありました

確かに私は彼の剣を”認識”しました

認識し、拒絶したはずです

にも関わらず、その剣は弾かれることなく私に向かってくる

まるで、私の『絶対禁止』が発動していないかのように

「ッ…！」

間一髪で頭を後方に逸らす

鋭い痛みが頬を駆け巡り、指で触てみると血が付着する

完全に斬られています、私の過負荷がまるで発動していません

「どうしたんだい？ 斬られて不思議かい？」

「くッ…！」

「まあ、僕も実際は分からないんだけどね。イノケンティウスが通用しないなら、恐らくはこれも通用しないとは思ってたけど、良い意味で予想を裏切ってくれたよ」

この人はなにもしていない

ならどうして…！

私の過負荷は拒絶さえすれば弾くことが出来るのに…！

「っ…！」

再び剣を向けられる

このままじゃ…殺される…！

「おいおい、さっきまでの威勢はどうしたんだい？」

一度退き、球磨川さんと呼ばないと…

この場を後にし、階段を駆け下りようと思いますが

階段の正面まで来ると、炎の壁が
入り口を遮る

「さっき逃がさないと言っただろ？ 本当は
僕は紳士だ、君のような女性は殺したくは無い。
でも、彼女の…インデックスのためだ…！」

こちらに向かって歩いてくるのは
あの炎の剣を持ったマグヌスさん

「勘違いをしている人は…嫌われますよ？」

「君の知ったことではないだろ…！」

斬られ、殴られ、蹴られ、刺される

…痛い…

これが本当の傷、致命傷、苦痛

今まで攻撃は全て弾き、当てられたことのない
私にとっては気が遠くなりそうなぐらいの激痛

血があちこちから流れ出ているのが自分でも分かります

「くそッ！ 琴吹！」

マンションの廊下の奥から上条くんの声が聞えます

彼は私に駆け寄りたいのに、あの化け物によってそれが邪魔されているようです

恐らく彼はなんらかの方法で能力を無効にする能力を持っているはずです

でも、それをもってしてもあの化け物は倒せませんか…

あれは生き物ですからね

そう簡単に倒せるとは思いません

「なにか言い残すことはあるかい？」

地面に平伏している私に向かってマグヌスさんはそう問う

「…言い残す言葉なんて…なにもありません…私たちマイナスに未練というものは…この世に存在しないのだから…」

最後に、あの球磨川さんの言葉が頭に思い浮かぶ

『もし超能力者なら逃げて』『たとえ君がどれほど最低な能力を持っていても』『マイナスは超能力者には勝てない』

あの忠告は、どうやら本当のようですね

それに従わなかった私に非があるんでしょう

この人は超能力者でなくても、なにかしらの
異能な能力を持っている能力者^{プラス}

私は不利になるような能力しか持っていない無能力者^{マイナス}

マイナスはプラスに勝てない、球磨川さんが言っていた世界の真理

それは本当でしたね

私はここでプラスに殺され、マイナスに終わるんですから…

「グハッ!？」

突然マグヌスさんがうめき声を上げる

その所為か、間一髪で突き刺そうとしていた
剣は逸れ、僅かに頭を掠れた

閉じていた目を開けると、そこには
拳を彼に向かって突き出している人物

「…敦さん…」

マグヌスさんを突き出したのは、同じ過負荷の先輩

ミスフォーチュン
負運性の木更津敦さん

「『大丈夫：じゃないよね』『生きてる海咲ちゃん？』」

そして、私に駆け寄ってくれたのは私たち過負荷を纏める人

負完全、球磨川雪さん

「先輩方：遅いですよ」

安心と痛みの所為なのか、私の意識は遠くなる

そして、そのまま闇へと落ちていった

~~~~~

「『こりゃ酷いね』『裂傷に打撲』『火傷も酷い』  
『かなりの大怪我だよこれは』」

「そんなのみりや分かる」

僕は海咲ちゃんの介護をはじめ、

敦ちゃん海咲ちゃんを殺そうとした

人物と相対する

それにしても、なんで戦ったんだろう？

はあ…あれほど戦うなって言ったのに…

ま、この子の負けず嫌いな性格を考えると、  
あまり期待はしていなかったしね

過負荷なのに負けず嫌いなのはかなり珍しいけど

「誰だよ…アンタら？」

巨大な化け物と相対している上条くんは  
僕たちを見てそう言っている

「『あれ？』『覚えてないの上条くん？』『ほら僕だよ僕』  
『結構前に転校して君のクラスに乗り込んできた球磨川だよ』」

上条くんはなにか思い出したのか苦い表情をする

「ッ…！」

「まったく次から次へと…面倒だ」

あの背の高い男性が僕たちに駆け出す

彼が持っているのは、大きな炎の剣

おいおい、どんな厨二の武器だよ？

まあ、僕はそういう週間少年ジャンプみたいな武器が一番好きなん  
だけど

「おいおい、お前の相手は俺だぜ？」

それを敦くんが顔面を殴り、吹き飛ばす

さすが喧嘩慣れしてるだけはあるね

御坂さんみたいに能力を使っくんじゃなくても、

この敦ちゃんの身体能力の高さは純粹に鍛えてるからだ

僕みたいな貧弱體質の高校生とは大きい違いだ

「くっ……！ 君も僕の邪魔をするわけだね」

その問いに対して敦くんは鼻で笑った

この距離からでも分かる、彼はかなり怒ってる

いや、激怒してる

どうやら敦ちゃんはブチ切れると怒鳴るのではなく、  
テンションがかなり上がり、上機嫌になるタイプのようだね

「はッ！ 人の友達殺しかけてなにぬかしてんだよ？」

悪いが俺は球磨川さんみてえに優しくはねえ、

てめえを殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」





十四話 「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」(後書き)

やつと原作に入れた…

これからは急展開がかなり勃発すると思います

主に過負荷勢力が凄い勢いで増えたり…

次回は敦くん大活躍です(笑)

## 十五話 「不運だったな」(前書き)

実はあまり魔術サイドはやらない予定です

くまーの目的はあくまで超能力者<sup>エリート</sup>を抹殺することなので

です。この後はしばらく魔術サイドはやらないと思います

## 十五話 「不運だったな」

自分の殺人の意思を晒した木更津

下品に笑い、満面の笑みでそう告げる

木更津に、ステイルは戦慄していた

たかが高校生がこんな表情を出来るのか…？

そう疑問に思うステイルだが生憎と彼は過負荷だった

”マトモ”に育つてなく、何人もの人間を不運にも殺してる殺人鬼

あの球磨川でさえ、一度は木更津に殺されていた

「（こいつは拙い！）」

素早く炎を木更津に向かって放つが、

それはただなにも無い空間を燃やすだけだった

「何処狙ってやがる？」

「ぐッ…！」

ステイルの直ぐ真横に現れた木更津は、  
その拳を振り下ろす

戦闘慣れしているステイルは辛うじて

その攻撃を回避し、持っている炎の剣で斬りつける

「おっと」

頭を後ろに後退させそれを避ける

そのまま天井へと剣は直撃する

「君も殺し合いには慣れているんだね……！」

「まあな。それより、そこに居ると危ねえぞ？」

瞬間、ステイルの立っている箇所だけの  
天井が崩れ落ちてきた

間一髪で後ろへ逃げその災害を逃れたが、  
炎の剣は瓦礫の中へ埋もれてしまっていた

「おつとわりいな。不運にもお前の刺した箇所が  
天井を崩して、運悪くお前だけが巻き込まれそうになったな」

それを木更津は、ケラケラと笑って見ていた

「ちッ、なにをやったかは知らないが、  
この程度で勝った気にはなるな！」

木更津から見れば、なにか書かれた紙を取り出しているだけだったが、それはステイルから見れば隙に過ぎなかった

「なッ!？」

直後、火球が木更津に向かって放たれる

予想外の出来事に一瞬反応が遅れ、

致命傷にはならなかったものの腕を焼かれる木更津

「どうだい、初めてくらった魔術は？」

挑発的にそう言う

「魔術？　なんだよソレ？」

「君たち学園都市の連中には決して理解できないようなものだ」

再びステイルは紙を取り出す

すると、徐々に炎が手のひらに集まっていき、

灼熱の温度が木更津にまで広がっていた

「はぁ、あっちいなぁ……」

すると、地面に俯きなにかブツブツと言い出す木更津

それを見て、気味が悪いと思ったのか、

顔を顰めるステイル

「ククク……」

不気味に笑い出す木更津

すると、突然顔を上げる

「ギャハハハハ！　おもしれえなあ！

最高だよてめえ！　魔術がなんか知らねえが、おもしれえ！

てめえがたとえ魔術だろうが神の能力を持っていようが、そんな  
高位の能力者を殺せる俺は最高にツイてる！」

狂気の箆った目でステイルを見つめていた

まるで、生肉を見詰める獣の如く、

興味深い獲物を見つけたかのように、

木更津はステイルを睨んでいた

その様子にステイルは呆然としていた

これまで何度も殺し合いを経験したステイル

そんな彼にとっても、木更津のような

人間は初めての経験だった

「『おい敦ちゃん！』　『厨二病発言はいいからさ』

『さつさとそいつを倒してよ』　『それに殺しちゃ駄目だからね』

『殺人とか犯して目を付けられたらたまったもんじゃないよ』」

後ろからこの場に似合わない球磨川の声が響き渡る

「ちツ、なんだよつまんねえなあ…でも

悪いな球磨川先輩、そいつあ負けちまうわ」

この言葉に、ステイルは疑問符になる

自身の実力に自信が無いのか？

そう思っていた

「殺したら駄目なら俺の負けだわ。いや、寧ろそれが良い」

不可解な発言を繰り返す木更津

過負荷として、最低として、殺人鬼としても  
圧倒的なマイナス性を持つ彼の言葉は、ステイル  
にとってはこの上ないまでの気持ち悪さだった

「過負荷は負けることしか出来ねえ。今回の場合  
おれたち  
”勝つ”条件がこいつを倒すことであって、殺すことじゃ  
ねえつつうんなら、好都合だ。」

お前を殺して負けれるからなア！」

ポケットからナイフを取り出す木更津

何度も人を殺していながらも、  
殆ど錆びついていないその凶器

それを指の間でクルクルと回すそれは、

まるで木更津の手足のように自在に動いていた

「おら、続けようぜ魔術師<sup>プラス</sup>。てめえを  
殺して解して並べて揃えて晒してやんよ！」

ステイルに向かって駆け出し、ナイフを突き刺そうとする

その速度は、人間とは思えない速さで接近していた

あまりの速さに反応できず、ただナイフが自分の心臓  
に迫るのを見詰めるステイルだったが…

「グフツ！？」

何かに吹き飛ばされ、球磨川の座っている  
位置まで飛ばされる木更津

ステイルは目の前に立っている人物に驚く

「神裂…」

長い太刀を持っている神裂と呼ばれたその女は、  
無言で球磨川ら過負荷を見詰めていた

「『ん？』『どうかしたんですか？』『』」

しばらく呆然としていた木更津に代わり、  
球磨川が話しかけていた



「『ああ』『展開から見れば仲間って感じですね』『まったく…』『死亡寸前で仲間が助けるなんて展開は週間少年ジャンプだけにして欲しいですよ』」

呆れたように首を左右に振る球磨川

そんな球磨川を、まるで汚物を  
見るかのように神裂は見詰める

「『おいおい無視はカンベンしてくれよ』『それじゃあ僕傷付いて泣いちゃうよ?』」

そんなことを言うが、笑顔の球磨川には説得力が皆無だった

「『ああなんだ』『怪我人の海咲ちゃんを心配してくれてるの?』『それなら大丈夫だよ』」

血塗れで気を失っている琴吹の顔を  
球磨川は手で覆うと、みるみる内に傷が消滅していった

傷も塞がり、流血も収まり、血で汚れていた  
制服でさえ元通りになっていた

まるで、今までの戦闘を『なかったことにした』かのように

「ッ…!（馬鹿な! 魔術による傷は簡単には  
癒えないはずだ! それなのにこいつは…!）」

「『え?』『君は僕が黒幕かと思ってるの?』『うわあ、

想像力の豊かな人だなあ』 『僕みたいな最低<sup>マイナス</sup>が黒幕なわけないだろ？』

『僕はただの屑で』

『最低で』

『理不尽で』

『塵で』

『低脳で』

『マイナスな偽善者<sup>マイナス</sup>ですよ』

それだけ聞き、神裂は球磨川に背を向ける

そして、階段を下りていった

それに便乗し、ステイルも階段を下りていく

「…なんだったんだよ、アイツ等…」

しばらく啞然とし戦いを見ていた上条がそう漏らす

「ちッ、途中で逃げやがって」

不機嫌そうにナイフをポケットに戻す木更津

「『まあまあ』『皆無事だったからいいじゃないか』」

「それでも俺はアイツを殺せなかった。ちッ、  
やっぱ過負荷でも負けるのは気分がわりいな」

「それ以前にまず、お前等は何者なんだよ！  
いきなり現れやがって！」

球磨川たちに向かってそう怒鳴る上条

急に琴吹が現れ、ステイルと戦闘し敗北すると、  
また直ぐに今度は木更津と球磨川が現れた

あまりの展開に上条は着いていけなかった

次から次へと非日常に巻き込まれる上条

魔術師と接触し、さらには過負荷とも接触する

やはり上条当麻は不幸少年だった

「『僕たちは別に何者でもないよ』『ただの  
理不尽な人類最低』『<sup>マイナス</sup>過負荷だよ』」

球磨川は当麻に”マイナス”と告げる

聞いたことのない単語に、上条は疑問符を浮かべる

「マイナス？　なんかの組織か？」

「おいおい、俺たちをそんなものと

勘違いするんじゃないよ。そもそもそんな  
ややこしいことなんか出来ねえし」

「単純な奴らだ…」

木更津の発言に呆れる上条

「『ま』『僕らはただ海咲ちゃんを  
迎えに来ただけだから』『色々と変なこと  
になっちゃったけど』」

「ッ…！　そういえば…！」

上条は何か思い出したのか、  
後ろに倒れている一人の人物へと駆け寄る

今までその存在に気付かなかった球磨川は興味深そうに後を追う

「『うわあ…』」

思わず声を上げる

球磨川の目に飛び込んできたのは、一人の人間

純白の修道服を来たその小柄な人間の周りには、  
血が広がっていた

さっきまで致命傷を負っていた琴吹  
に及ぶほどの傷

放っておけば絶命は確定だった

「『誰これ？』」

「インデックスっていうんだ。今日の朝に初めて会ったんだけど、帰ってきた時に血塗れで倒れてたんだ。早くなんとかしねえと……！」

「『まあまあ落ち着いて』『そんなに焦られちゃこつちも対応できないよ』」

そつと上条を落ち着ける球磨川

「お前、治せるんじゃないのかよ！ さっき琴吹の傷だつて元通りに治したじゃないか！」

言葉が詰まる球磨川

確かに、オールフィクション大嘘憑きならどんなこともなかったことに出来る

たとい魔術によつて負われた傷であろつと、神によつて与えられた病であろつと、それが現実であるのなら虚構なかつたことに出来る

だが、それは普通の人間に使えば、の話だった

インデックスは見たところ魔術サイド

なんらかの魔術が体に施されていれば、

大嘘憑きに不具合が生じ暴走してしまう可能性があった

普段他人が傷付こうと構わない球磨川だが、今は違う

後ろには後輩であり同じ過負荷の仲間が二人いる

もし不具合によりなにかあったら、それこそ  
球磨川は許せなかった

たとえ自分が過負荷であろ、同じ  
過負荷である仲間を傷つけるなんてありえない

だが今日の前にいるのはなんの能力も無いレベル0

球磨川のもットーは”弱い者の味方をする”だ

レベル0の頼み言を、そんなもットーを持ってる球磨川は叶えたか  
った

だが、もしその所為で同じ仲間が傷付くとなると、  
少し考えなければならぬ

「『……』」

「お願いだよ、球磨川先輩！」

「『分かった』『君の願いを叶えてあげよう』『』」

表情を笑顔に戻し、そう告げる

それに上条は喜びの笑みを零した

「『その代わり』『なにがあっても僕は悪くないからね?』」

そう言うとき大きな螺子を球磨川は取り出した

そして、その螺子をインデックスに振り下ろそうとするが

「『わつと』」

「なにやってるんだよ!」

上条が刺さる寸前で球磨川の腕を止めた

「『なにつて』『この子を治そうとしてるんじゃないか』」

「ならなんで螺子で刺そうとする!」

「『僕の無能力のためさ』『それとも僕が信じれないの?』」

そう訊かれると、無言になる上条

球磨川の手を放した

「『じゃあ改めて』」

再び螺子を振り上げると

「ッ……!」

インデックスに深く突き刺した

その様子に、上条は思わず顔を顰める

それを見た球磨川は、笑いながら上条に言った

「『安心して』『僕は人なんて殺せないから』」

疑わしそくに球磨川を見詰めるが、

上条はインデックスを見ると驚愕した

なんと、彼女の傷がまるで初めから『なかったかのように』消えていた

「嘘だろ……」

啞然とする上条

球磨川は満足気に立ち上がり、  
木更津のところへ向かう

階段の入り口には、琴吹をおんぶした  
状態の木更津

「『帰ろうか』」

そうつげ、階段を下りていった



「おい球磨川先輩」

「『なに？』」

自身のアパートへ向かう途中、木更津が球磨川に問いかける

「なんでアイツを治したんだ？ あんな  
魔術師の能力者<sup>プラス</sup>なんか…」

「『<sup>弱者</sup>レベル0の頼みだからね』 僕はそれを助けたに過ぎない』」

「でもだからってマンションまで元通りにしなくたってでもいいだろ？」

球磨川はインデックスの傷だけでなく、マンションの  
損害までもなかったことにしていた

火事によって焼けた痕や、崩落によって  
崩壊していた階なども全て元通りだった

すると、球磨川は満面の笑みを浮かべ、片手でピースサインをしな  
がら告げた

「『サービス』」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1468y/>

---

とある転生者の過負荷（マイナス）

2011年11月24日12時52分発行